

第五章 北濠洲の地政學的考察

第一序 說

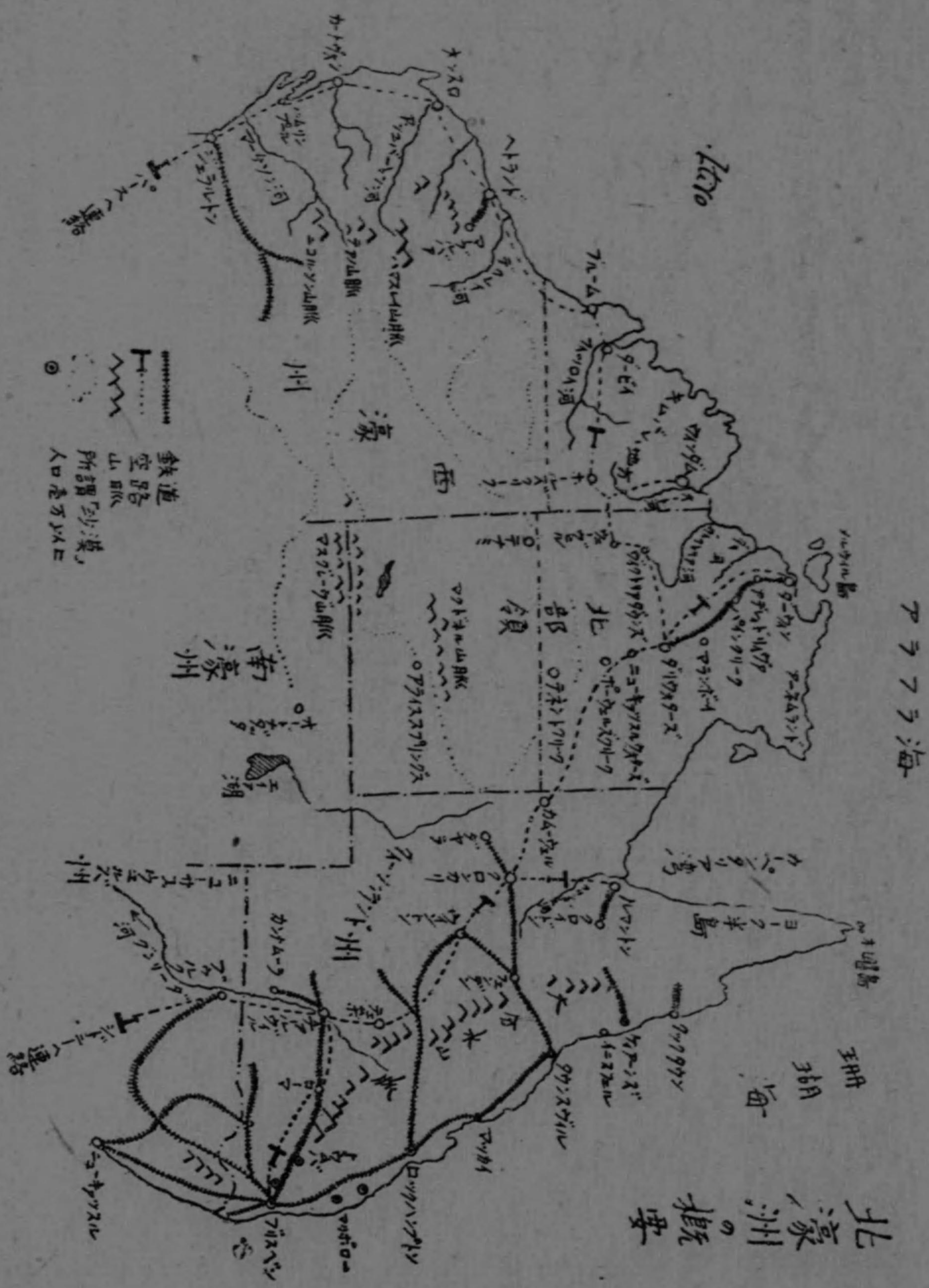
地球表面において、東西的方向に關する限り、世界的陸上交通路線は、今日のところ、北半球においてのみ、これを認めうるのである。それは、日本海から北海、バルチック海にいたるユーラシア大陸横斷路線である。このやうな大規模な陸上横斷路線は、南半球においては存在してゐない。かうした北半球の横斷路線に匹敵する路線は、南半球においては海洋路線を認めうるのみである。この海洋路線は、北半球におけるユーラシア大陸横斷路線に平行するところの海洋路線である。この海洋路線は、濠洲から印度洋を横切り、アフリカ大陸の南端を迂回するか、或はスエズ運河を通過して地中海を經由、北海、バルチック海にいたる海洋路線である。

この海洋路線は、かつて「大英帝國の生命線」と呼ばれ、アングロサクソンの海上制覇の動脈作用を演じてゐた。この動脈を構成してゐた要因として、印度・濠洲といふ二つの經濟的空間重量を無視することを、許されない。また、この重量が、大東亞戰爭爆發前において、太平洋へ如何に壓力を及ぼしてゐたかといふことは、いまだ、ここに繰返す必要もないであらう。英國は、この二つの地盤から生ずる利益を獨占すると同時に、この圏内へ、他國の勢力の滲透し來たることを排除してゐた。そして、大英帝國主義を維持すべく、いはば、英國的遠心的作用を發揮するための前衛的地域として、濠洲の役割を評價してゐた。ヨーロッパ戰爭勃發し、獨伊の樞軸的勢力、なかん

づくイタリヤの海空勢力が、緒戦において、スエズ運河を目指して驀進し來たるやも圖られざる状態を醸した際、英國は、倉皇として、印度と濠洲とを包括して、東方大英帝國勢力圏を構成し、これによつて、印度と濠洲との結合帯の強化をはかり、以て樞軸側の攻勢に對抗しようと試みた。

東方大英帝國勢力圏構成説が傳へられた當時において、濠洲は、印度よりも、より忠實なる構成單位として、英國によつて評價せられてゐた。それは、印度においては、ガンジーが印度人と英國人との平等を叫んで以來、印度は、大英帝國の構成分子として英本國にとつては、甚だしく取扱ひ難き單位となつてゐたに比し、濠洲においては、夙に白人の濠洲、所謂白濠主義が唱へられ、大英帝國の構成分子としては、印度におけるやうな理念的な錯雜さが介在してゐなかつた。

しかし、皇軍の恩威、印度洋に及ぶにいたつては、印度と濠洲との結合は遮断せられ、本來の空間編成を無視したる東方大英帝國勢力圏の紐帯は解消せられるにいたつた。また、ニュー・ギニアと濠洲とを分離してゐる大東亞海の第三部分海洋空間たるアラフラ海に對する皇軍の制扼によつて、濠洲は、濠洲自體が、從來のやうな政治的理念——白濠主義を固執することを放棄し、アジアの生活空間としての本來的形相を取戻すべく要請せられるにいたつた。この意味において、今日の濠洲なかんづく北濠洲は、大東亞共榮圏の漸移空間として認められ、動態的な把握を試みるにおいては極めて劃切な研究對象となつてゐる。



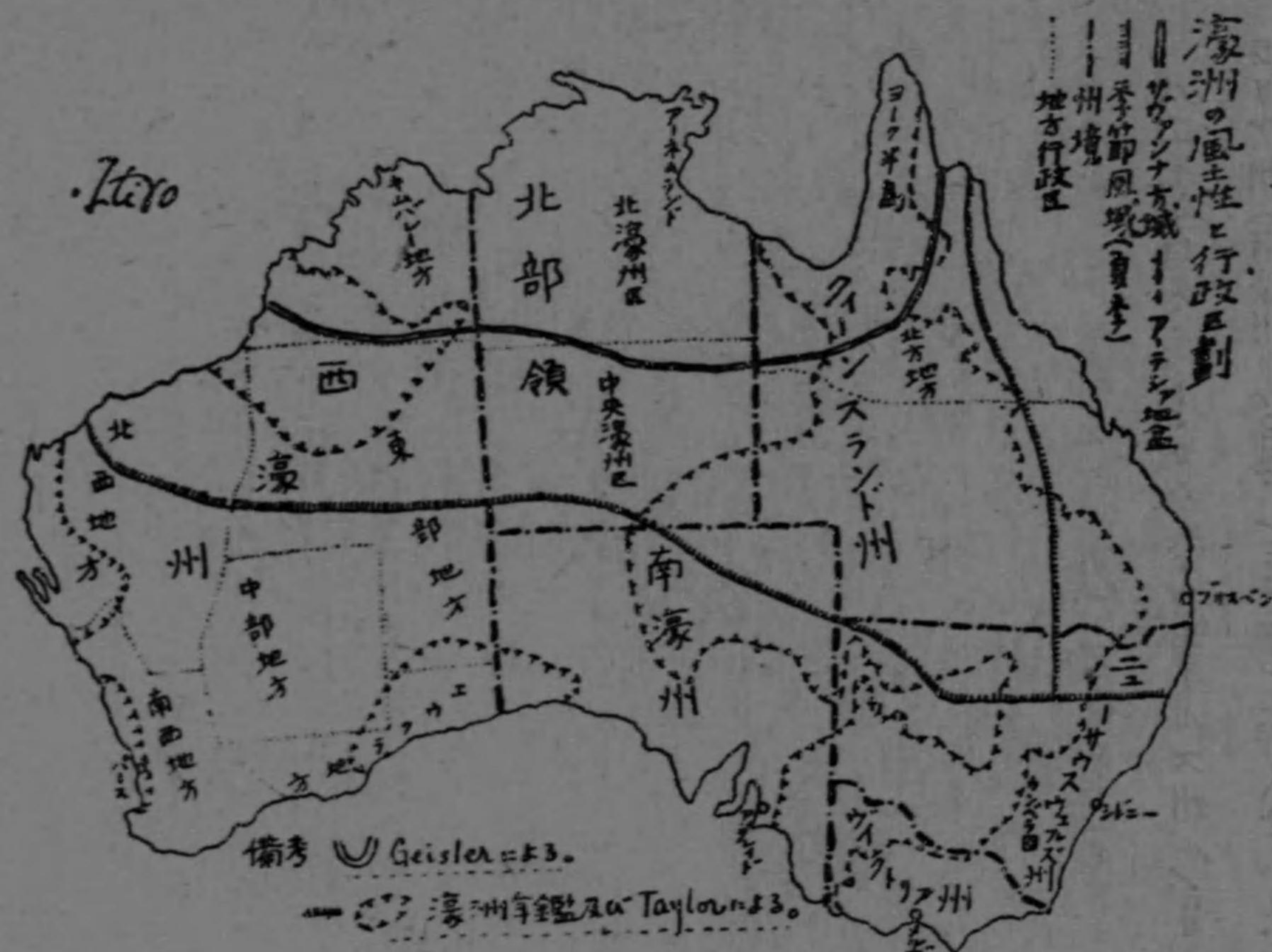
第二十二圖 北濠洲の概要

第二 空間的形像の特徴

濠洲大陸の東岸を縦走するコルディリエラ山系 (Korillere) は、アメリカ大陸のコルディリエラ山系と比較せられてゐるが、本来のコルディリエラ山系は、ニューギニアから新西蘭にいたる系統であつて、この中間部分が沈下してゐるのであり、ニューギニアと濠洲大陸とを分離してゐるのは、すなはちアラフラ海である (註1)。この關係において、アラフラ海と、珊瑚海とを結ぶトーレス (Torres) 海峡の意義は單に、アラフラ海 (Arafura-See) の東闕であるのみならず、大東亞海の東門たるの位置を占めてゐる。この意味において、木曜島並びに、ポート・モレスビー (Port Moresby) の位置が重視せられる。アラフラ海の西南海域はティモール海 (Timor-See) に連なつてゐる。このことは、印度洋への廣大なる照準を具有してゐることを示してゐる。また、昭南島との關係において、ポート・ダーウィン (Port Darwin) の位置價值が重視せられてゐる。

アラフラ海の南岸方域の特徴として、極めて微弱なる肢節化において、三つの半島の形態が認められ得る。すなはち、キンバレイ區域 (Kimberley-Distrik) アーネムランド區域 (Arnhem-Land) 及びヨーク半島 (Yorke-Halbinsel) である。このうちヨーク半島は、北方へ伸長したる形態において最も半島の形態を示現してゐる。このうち、アーネムランドは、所謂、「北部領」 (Northern Territory, Nordterritorium) の北半を占めてゐる。この北部領 (註2) は一八二七年以來ニュー・サウス・ウェールズ州 (New South Wales) の一部であつたのだが、一八六三年、南オーストラリア州 (南濠洲 - South Australia) に併入せられ、一九〇一年、南オーストラリア州が濠洲聯邦に編入せられた際、

第二 空間的形像の特徴



第二十三圖 濠洲の風土性と行政区劃

この方域も亦、南オーストラリア州の一部として、聯邦に編入せられたのであつた。一九〇一年の聯邦憲法制定により、州域を濠洲聯邦政府に編入し得る規定が設けられ、この方域は、一九一一年聯邦政府の統治下に編入せられるにいたつたのである (註3)。

一九二六年、行政上この方域を北オーストラリアと中央オーストラリアとの二つの分州となし、南緯二十度を以てその境界として規定せられた。

その後、一九三三年北部領統治令が制定せられ、南北の二分州を合はして、「北部領」となし、聯邦政府が、行政長官を任命し、今日にいたつてゐる (註4)。その面積は、五二三、六二〇平方哩、わが國の本州に相當する。人口は、ヨーロッパ人、アジア人、原住民を合して二萬人を數ふるに過ぎず、その密度は、一平方哩につき〇・〇五にも達せず、未開拓の大空間たる形相を示してゐる。

註1 Walter Geisler: Australien u. Ozeanien (Enzyklopädie der Erdkunde), Wien, Franz Deuticke, 1939, S. 13.
なほ、ガイスラー博士は、トレス海峡の浅い深度を有つてゐるといふ事象から、ニュー・ギニアと洋洲大陸の結合性を認めてゐる。

註2 J. W. Gregory: The Menace of Colour, 1925, pp. 160—161.

註3 Official Year Book of the Common Wealth of Australia, No. 29—1936, pp. 1—2.

北部領を聯邦直轄領に編入しようといふ提案は、一九〇七年十二月七日に提案せられ、一九〇八年五月十四日に南洋州議會を通過してゐる。聯邦議會を通過したのは一九一〇年十一月十六日であり、直轄領としての宣言が行はれたのは、一九一一年一月一日であつた。

註4 Official Year Book, No. 29—1936, p. 357.

すなはち、行政長官は、ポート・ダーウィンに駐在し、副長官はアライス・スプリングス (Alice Springs) に駐在する。

註5 北部領の人口は前掲年鑑によれば、次の如くである。(三五六頁)

一九三三年六月三十日の國勢調査において、男性三、三七八人、女性一、四七二人、計四、八五〇人であり、一九三五年における官廳統計は男性三、四八二人、女性一、六〇九人、合計五、〇九一人と記されてゐる。北部領における榮落中、都市または町として前掲年鑑に掲げられてゐるものは、ダーウィン(二千五百六十六人—一九三三年の國勢調査による)のみである。西洋洲の行政管轄区内に編入せられてゐるキムバレイ區においては未だにダーウィンに相當する都邑を形成するにいたつてゐない。また南緯二〇度以北のクイーンズランド州(この場合には、ヨーク半島を包括することができる)における都邑としては珊瑚海岸においてタウンズヴィル (Townsville) —二萬五千八百七十六人、ケイアンズ (Cairns) —一萬一千九百三十三人を數ふるに過ぎない。(數字は前掲洋洲年鑑四〇三頁による)

第一 土壤的要素 これらの地域は、殆ど土地の開発が行はれてゐない(下調相にメラチン層 (Mulligan Series) が

擴張してゐる。この地域の地層は「原生代」と同様に「古生代」に屬する。かうした地層の存在するが故に、礫石や砂岩や片岩を伴ふてゐる。その後、二疊石炭紀において、メラチン層があらはれ、砂岩が堆積した。この砂岩は、殆ど認むることのできぬやうな傾斜において、九〇マイル海岸を軸として、フィツロイ河 (Fitroy) とディクリー (De Grey) 河との中間空間から洋洲内陸へ擴張してゐる(註1)。

アーネムランドは固より、キンバレイ區域、パークレイ臺地、フィツロイ河流域並びにオード (Ord) 河流域の地盤は、所謂、黒土を構成するに適當しない。そして紅土層があらはれてゐる。これは所謂「洋洲の硬質地殻」(Hartkruke) と稱せられてゐるところのものである。寒武利亞紀の珪岩、砂岩、白雲岩の存在するが故に、黒土の形成を期待することを得ないのである。かうした紅土の構成は、北方地域においては、大いなる範圍にわたつて存在してゐるのであるけれども、アーネムランドの北方地域並びにヨーク半島の東部海岸においては、これを認むることを得ない。また、内陸においても紅土を認むることが出来ぬ。さらにまた、アーテシヤ盆地 (Artesische Becken) においても、紅土の存在を認め得ない。灰土も褐土も、氣候が餘りにも乾燥しきつてゐる關係上、黒土を形成するを得ないのである。かうした土壤には、粘土層を形成せんとする傾向は、殆ど示されず、炭灰石灰から生ずる礫核が地表に密着し、時には硫酸石灰層(石膏的皮殻)を形成することもある。かうした地衣は、サヴァンナカ域 (Savanne) においては、重要な地盤として、注目せられてゐるのである。かつて、洋洲聯邦政府は、ニュー・サウス・ウェルズ州のマラムビヂー (Murrumbidgee) において米作を試みたことがあつた。この試作地土壤は、粘土一四・七%、砂一五・七%であつて、かうした土壤の組成は、サヴァンナ地域のそれと同様であると解せられてゐる(註2)。

加ふるに、マラムビヂェーの米作は、一九二五年以來、漸く成果を發現し米たつた事實(註3)に徴すれば、サヴァンナ方面においても亦、米作の可能性を考究し得る段階に達しつつあると論じ得るであらう。

沿岸方面においては、鹽分を含有せざる灰土が存在してゐる。この灰土は、沙漠においても、然らざる方面においても見出される。この灰土は、純粹且つ粗粒の砂九三%と泥土とにより組成せられ、泥土が時に二五%を占めてゐることもある。かうした土壤が土地開發に寄與することは、いふをまたぬ。

註1 Geisler: S. 17—18.

註2 Geisler: S. 41.

註3 Official Year Book: P. 676.

一九二五年において一五三英反において一六二四〇ブッシュェルの收穫を見た。一英反當り一〇六ブッシュェルであつて、ラビヂェーにおける試作結果、米に關する限り、國內需要を充足するにいたつた。

註5 Geisler: S. 41.

第二 風土性 北方方面においては、山脈の障壁が存在しないので、北風が、この方域一帯を、モンスーンの状態において吹くのであるが、その濕氣は、濠洲大陸の胴體に滲透し得ない(註1)。

これらの胴體を除いた濠洲の北方區域は、乾燥地域に位し、夏季において降雨を見るのである。乾燥氣候がステップ氣候へ推移する限界は、ハッキリはしてゐない。このことは、灌木の成長如何によつて判斷するより外ない。すなはち、降雨量が二五〇ミリから五〇〇ミリに、増大することによつて、この推移が示されるのである。かうした地域において、アーテシヤ的井戸(Artésische Brunnen)が存在する場合には、牧畜經濟を強行し得る(註2)。北方

の半島方面においては、降雨性が確實であるから、農耕地域を見出し得る。ここにおいて、旱魃問題が重視せられるのである。かつてグリフィス・ティラー教授が、降雨の平均偏差を調査して報告した(註3)。すなはち、同教授は、最も確實な降雨性を〇%において示したのであるが、濠洲大陸の南部において、廣汎な範圍にわたつて、小麦耕作の行はれる地域においては、一〇乃至二〇%の降雨性があり、内陸へ入るに従つて、降雨性が稀薄化する。南濠洲並びに中央濠洲の境界方域、北西海岸のオンスロ(Orişlow)附近においては五〇%といふ、極めて不確實なる降雨性を示してゐる。コルディリ、ラ山系の南方方域以外においても降雨性は極めて稀薄であり、クィーンズランド方域の如きは、二〇—四〇%である。この傾向は、北方へ赴くに從つて強化し、ヨーク半島並びにアーネムランドの尖端においては、殊に甚だしいのである。また、沙漠方域以外においても所謂「熱風」(Gutwind)が吹く。この熱風は北から南へ方向において出現する。そして植物の成長を阻害する(註4)。

次に、濠洲北方方域の個々の部分空間においても亦、降雨量の多寡を區別し得るのである。濠洲北方方域中、最も降雨の多量と認められてゐる方域は、タウンズヴィルとケイアンズ(Cairnes)との間において、比較的廣範圍にわたつて認められる。北端方域を除いたヨーク半島一帯においても、亦同様の事象を認め得る。この方域においては、冬季においても雨量を見、一箇月間における降雨量は二五ミリ乃至五〇ミリである。ケイアンズの毎年度降雨量は四二〇六ミリ、マツカイにおいては、一九一三ミリ、ケイアンズ南方のインニスフール(Innistull)に於ては三五五六ミリである(註5)。

さらに、濠洲北方方域においては、霜害が存在してゐない。このことは、甘蔗栽培にとつて、極めて有力なる要

因である。ロックハムプトン (Lockhampton) においては六月、ロックハムプトン以南の区域においては、六月から八月にいたる期間を除き、甘蔗栽培については、霜害を警戒するを要する。八箇月間乃至十一箇月間にわたつて降霜を見るからである。

濠洲北方区域は、熱帯に属する。しかも、この大陸の東部縁邊を南北の方向に縦走する所謂、オーストラリア・コルディリエラの影響を受け、濕潤的熱帶溫度を呈する。かうした氣温にはヨーロッパ人も馴應し得る。ロックハムプトンの平均溫度は、ポート・ダーウィンのそれよりも六度低い。それ故に、ヨーロッパ人は、ダーウィンよりもロックハムプトンに居住することを好むのである(註6)。しかしヨーロッパ人が果してロックハムプトンに恒久的に定着居住するであらうかといふことについては、別箇の視角から考察せられなければならぬ。何んとなれば、ヨーロッパ人が、濠洲において最初の植民地シドニーを設定したのは漸く、一八八三年のことであり、従つてロックハムプトンが、ヨーロッパ人の定住地として恒久的妥當性を具有するか否かといふことは、前述のやうな、單なる氣温の比較によつて、これを結論づけることは、なほ、尙早であるからである(註7)。かうした区域における熱帶的氣候は、學者によつては、サヴァンナ氣候 (Savannenklina) と名づけられてゐる(註8)。かうした名稱が與へられた所以は、濕潤性と乾燥性ととの兩季節の存在することを端的に表示してゐる。すなはち、モンスーン氣候としては夏季における降雨期が存在し、また、乾燥せる濠洲の内陸からの風が北方の方向へ、すなはち、アラフラ海上へ吹く場合においては、乾燥期が繼續するのである。かうした乾燥期は、この区域の南部においては、四月において逸早くも認められ、五月から九月にいたるまでは、この区域全面にわたつて、完全なる乾燥性が支配するのである。

アーネムランドにおいては、十月において、漸く七五ミリの降雨量を認むるに過ぎない。十二月から三月までが、本來の降雨期であり、一箇月二二五—二五〇〇ミリの降雨量を見る。すなはち、濕潤氣候が、この全区域を支配する。従つて、河谷は激流奔騰し、殆ど、これを横斷することを得ざるにいたる。かうした氣候の経過に引續き乾燥期が到來する。硅酸化せられた寒武利亞紀の砂岩が未だ殆ど土壤地盤を構成してゐない關係から、熱帯農業の經營は、島嶼的形態において行はれ得るに過ぎないのである。しかし、沿岸区域における毎年度降雨量は、比較的に多量である。ダーウィンにおいては、一五六八ミリを算する。内陸へ入るに従つて、この雨量は減少する。クロンカリー (Cloncurry) におよぶは、降雨量五六〇ミリであり、氣候一箇年を通じて二十五度以下に下降することは、殆どあり得ない。それ故に、ヨーロッパ人は、この区域において、久しきにわたつて居住することができないのである。この大陸の開発について果してヨーロッパ人は、適格者であるか否か。かうした事象は、この問題の將來にとつての大なる課題の一つたるを失はぬ。

註1 Geisler: S. 24.

註2 Geisler: S. 30.

註3 Geisler: S. 32.

註4 Geisler: S. 33.

註5 Geisler: S. 34.

註6 ガイスラー博士も未だこの問題については、結論を附してゐない。(前掲註同頁)

註7 Geisler: S. 34—35.

註8 サヴァンナ氣候と名付けたのはケオクペン博士 (Koepfen) であることはいふまでもない。

註9 Celsler: S. 34-35.

第三 サヴァンナ地域と生活空間

濠洲聯邦を構成する州のうち、西濠州は、その總面積一、七三六、五〇八平方千米を有し、濠洲大陸の殆ど西半部を包括してゐる。このうち、本来、西部地方として取扱はるべき區域の面積は、一、二八六、〇〇〇平方千米に過ぎない。残餘の區域はキムバレイ區(一五五、〇〇〇平方千米)及びフィツロイ河並びにオード河地域及び東部區域である。ここで、先づ論及すべき地域は、キムバレイ區域及びフィツロイ河並びにオード河地域における所謂サヴァンナ地域である。この空間すなはち、キムバレイ區は、西濠州の州都ペリス(Peiris)の背後地たるシュワンランド(Schwanland)(行政上の區劃における所謂「南西區」)に對して、その地理的要素における結びつきを、殆ど具有してゐないと論じて、敢へて過言ではない。西濠州の北方地域である前述の二つの空間の南西區に對する關係は、全く、名目的な行政區劃的結びつき以外の何ものでもあり得ない。交通すらも、陸路を利用せず、海岸線に沿うての航空機による連絡或は沿岸航路によつて行はれてゐるのである。かうした事象は、サヴァンナ地域と南西區(South West Division)とが、全く異質的の地域たることを示してゐるのである。しかも、このサヴァンナ地方は、他の地域との連絡關係において濠洲大陸内陸部との連絡を除いては、殆ど杜絶、離隔の状態におかれてゐる。この地域から濠洲内陸部への交通關係よりも、濠洲東部、すなはちクイーンズランド州から、西方への交通關係におい

て、より良好な條件に恵まれてゐる。すなはち、バークレイ臺地(Barkley Tableland)から、クイーンズランド平原にまで草原が伸長してゐる關係上、ダリーウ・ウォーターズ(Daly Waters)——キッモウ・ルー——(Camooewal) クロンカリ(Cloucury)——ウイントン(Winton)間の交通は、ダリーウ・ウォーターズ——アライス・スプリングス間のそれに比して、容易である。この要因は、西方に存在するやうな大沙漠が、東方に存在しないからであつて、沙漠は、西方において、正に遮斷的作用を發現してゐるのである。これに反し、前述のやうなダリーウ・ウォーターズ——ウイントン間の交通にとつては、アラント沙漠(Aranta)は、はるかに南方に位し、東部地域の中央部分に對しては、閉鎖的位置を占めて遮斷的作用を發現し、この地域を分離してゐる。しかしながら東部地域の北方部に對しては、何等の障礙を及ぼしてゐないのである(註1)。

乾燥期が久しきにわたるが故に、石英、白雲岩から成立つてゐる岩石から、泥土の形成せられることが阻害せられる。それ故に、泥土は、低い谷地においてのみ存在してゐるのである(註2)。

サヴァンナ森林地域は、キンバレイ、アーネムランド並びにヨーク半島にわたつてゐるが、これらの地域は、いづれも牧場地域としての開發が可能なりや否やが、問題視せられてゐる。また、内陸のサヴァンナ草地においても、牧場地域を設定し得るや否やが検討せられてゐる。

しからば、サヴァンナ地域において農作は可能であるか。

熱帶的農業果樹栽培は、かうした地域の各地においてのみ、可能視せられてゐる。サヴァンナ草地においては、豊富かつ廣汎なる水平的粘土層が存在してゐる。すなはち、これらの地域は、降雨期においては氾濫状態を現出し、

乾燥期においては、灼熱的陽光を受けて、乾燥せる泥土の大平原を展開する。従つて、若し、降雨期直後、或は乾燥期に、この方域を旅する者は、淺瀬、湖沼のみの方域であるといふ印象を受けて、かうした方域の開発性を否認するのである。——しかしながら、若干の方域においては、その灌漑施設を整備することによつて、農作を可能ならしめ得るといはれてゐる。

次に、かうした平原的なサヴァンナ草原方域において、定住は可能であるかといふ問題が存する。今日は、一般的に粘土層が存在するの故を以て居住が行はれてゐない。僅かに、電信基地として、孤立的に残存してゐる聚落として、ポーウニス・クリーク (Powells Creek) その他二三を認むるのみである。

また、西部サヴァンナ方域として区分せらるべきフィツロイ河方域においては、サヴァンナ森林方域が展開せられてゐるのであるが、ここには、ハルス・クリーク (Halls Creek) がある。さらにまた、東部サヴァンナ方域には、高地的バークレイ臺地が包括せられるのであるが、ここには、聚落としてキャモウニル (Canooewal) がある(註3)。

サヴァンナ方域は、その南方の方域におけるよりも、北方の方域における統一性の方が強い。しかも、この北方の方域においては、三つの半島の方域の肢節化が、地形的に區劃せられてゐる。すなはち、カーペンタリア灣によつてヨーク半島が區劃せられ、オード河によつて、キムバレー區が區劃せられてゐる。この三つの半島の肢節化は、その地理的形態の構造においては、共通性を具有してゐる。すなはち高原性を有する割れ目の多いサヴァンナ森林高原地である。この性格は、キムバレー區において著しく、ヨーク半島においては微弱化する。また、沿岸の肢節化においては、キムバレー區の沿岸には、フォルド式の入江が多く溪谷的深溝的であり、マングローヴで縁どられ

た入江の状態は、極めて特徴的である。干満の差、殊に甚だしく、この間サンヒーサウンド (Yami-Sound) の鐵橋を積み出すべき船舶は、ブルーム港 (Broome) において待避するといつた有様である(註4)。アーネムランドの沿岸には、開放的な灣形が認められるのであるが斷崖が多い。このことは、陸地が垂直に沈下せるためであるといはれてゐる。メルヴィル島 (Melville) とバースト島 (Bathurst) とは、その位置並びに形態において、かつて、大陸の一部であつたものが、河川の溪谷と陸地の沈下によつて、分離したのであると論斷せられてゐる(註5)。

ヨーク半島は、その傾斜面を太平洋に向けてゐる。太平洋沿岸においては、沿岸の段階化が認められる。また盆地的入江が存在し、これらの入江は、いづれも、北方に對して開放的である。これに反し、カーペンタリア灣の沿岸は極めて單調であり、入江を認め得ない。従つて注目せらるべき海港は存在してゐない。この灣の南東隅にノーマントン港 (Normanton) があるが、マングローヴの沿岸から、約百軒の距離に位置し、重視せらるべくもない。

註1 Geisler : S. 91.

註2 Geisler : S. 91—92.

註3 Geisler : S. 92.

註4 Geisler : S. 92.

註5 Geisler : S. 93.

第四 生活空間としての三方域の特殊性

これらの三つの半島の内部における居住の稀薄なることは、ここに改めて論及する必要を見ない。しかし、生活

空間として、三つの半島の内部における特殊性をここに検討する(註1)。

(イ) ヨーク半島のカーペンタリア灣に面する方域においては多くの沿岸河川が存在してゐる。のみならず、この方域においては、モンズーンによつて、比較的豊富な降雨を見る關係から、これらの方域は、牧畜地域として可能であると觀察せられてゐる。なかんづく、沿岸方域が有望視せられてゐる。土着の住民は、ヨーク半島北端並びに北東方域において居住してゐる。

(ロ) アーネムランドにおいては、その北東方域は、殆ど自然空間として、放置せられてゐる。これに反し、中央方域においては、銅、錫の産あり、従つて、パイン・クリーク(Pine Creek)やマランボーイ(Murrumbidgee)のやうな鑛山部落が存在してゐる。これらの部落は、ニューカッスル・ウォーターズ(Newcastle Waters)を經由、ダーウィンへ聯絡してゐる。ダーウィンからダリー・ウォーターズまで、鐵道が敷設せられてゐるが、この鐵道は、中央濠洲のステュート(アライズ・スプリングス)まで連絡しようといふ意圖を以て、建設せられた。もし、この間の連絡が完成すれば、この大陸の南北縦貫鐵道(ポート・ダーウィン—アデレード間)の實現を見るのであるが、この連絡完成への意思は、しかく熾烈ではない。

(ハ) キンバレイ區は、その内部方域は、殆ど高原である關係から無居住地地域であるといつても敢へて過言ではない。この高原を包圍的に流れてゐる河川方域は、いづれも急傾斜の溪谷である關係上、陸上の聯絡は、往々杜絶する。従つて、この方域、なかんづく、フィツロイ河方域、ヴィクトリア河(Victoria)下流は、土着の住民のためには與へられた上地空間であると稱せられてゐる。もとより、これらの住民数は判明しない。

さらに、またサヴァンナ方域における沿岸都邑も亦、極めて微弱な存在である。住民一千人を數へたる場合において、かうした都邑は「大都市」と稱せられなければならぬ。かうした都邑としてブルーム(Broome)、ポート・ダーウィン(Port Darwin)ダービー(Derby)ウインダム(Wyndham)及び木曜島がある。

ブルーム並びに木曜島は、眞珠採取の基地である。漁業基地としての沿岸構成は、ブルームよりも木曜島が優れてゐる。ブルームにおいては、屢、漁船が難破する。これに反し、木曜島はトレス海峡によつて、自然的に防護せられてゐる。従つて漁業基地としての機能において優れてゐる。しかし氣候は良好ではない。ダービー並びにウインダムは、いづれも、その背後地に對應しての海港である。すなはち、フィツロイ河の草原に對應するダービー港、オード河流域に對應するウインダム港である。ウインダム(人口一千人)には、西濠洲政府によつて屠牛場が設けられ、ヨーロッパへ冷肉が積出されてゐたのであるが、この事業は、乾燥期に限つて運営せられてゐる(註2)。

最後に、ポート・ダーウィンの機能について若干の記述を試みよう(註3)。

ダーウィンは、一八七〇年に建設せられた。これより先一八六五年、ダーウィン南方において、アデレード・リイヴに、一つの聚落を見たのであるが、一年後に廢止せられた。濠洲當局は、ダーウィン港の構築によつて、ジャワへの經濟的進出の門戸たらしめんと意圖したのであるともいはれてゐる。しかし、これがためには、當然に、ダーウィンの背後地たるサヴァンナ草原の未采的繁榮を豫定しなければならぬ。しかし、今日のダーウィンはこのやうな期待に添ふべくもない。かつて設置せられた屠牛場すらも、勞力不足の故を以て、閉鎖せられた。住民は僅かに、一千人に過ぎぬ。前述したやうな南北縦貫鐵道が完成せられサヴァンナ草原開發の勞力が充足せられるならば、

或は經濟的見地からダーウィンの位置は重要視せられるかも知れぬ。しかし、從來、濠洲政府は、經濟的見地に關する限り大陸の南東方を重視した。それ故にダーウィンは「裏門」的存在でしかあり得なかつたのである。住民は主として行政關係の官吏である。濠洲とジャワとの海上交通は、濠洲南東海岸の海港（シドニー、メルボルン等）から發航、トールス海峡を経るか、或は、濠洲西海岸、パースを發航しブルームに寄港して、ジャワへ赴いたのである。西海岸より發航する船舶は、かつて、ダーウィンへ寄港したのであるが廢止せられ、ダーウィンへ寄港する船舶は、主として、パース—ダーウィン間の西海岸近海航海に従事する船舶に限ることに指定せられた。ここにおいて、ダーウィンは、軍事的基地としてのみ、存在根據を確保するにいたつたのであつた。冒頭に述べた如く、昭南島—木曜島—モレスビー—の結びつきにおいて、その機能を發現し、これによつて、アラフラ海と北濠洲との空間防衛を策したのであつた。

以上、北濠洲の地政學的輪郭を素描することにおいて、その素描の範圍からだけでも、われわれに、大きな地政學的課題が與へられる。

濠洲政府は、その國土の北半を、全く放任し、その地政學的成長を阻止してゐたのではなかつたか。

行政上、西濠洲に編入せられてゐるキムベレイ區の空間は、既述の如く北濠洲空間に結びつかんとする。また行政上クイーンズランド州に編入せられてゐるヨーク半島方域も亦、北濠洲空間に依存しようとする。すなはち、この三方域（サヴァンナ方域）を緊密に綜合化することによつて、空間編成は、地政學的成長力を發現し來たる。このことは、國土の動態的發展生成の一要因であることを認め得られる。しかるに、濠洲の爲政者には、この點につ

いての正しい認識が缺けてゐたやうである。端的に表明すれば濠洲聯邦における行政組織において、地政的綜合要素を、とり入れることにおいて甚だしき認識不足を敢へてして顧みなかつたと論じ得る。

クイーンズランド州の面積は、極めて廣汎にわたり、その北方は熱帯に及んでゐる。しかるに、州都ブリスベインの位置は極端に南東に偏してゐる。この州都とアーテシア盆地の存在するサヴァンナ方域並びに熱帯降雨林區に位置するタウンズヴィルとは著しく遠隔の距離にある。北部方域における經濟的發展は、南部のそれに比して、全く異なる條件の下におかれてゐると斷ぜざるを得ない。タウンズヴィルから、サヴァンナ方域を觀察することによつて、初めて、この方域に對する適切なる空間措置を講ずることができるのである。州都ブリスベインにおいては、サヴァンナ方域との距離餘りに遠隔に失するが故に、これらの方域に對して適應する空間政策を實施し得ない。さらにまた濠洲大陸西半部全體が、西濠洲といふ龐大な一行政區劃として統合せられてあるといふ不均衡な事實を想起する必要がある。それに故に、この課題に對する答解として、サヴァンナ方域を一體として統合することこそ、適切なる空間編成であり、地政學的に可能なる基礎に立脚してゐると論じ得るであらう。

もとより、濠洲聯邦政府は、北濠洲方域の開発を全然、等閑視してゐたと論定することはできぬ。畜産業の發達を目標とする北濠洲鐵道設計畫案の如きは、かうした意圖の表現として解せらるべきであらう。この設計畫は、クイーンズランド州のダヤラ（Dajarra）（クロンカライ南西部にあり）からランキン（Rankine）（パークレイ臺地にあり）まで延長し、北西海岸から内陸へ建設せられたる二鐵道線に連絡せんとするのである。この二鐵道線の一は、ダーウィンから南下せる所謂未完成縱貫鐵道線であり、ダブリー・ウォーターズにおいて連絡せんとし、他

の一線は、ウィングダムからオード河に沿ふて計畫せられてある線であり、この線には西濠洲の州境ミストーク・クリーク (Mistoke-Creek) において結びつかんとするのである。この連絡系統は、サヴァンナ方域における三つの行政單位を想定して、その統一的企畫の一徵表であり、ここに熱帶的北濠洲の共通的性格を認め、東西的連絡の重要性を、交通地理的に微弱ながらも認めてゐるのである(註4)。

かうした妥當性ある開發計畫が存するにもかかはらず、濠洲が、偉大なる陸地空間に相當する地政學的成長力を發現し得ないのは何故であるか。もちろん、前述の如く濠洲の陸地巨像は、その包蔵する種々なる自然的地理的所與によつて、開發を阻止されつつある。しかしながら、この陸地巨像の活力の微温なる所以のものは、この土地空間へ闖入し來たつた英國的勢力の闖入立置及びその方向に關聯し、同時にまた、この土地空間の擔當者である英國的濠洲人が自力更生力において缺くところがあるからであり、このことが、一つの大きな要因であるといひ得る。このことは、英國的濠洲人が、この大陸の氣候、風土に適應馴化し得るや否やといふ問題と關聯して來る。同時にこのことは、白人濠洲主義との關聯において究明せられなければならぬ。

註1 Geizler: S. 93.

註2 Geizler: S. 93.

註3 Geizler: S. 94.

註4 Geizler: S. 116-167.

第五 英國的勢力の闖入

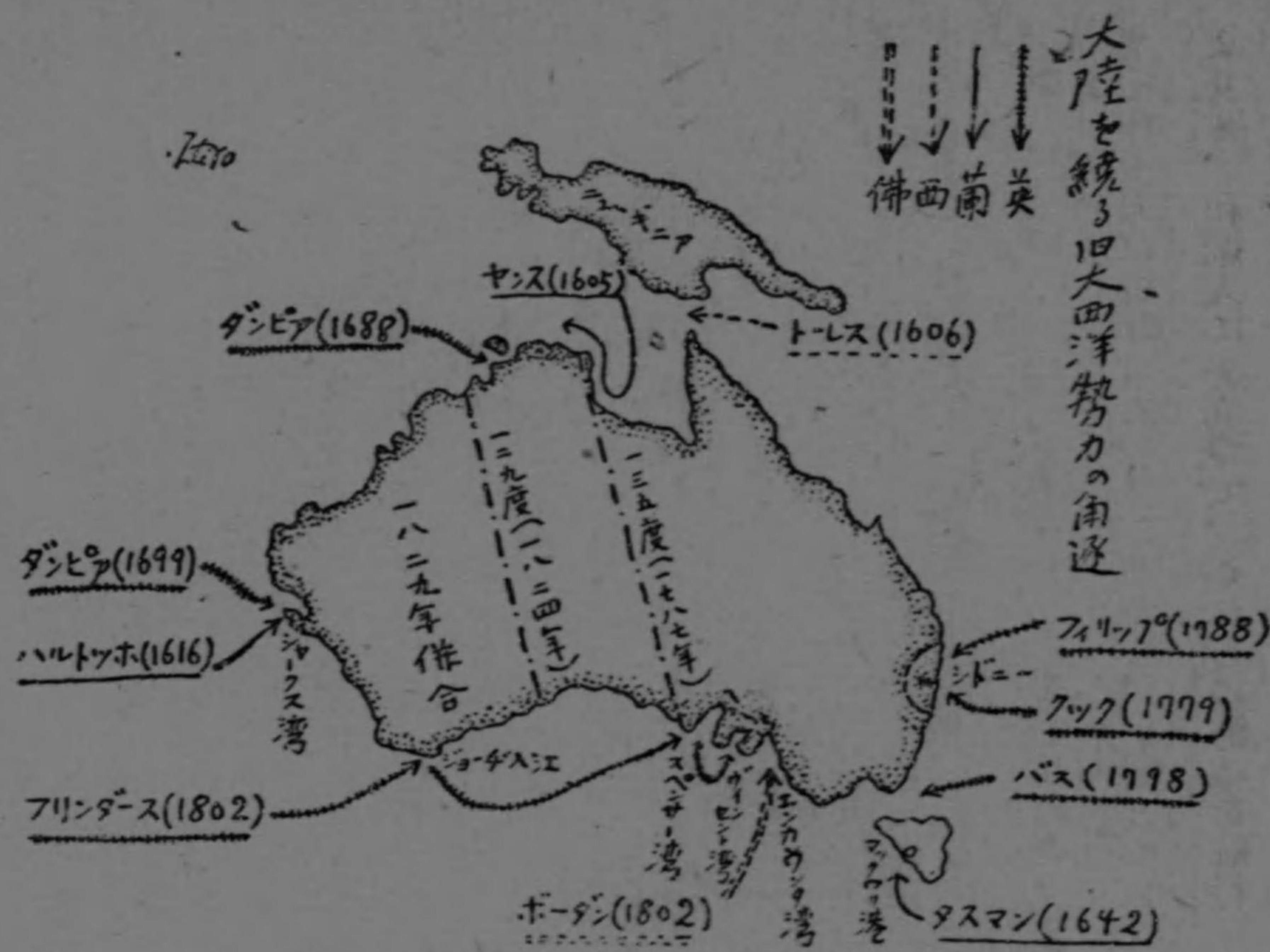
しからは、英國的勢力は、加何なる過程を辿り、この大陸に闖入し、加何なる滲透力を、この大陸の國土に示現し得たか。

ヨーロッパから東方への通商路としてのユーラシア大陸中央部の東西的貫通は、沙漠、山岳、湖沼などの自然的障碍によつて妨阻せられてゐることが、マルコ・ポーロの東方見聞録によつて、ヨーロッパ人一般の常識となつた。それ故に、東方への唯一の路線は、南方の海洋路線であると認識せられてゐた。この南方海洋路線の媒介者は、十七世紀にいたるまで、アラビア人であつた。今日においても、アラビア人の足跡は、マライ半島を經由、さらに東方に延びてゐた證左が残つてゐる。このアラビア人達が、今日、濠洲といふ名稱を以て呼ばれてゐる大陸を知つてゐたか否かといふことは、蓋し問題であらう(註1)。

一四八九年に作製せられた地圖(大英博物館所藏)には、喜望峰を通過する緯線、モルッカ諸島の南方海域に、陸地の存在することを示されてゐるが、この地圖は、葡萄牙人によつて教へられたものであらうといはれてゐる。その頃、既に、葡萄牙人は、濠洲大陸の西海岸へ到達し得たであらうとは、グリフィス・テイラー教授 (Griffith Taylor) の論斷するところである(註2)。

喜望峰へ、初めて、到着したのはディアズ (Diaz) であり(一四八七年)、その後十年、ヴァスコ・ダ・ガマ (Vasco da Gama) が、印度への航路を完成したのである。この航路の完成によつて、ヨーロッパにおいては、中

世紀時代の「南の大陸」(Terra Australis)といふ思想の復活を促進した。テラ・アウストラリスとは、地球の北方にアジア、ヨーロッパの大陸が存在する以上、地球自體が、その均衡・安定を保持するために、南方にも亦、大陸が存在しなければならぬといふにあつた。しかし、この思想の具體的復活は、十六世紀末以降と見られてゐる。一五七〇年、アムステルダムにおいて、オルテリウス(A. Ortelius)によつて出版せられた地圖には、印度洋を内陸海として規定し南方に大陸が存在し、この大陸は、ジャワにつらなつてゐるとなしてゐる。また、一五八七年、パリにおいて出版せられた地圖には、スンダ諸島に連續する陸地空間として、ニュー・ギニアの北岸と西岸との一部が記されてゐる。しかるに一五九四年、アムステルダムで出版せられた地圖においては、テラ・アウストラリス(南の大陸)が記入せられてゐる。もとより、この「南の大陸」の地圖的輪郭は恣意的に作成せられたものであつて、實地的檢證の結果作成せられたものではない。その翌年、倫敦在住の和蘭人ホンディウス(Hondius)が、フランシス・ドレイク(Francis Drake)の遠洋航海のために作製した地圖においては、今日のニュー・ギニアの位置が、殆ど正確に記入せられてをり、ニュー・ギニアの南方、海峡を隔てて、テラ・アウストラリスが描出されてゐる。和蘭人の東洋に回航したのは、一五九五年五月、コルネリウス・ホウトマン(Cornelius Houtman)であつて、一五九五年五月、四隻の帆船を率ゐて喜望峯を迂回し、印度西海岸ゴアにいたり、さらにジャワ、モルッカに赴き、一五九七年七月に歸國したのであるから、和蘭人のテラ・アウストラリスに關する知識は、むしろ、和蘭人直接といふよりも、和蘭人に先立つて、これらの海域を航行した葡萄牙人或は、葡萄牙船に乗組んだ和蘭人によつて傳へられたものと解せられる(註3)。



第二十四圖 大陸を繞る舊大西洋勢力の角逐

次に、テラ・アウストラリスに初めて足跡を印したるヨーロッパ人は、ウィレム・ヤンズ(Willem Jansz)で、一六〇五年 Duyfken 號に乗つて、ニュー・ギニアの南岸にいたり、さらに、トーレス海峡を通過せずして南下し、カーベントリア灣の西海岸、南緯約十四度の地點に到着した後、北西航路をとつてジャワに歸へつた。この一行はヨーク半島をニュー・ギニアの陸地の延長部分であり、トーレス海峡を通過して南太平洋へ航行し得るものと誤信したのであつた。しかるにその直後、西班牙の探検家トーレス(Luis Vaez de Torres)は、フィリッピンへ航せんとしてニュー・ギニアの南東海岸を航行し、北進せずして西方への航路を進み、濠洲とニュー・ギニアとの中間の海峡(トーレス海峡)を通過し、モルッカ諸島を経由マニラに到着した。この航路については、西班牙側が秘密に附してゐたものの如く、一七六二年、英國人がマニラに侵入

した時、没收した地圖によつて、一般に知られるにいたつた。この海峡を一七七〇年にクックが通過したのである(註4)。

さらに、一六一一年和蘭人ブルーウェル (Hendrik Brouwer) はジャワに赴かんとし、喜望峰を迂回して航路を東方にとり、順風に乗じ、約三、〇〇〇哩を航行、次いで航路を北方に轉じてジャワに到着したが、この航路によれば、約九箇月を要した和蘭—ジャワ間の航程を六箇月に短縮した。この結果、和蘭船によつての濠洲大陸西海岸の發見は、必至的狀態におかれるにいたつたのである。なんとすれば、喜望峰から濠洲大陸南西端のレ・ウイン岬 (C. Leeuin) までの距離は、四、三〇〇哩である。それ故に一六一六年この大陸を究めんとして、エーンドラハト號 (Eendragt) に乗じて東航したディルク・ハルトツホ (Dirk Hartog) は、十月二十五日シャークス灣 (Shark's Bay) の一島に到着したのである。彼は、この島に自己の名稱を與へ上陸記念表を残し二日後に出帆したのであるが、この上陸記念表は、その後八年、ゲルフィンク號 (Geelink) の船長ヴラミング (Vlaming) によつて發見せられた。ここにおいて、アムステルダムにおいて出版せられた地圖には、濠洲大陸に「エーンドラハト大陸」といふ名稱が記入せられ、その後この大陸を「新和蘭」(ノイ・ホーランド) と呼んだ。これを契機に、濠洲大陸の西海岸は、ヨロロッパからジャワへの航路のうちにとり入れられるにいたつた。それ故に西海岸ではデ・ウツ・ランド (De Witt's Land) や、レ・ウインスランド (Leeuwinland) 等の和蘭船名が、地名として残されてゐる(註5)。

その後、タスマン (Abel Tasman) が、和蘭の東印度會社總督ヴァン・ディーメン (Van Diemen) の援助を受けて南方探檢の途につき、一六四二年十一月二十四日、今日のタスマニア島に達しヴァン・ディーメンズ・ランドと名

付けたが(註6)、彼はその北方に大陸あるを知らず、さらにニュージーランド南島西岸に達したが、タスマンは、この島を所謂「南の大陸」の一部であると信じた。さらに、翌一六四四年には再度の探檢を試み、カーベントリア灣を探檢したのであるが、既に三十年前に發見せられたトレス海峡を知らず、それ故に、新和蘭大陸の北端は、ニュー・ギニアであると解したのであつた。

和蘭の探檢事業は、ヴァン・ディーメン總督の死によつて中絶せられたのみでなく、その頃、和蘭の東印度會社は、十分なる土地空間を所有し、これらの土地空間から、貿易に必要な物資を豊富に確保することができたのであつた。それ故に、もはや新たな陸地發見を必要とせず、「新和蘭」と稱せられた陸地は、和蘭—ジャワ間の一種の陸上標識として利用せられたにすぎなかつた(註7)。

かくして、タスマンの探檢より後れること百三十年、英人クックが南太平洋に登場するまで、濠洲大陸は、濠洲原住民の呼吸空間として放置せられてゐた。もとより、英人にして、初めて、この大陸に足跡を印したのはクックであつたと斷することはできぬ。

クックの濠洲大陸發見に先立つこと七十年前、支那海で西班牙船を略奪した海賊ウィリアム・ダムビア (William Dampier) は、海賊の足場として濠洲西北海岸メルヴィル島近在において、數週間を過して歸英した。歸英後、ダムビアは旅行記を出版し、これによつて英國上下の信用を博した。英國海軍省は、一六九九年ダムビアのため「ルーバック」號 (Roebuck) を用意し、濠洲大陸の探檢を命じた。ダムビアは、喜望峰經由で東航し既に和蘭人によつて發見せられた濠洲西海岸に、同年八月六日到着した。この海岸において、同船の乗組員が鯨を捕

獲したのでシャークス灣 (Starks Bay) と名付けた。この灣岸から、濠洲の沙漠が内陸へ向つて擴延してゐるのであり、加ふるに、土着原住民が猛烈に彼等に對して反撃し來たつた。それ故に、ダムビアは、その記録において、この方域の原住民は黒色の皮膚を有し、甚だ不愉快な人間であつたと述懐してゐる。彼の一行には、壞血病患者が出たため、倉皇この地を引揚げて歸英した。彼が海賊として太平洋へ出現し來つたときの航路は、南米の尖端ホーン岬經由、フィリッピンの海域へ闖入したのであつたが、南米の尖端を航行した際の寒氣を恐れて、第二回の航行に際しては喜望峰經由の航路を採用したため、遂に濠洲東海岸に到達するを得なかつたのである (註8)。

クックの南太平洋出現への、直接的動機となつたのは、英國天文学協會が、一七六九年南太平洋へ日蝕觀測隊を派遣するため、英國海軍省に探檢船の拂下げを申出でたのに端を發する。よつて英國海軍省は三七〇噸の「エンデヴァア・バーク」號 (Endeavour Bark) にジョームス・クックを艦長として乗組ましめ、日蝕觀測終了後、南緯四〇度までの南太平洋の探檢を命じた。同船には植物學者ジョーセフ・バンクス (Josef Banks) や天文学者グリーン (Green) が同乗した。一七六九年六月一日、タヒチ島における日蝕觀測終了後、新西蘭を約六箇月にわたつて探檢した後、一七七〇年三月三十一日、同島を出帆、所謂「新和蘭」の東海岸を調査すべく西航、一七七〇年四月二十日午前六時、濠洲大陸の東海岸を發見した。この地點は、南緯三四度二分、ニュー・サウス・ウェールズ州とヴィクトリア州の境界地點に該當する。クックはこの地點を、發見者ヒックス中尉の名稱をとつて「ヒックス」 (Hicks) と呼んだ (註9)。さらに海岸に沿うて北上すること約十日、ボタニイ灣に上陸した。この灣岸において珍奇な標本を採取し得たから、この名稱が附せられたのであり、この方域を「バンクシア」 (Bankisia) と名付けた。

止ること約一週間、さらに北上してジャクソン灣に入つた。かくして、約四箇月にわたつて東海岸を探査し、この方域一帯を「ニュー・サウス・ウェールズ」と命名した (註10)。

しかしながら、和蘭人の所謂新和蘭たる濠洲と、英國人の所謂「ニュー・サウス・ウェールズ」とが、同一の陸地であるか否か、また、その限界如何も甚だしく不明瞭であつた。

かうした不明瞭さに對し、地圖上の徑線を以て英國領を規定するの事態が発生した。それは北米合衆國の獨立に起因する。すなはち從來、北米大陸へ流刑されてゐた犯罪人のために新たな流刑植民地を設定しなければならなくなつた。よつて、英國政府はクックによつて發見せられた「ニュー・サウス・ウェールズ」を流刑植民地として指定し、これがため、一七八七年、ボタニイ灣、ジャクソン灣一帯に新植民地を建設するに際し、ヨーク半島から、この大陸の南端にいたる東經一三五度以東を領土であると宣言したのである。ここにおいて、海軍大佐アーサー・フィリップ (Arthur Phillip) は、總督に任命せられ、一七八七年五月十三日、男囚五二〇名、女囚一九七名、船員その他二九〇名、船舶十一隻を率ゐて本國を出帆し、翌年一月十八日、ボタニイ灣に到着し、さらに北上、ジャクソン港に上陸、濠洲最初の植民地シドニーを建設した。この結果、濠洲東海岸は英國的勢力圏、濠洲西海岸が和蘭的勢力圏に、二分せられる如き様相を示した。従つて、その頃、和蘭が大西洋における英國海洋權力によつて打倒せられてをらず、また、和蘭の南太平洋における空間壓力が強力であつたならば、濠洲大陸においては、英・蘭兩勢力の對立演戲を演出したかも知れぬ。しかしながら當時においては未だ何人も、この大陸を周航したものがないが故に、この點については、極めて不明瞭な状態におかれてあつたといはなければならぬ。

この點について明確な規定を試みたのは、船醫として新植民地に渡來したバス (George Bass) 及び船員フリンダース (Matthew Flinders) であつた。この兩名は協力して一七九八年から一七九九年にわたりタスマニア島を探検すること三度、大陸とタスマニア島とを離隔する海峡にバスの名稱を與へた(註11)。フリンダースは一八〇〇年に歸英したが、インヴェスチゲーター號 (Investigator) の船長に就任、濠洲大陸の部分的探検を命ぜられた。彼は一八〇一年十二月、英本國から喜望峯經由、濠洲西南海岸キング・ジョージ入江に到着、さらに沿岸を東航し、スペンサー灣並びにセント・ヴィンセント灣を探検し、ここに所謂「新和蘭」と「ニュー・サウス・ウェールズ」とは同一大陸の東西の兩側面に過ぎざることを確認した。彼は、さらに一八〇三年には濠洲大陸を周航し、「新和蘭」と「ニュー・サウス・ウェールズ」とを包括するこの大陸に、何等かの新名稱を與へるやうに總督へ建議した(註12)。

しかるに、英國領の境界東經一三五度が、さらに東經一二九度にまで擴大せられる事態が生起するにいたつた。それは、佛國の南太平洋進出力と、英國的對抗力との對進的遭遇において理解せられる。しかも、この對進的遭遇は、ヨーロッパ大陸における英・佛の爭鬪戦を反映したことに、その特徴を認めることができる。

フリンダースが濠洲南海岸を探検せる際、セント・ヴィンセント灣近在の小灣(エンカウンター灣)にて、彼は佛國人ボーダン (Nicholas Baudin) が指揮せるジェオグラフ號 (Géographe) に遭遇した。時に一八〇二年四月四日。ポータンは、フリンダースに對し、その任務は動植物の標本採取を目的とするにある旨説明したけれども、歸佛後のボーダンは、濠洲探検記を出版し、この大陸の主要なる地名を悉く佛語を以て記入し、この大陸には、ナポレオン大陸 (Terre Napoléon) の名稱を附し、スペンサー灣をボナバルト灣と記載した。また、一八一〇年にはナ

ポレオン一世自身が、當時、佛國植民地モーリシアス島の總督ドカン (Decaen) に對し、物資不足を補ふために濠洲植民地への侵入命令を與へてをり、また、ボーダン一行中の博物學者ペロン (Peron) は、歸國の途モーリシアス島において、同島總督に對し、英領濠洲植民地における無防禦と英國移民の不統一を述べ、佛國軍隊による濠洲攻略を慫慂してゐる。ここにおいて、當時、英領濠洲植民地總督キングは、かうした佛國の積極的攻勢に備ふるため、急速、植民地を増設し、次のやうな空間充填を策した(註13)。

- 一、一八〇三年、タスマニア島東南岸へ、レディ・ネルソン號を派遣して探検せしめ、次いで、ボーン (John Bowen) に命じて五十人の移民を引率して渡航せしめ、今日のホバート港 (Hobart) を建設せしめた。
- 二、同年、コリンズ (David Collins) に二百有餘人の囚徒移民を引率し、メルボルンに植民都市建設の礎石を置した。(これらの移民は、翌一八〇四年、ホバートに移る)。
- 三、一八〇四年、パターソン (Paterston) は、百五十餘人の囚徒を引率し、タスマニア島北部に植民(ホバート港の近在)した。

次いで、ナポレオンの没落後、佛蘭西共和國が南太平洋の科學的調査を試みようとし、デュモン・デュルヴィール (Dumont D'Urville) をして、アストロラーブ號 (Astrolabe) を指揮して濠洲沿海方域へ派遣するにいたつた。これに對抗して、英國側は、西方境界線の擴大を行つた。すなはち、大陸北西海岸に存在するバースト (Bathurst) 並びにメルヴィル (Melville) の兩島が、價值多きにつき、これを英領に包括せんがために、ゴルドン・ブレヘマー (Gordon Bremer) を派遣し、從來の境界線東經一三五度を、さらに西方へ推進めて東經一二九度を以て、英國領と

して宣言した。時に一八二四年。さらにまた總督ダーリングは (Darling) は、ニュー・サウス・ウェールズ總督を辭し新に濠洲總督に任命せられたき旨を本國政府に要求した。この間において、英國的空間擴大は、積極的に敢行せられたのである。すなはち(註14)。

一、南部海岸においては、ゲリイブランド (Gellibrand) 並びにバートマン (Batman) により、アデレードの近在にウエスタン・ポート植民地が建設せられた。

二、西南海岸においては、一八二七年ロックヤー (Lockyer) によつてキング・ジョージ灣にオルバニー (Albany) 植民地が建設せられた。

しかし、佛國の進出は、純然たる科學調査であつたことが判明するに及んで、英國側は、これらの植民地計畫の積極的運営を中斷するにいたつた。しかし、結局、英國政府は、濠洲大陸全體を領有することに決意し、一八二九年、フリーマントル (Freemantle) をしてチャレンジャー號を指揮せしめ、濠洲西部海岸に派遣し、この方域を探検調査せしめ、ここに、大陸全體を英國の領土として規定するにいたつた(註15)。

これを要約すれば葡萄牙人や西班牙人は、「南の大陸」といふ言葉によつて、この大陸現在の位置に相應する方域に、「大陸」の存在してゐるであらうといふ豫想を有つてゐたが、この大陸に定住しようといふ意圖は有つてゐなかつたのである。和蘭人は、この大陸の西海岸へ突入し、次いで、その北方方域や、或は南方沿岸方域を瞥見したのではあるけれども、これらの方域への移住を斷念した。何んとなれば、彼等は、スンダ諸島が營利的價値を多分に包蔵してゐるので満足したからである。そして、英國人が、佛國人に先着せられることを恐れつつ、この大陸へ

の突入を試みたのであつた。従つて、移住地或は聚落の建設よりも、この地域の英國領土の一部であるといふ併合宣言が、逸早くなされたのである。それ故に、この大陸北半部分を生活空間化することのできなかつた史的要因を、ここに認め得る。

註1 Walter Geisler: Australien und Ozeanien, 1930. S. 4.

註2 Griffith Taylor: A Geography of Australasia, 1924, p. 138.

註3 Geisler: S. 5.

註4 Geisler: S. 8.

Arthur W. Jose: History of Australasia, 1901, Sydney and Melbourne, Angus and Robertson, p. 4.

註5 Geisler: S. 8—9. タスマンは今日のマクワリ港の近在に到着した。

註6 Jose: p. 100.

註7 Geisler: S. 9—11.

Jose: p. 5.

註8 Geisler: S. 10—11.

Jose: p. 6—7.

註9 Geisler: S. 13.

註10 Geisler: S. 12—15.

Jose: p. 8—10.

註11 Jose: p. 23.

註12 Jose: p. 26.

註13 Jose : p. 27—28.

Geisler : S. 15.

註14 Geisler : S. 23.

註15 Geisler : S. 23—24.

第六 大陸原住民と土地空間

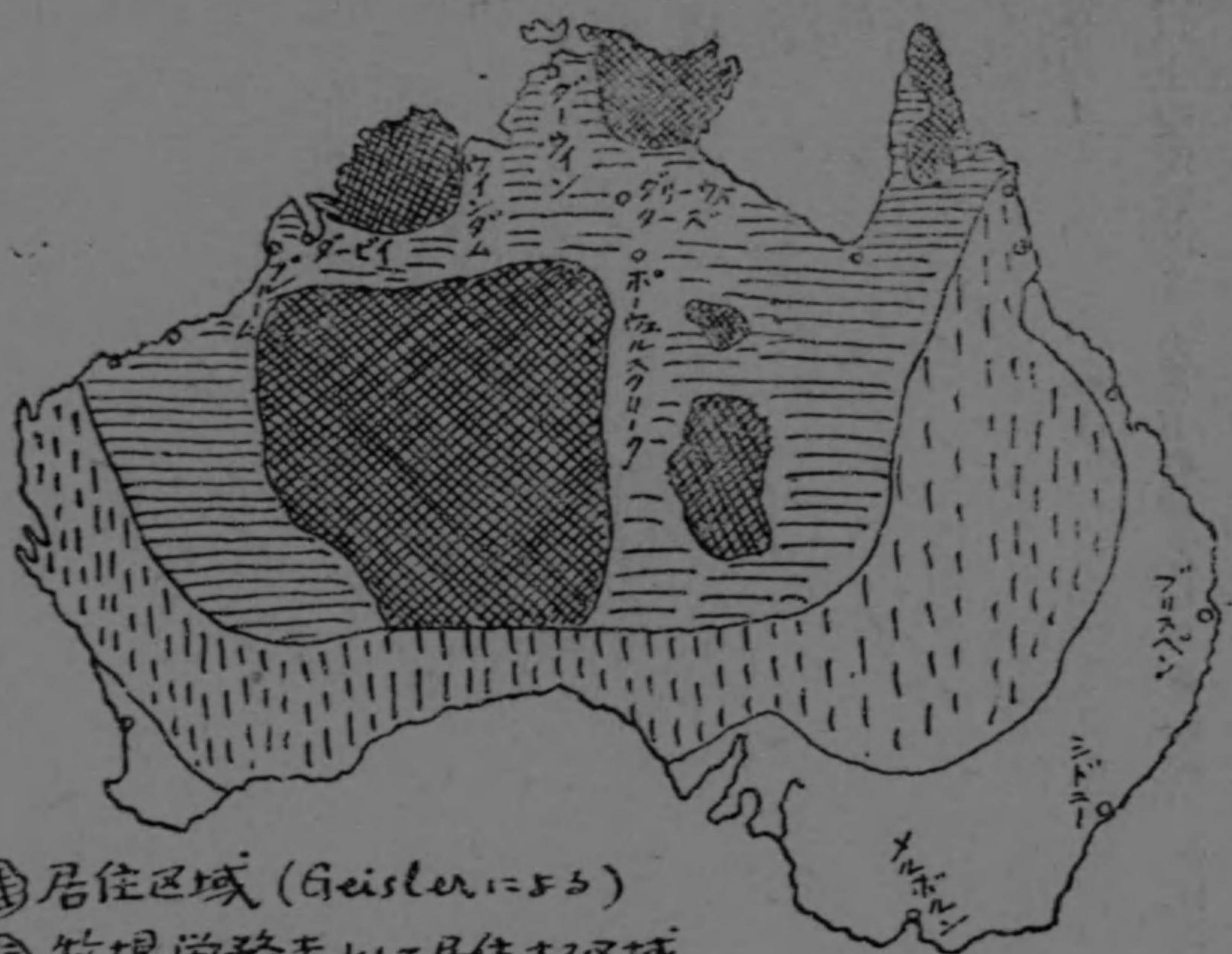
濠洲大陸へ英國的勢力が闖入し、ここに、英國的植民地的施策の行はれたる契機は、一般に一七八八年一月二十
六日フィリップ大佐が、ボタニイ灣に到着し、さらに、北上してジャクソン灣に上陸したときであるといはれて
ゐる(註1)。すなはち、この岸邊に接近して、間もなく、シドニーが建設せられたのであつた。この頃、濠洲大陸
には原始種族としての型態を有つ原住民が生活してゐた。しかし、これらの原住民は英國的勢力に對抗し得ずして、
漸次、北部濠洲へ退嬰したのであつた(註2)。彼等の起源については、未だに明確な論證は存在しない。しかし
ながら、現在、濠洲原住民と稱せられてゐる種族は、ネグロと黒色コーカシアの混血せる種族であると解せられ
てゐる。すなはち、氷河紀初期に、黒色コーカシアたるネグロがニュー・ギニア地域の陸続きを利用して、この大
陸に移住して來た。當時、タスマニアも亦、大陸の一部であつたので、彼等は、この方域にも移住した。これらの
種族は、この大陸最初の所有者たることを得なかつた。何んとなればその後、暗褐色コーカシア族がニュー・ギニ
アから南下、ヨーク半島に移動し、先住のネグロ族を克服するとともに全大陸に分布するにいたつたからである。

その頃、タスマニアは、大陸と分離してゐたので、先住のネグロ族は、そのまま残存し得た。これに反し、大陸に
おいては、ネグロ族は殆ど暗褐色コーカシアのために征服せられたが、同時に、暗褐色コーカシアには、ネグロの
血が混入するにいたつた。それ故に、今日、この大陸の原住民は、原始種族としての一型態を示現してをり、この
原住民から種々なる分派が出現したのであると解せられてゐる。これらの原住民はセント・ヴィンセント灣からカ
ーベンタリア灣にいたる南北の方向にわたつて分布せられてゐる、これらの種族の間には、殆ど同一の習慣が行は
れてゐる。しかるにアデレードからシドニーにいたる方域に分布せられてゐる原住民においては、部落相互間にお
いても、言葉や習俗が、それぞれ差違を示してゐる(註3)。

濠洲原住民は、耕作、牧畜といつたやうな自然方域を文化方域たらしむる能力を具備してゐなかつた。精神的能
力は異常に微弱であつて、その發達は、思春期とともに停止する。老年者は部落の長として、一小集團を統率し、當
該部落の表象たる動物を崇拜する(註4)。

彼等の住居は、樹皮を利用したるもの、また棉の樹によつて構へられたものがあるが、自然の洞穴等も利用せら
れる。衣服については、殆ど裸體であるが、雨量の多い方域、なかんづく、この大陸北部に住む原住民は、往々蘭
によつて作られた編物を着用する。彼等は、火を知つてゐた。しかし、これを利用して、料理することを知らな
かつた(註5)。また、金屬の使用法を心得てゐなかつた。しかしながら、石、木片で作製せられた「投げ武器」
(Bumerange)及び「投槍」(註6)を巧妙に使用した。しかも、これらの武器は、極めて高度に發達した部類に屬す
る。彼等は獵人であつた。海岸に住居せる部族は、漁獲に従事し、また、山野に住居せる部族は、カンガル、草

根等を食物に充てた。これらの部族は、それぞれ獵區を有してゐた。成年の儀禮を終へたる後に、初めてこの區域に入つて、自由に狩獵に従事し得ることになつてゐた。しかるに、いまや、ヨーロッパ人、なかんづく、英國人の闖入は、これら原住民の移住形態を、全く本質的に變化せしめるにいたつた。すなはち、先づヨーロッパ人との接觸によつて、原住民は結核性疾患に感染した。次に、ヨーロッパ人より與へられた古着によつて、その健康を害せられた。さらに、英國移民の大陸南東部沿岸より、西方への牧畜業による進出は、原住民との軋轢を生起するにいたつた。英國移民は、牧場を荒らすカンガルーを殺害した。カンガルーは、前述のやうに、原住民にとつての重要な食物であつた。従つて新來の闖入者が、食用以上にカンガルーを殺害する理由を原住民は理解し得なかつた。一方、原住民は英國移民の經營する牧場に闖入し、食用以上の羊を殺害した。これがために、原住民對英國移民との間における争闘が、各地に生起したのである(註7)。しかしながら、原住民は、英國移民に對して、統一的戰線を構成し得ず、結局、英國的勢力に隸屬するか、或は、英國的勢力の滲透せざる方域へ退嬰せざるを得ないやうになつた。英本國政府が、英國的移民に對して與へたる訓令は「彼等(原住民)の習性を慰撫し、好意と親切を以て臨むべし」といふにあつた。もとより、原住民は、その文化形態を闖入者の文明の段階に共存或は、この文明を攝取同化し得なかつたとはいへ、太古から住みなれた土地からの追放を受けたと同様の事態に直面したのである。前述の訓令に所謂「好意」は、如何なる様式によつて示されたかといふに、原住民が移民の經營する牧場から、食用以上の頭數に及ぶ牧羊を殺害したる場合、原住民の所屬する部落の長を捕へ、これを笞打ち、以て再び、かうした牧羊殺害行爲の反覆しないやうに警告を加へたのであつた。最も頑強に、英國的移民の内陸進出に抵抗した事例



大陸原住民の萎縮

- ⊞ 居住区域 (Geislerに於て)
- ▨ 牧場勞務者として居住する区域
- ⊞ 散在的に居住する区域
- 全然存在せぬ区域 (英國的割取区域)

第二十五圖 大陸原住民の萎縮

は、一八四二年の騷起であつた(註8)。もとより英國的勢力に抗すべくもなかつた。次に注目すべきは北部領の原住民の反抗であつた。この方域の原住民の性格は久しきにわたつてマライ住民との間に行はれた争闘の故に、著しく戰闘的に陶冶せられてあつたからである(註9)。かくして、原住民は、その先占區域から、排除、驅逐せられて、僅かに、大陸の北方方域、なかんづく、キムバレイ區、東部アーネムランド、クイースランドの北部及びヨーク半島においてその居住區域を見出したのである。原住民のうち、極めて例外ではあるが、英國的勢力に隸屬せしめられた者もある。これらの原住民は牧畜業、或は牧畜區監視の任務を擔當し、その能力の優秀さが認められてをり、しかも賃銀は極端に低廉である。しかし農耕或は工場等の作業能力は殆ど具有してゐない

といはれてゐる(註10)。また、大陸の北方沿岸方に居住する原住民は沿岸漁業に従事するが故に、内陸諸地域の原住民に比して、より良好なる營養資源を獲得することが容易であり、それ故に、その肉體的發達は、極めて良好である。また、その住宅設備も、鞍形屋根を採用するにいたつてゐる。

これらの原住民以外の原住民の生活は、依然、叢林的、高原的或は沙漠的原始的様相を示してゐる。今日、聯邦政府年鑑の示す數字によれば、原住民の總數は五萬七千人に過ぎない。しかし、この數字は、過小に失する。十五萬人を見込み得ると主張してゐるものもある(註11)。

われわれは、原住民が、その生活の過程を、この大陸の陸地巨像へ、農耕の形態において刻印しておかなかつたといふことが、英國的勢力を容易に、この陸地空間へ導入し得た一要因であつたことを認めなければならぬ。同時に原住民の人口増加力が英國的勢力の闖入に對して「異物排除」作用を毫末も發現することができず、むしろ萎縮的傾向を辿り、それ故に、また外部的勢力の闖入を促進したことを、認めなければならぬであらう。

註1 Jose: p. 16.

註2 Geisler: S. 49.

Jose: p. 94. Gregory: p. 150.

濠洲原住民には、北米の原住民 (Red Indians)、南米の原住民 (Yalis) 及び新西蘭の原住民 (Maoris) のやうな闘争性は乏しかつた。

註3 Jose: p. 64—65.

なほ同書には「ジャックソン灣にフィリップの船が到着したとき、原住民は「去れ」と怒號したが、間もなく、平和的に

交際するやうになつた」と記述してゐる。

註4 Geisler: S. 50.

なほ、この點についての記述につき、ガイスマーは、主として、次の二書、すなはち

H. Baselow: *The Australian Aboriginal. Adelaide 1925.* A. R. Brown: *The Social Organization of Australian Tribes.* Sydney 1931.

に於て見らる。

註5 Geisler: S. (一九三〇年版では一〇頁参照)

なほ、この點についての記述につき、ガイスマーは

H. Brinckmann: *Kulturelle Landschaftskunde von Australien.* I. Teil. Diss., Hamburg 1932.

に於て見らる。

註6 Geisler: S. 108. (1930年版)

W. B. Spencer: *Wanderings in Wild Australia.* II. Bd. London. 1928.

註7 Jose: p. 65—66. Gregory: p. 151.

註8 Gregory: p. 151.

Jose: p. 66. 画記した範圍はダーリング・ダウンス (Darling Downs) からポートランド灣 (Portland) 一帯であつた。

註9 J. W. Gregory: *The Menace of Colour.* p. 150.

註10 Geisler: S. 51.

註11 Geisler: S. III. (一九三〇年版による)

第七 英國的開發と北濠洲空間

一七八八年、最初の移民（犯罪者移民）が、シドニーを建設した（註1）。一八二四年に漸くクィーンズランドに於いて、また、一八三四年にいたつて、ヴィクトリアにおいて、聚落の設定を見たに過ぎぬ。南濠洲における聚落の發生は、一八三六年であつた。西濠洲は一八二七年に英國の領土に編入せられ、一八二九年にいたつて漸く、聚落の發達を見たのである（註2）。しかし、今日においても然るが如く、當時において、夙に、この國土の空間充填が英國にとつては、極めて至難な作業であることが示されてゐた。

その第一點は、英本國とこの大陸との地理的位置に基因する。このことは、貿易並びに商業の發展を阻害するとともに移住者數の増加率を緩慢化せしめた。長距離とその費用とが、渡航意思を脆弱化したのである。もちろん、英本國政府は、積極的に、（例へば、婦女子渡航補助金制）（註3）移住を奨励し促進した。英本國政府の移住奨励の直接要因として、とり上げらるべきは、イ、北米合衆國の獨立による新たな移住地としての濠洲大陸への注目、ロ、本國における失業問題の克服といふ二つの課題を措置しようとするにあつたやうである（註4）。しかし、距離的に、濠洲よりも、カナダが、ヨーロッパ大陸に近接してゐた關係から、ヨーロッパ空間の過剩的なる人口移動の波は濠洲へ流れ込むよりも、カナダへ流れ込んだのであつた（註5）。

従つて、若し、一八五〇年から一八六〇年にいたる所謂ゴールド・ラッシュの時期を経験しなかつたならば、恐らく、今日の如く、タスマニア島（六萬八千方米）を除いたこの大陸（七百萬六十三萬六千方米）において、一平方米人口平均一人に近接するといふ空間重量の傾向すら、示し得るにいたらなかつたかも知れない。何となれば一八四〇年における住民數は漸く十九萬四百八十人に過ぎなかつた。しかるにゴールド・ラッシュとともに移住者激増し、一八五〇年においては、四十萬五千三百五十六人を算し、一八六〇年には、實に百一十一萬五千五百八十五人に達した。この約十年間にわたるゴールド・ラッシュが退潮したる後、これらの人達は、農耕牧羊に従事した。この定住が住民數保有についての大なる要因となつてゐる。

その第二點は、この國土の生産物の一方性の故に、常にヨーロッパからの輸入に依存するといふ本質的な事象を生起するとともに、他面、この國土の生産物を輸出せんがため、海港への人口集中現象が續起して來た。それ故に人口の過半數は、海港都市へ集中し、しかも三分の一は、メルボルンとシドニーに居住するにいたつた。ニュー・サウス・ウェールズ州やクィーンズランド西部の人口は極めて稀薄であり、西濠洲においては、所謂シウワンランドと稱せられる方域において白人の移住を見るに過ぎぬ。故に一平方米の人口密度六人といふ數字は、主要なる都市の周邊に限られてゐる（註6）。それ故に、一八一五年に建設せられたメルボルンの如きその後、九〇年間で人口八十萬を突破したる際に、メルボルンの都市的發展は、英帝國內に存立してゐる諸都市のうち、同一の成長發達の時代を経過したる都市の膨脹に比して、著しく速かであり、濠洲における英國的發展を徵表するものであると論評せられたのである（註7）。けれども、前述の如き、極めて、一方的に作用した要因によつて、この都會の人口膨脹が生起したのだといふ事實を等閑視することを許されない。すなはち、全大陸の空間を開拓し、原住民にそのところを得しむるための生活空間の開發にあらずして、内陸若しくは不毛沙漠方域と解せられる地域へ原住民を驅

逐追放し、英國人にとつて、その氣候に馴化し得る方域と目せらるる方域を割取したのであり、割取せられた土地空間は今日の英國聚落の存するニュー・サウス・ウェールズ州、クィーンズランド州南半、西濠洲東南部、ヴィクトリア州及び南濠洲の土地空間であり英國的勢力の闖入は、この大陸から、白人馴化區域を分割割取したに過ぎないとも論じ得るであらう。

もとより、濠洲政府は、これらの「分割空間」以外の土地空間を、全然、無視してゐたのであると論定することは出来ぬ。殊に、「北部領」を不毛の地として、全く放棄してゐたとは論断できぬ。

一九二〇年末期において、「北部領」における牧畜その他開發を目標とする借地契約區域若しくは讓渡區域は、北部領の四三%を占めてゐた。しかるに、一九三五年六月末においては、五五・一%を占むるにいたつてゐる。牧畜に關する部分については、一九二四年、グリフィス・テイラー教授によつて、北部領の四〇%は、偉大なる牧畜地帯であると指摘せられたが、一九三五年六月末の數字から計算すれば、牧畜を主要なる目標としての契約面積は、北部領の約三三・四%を占めてゐる。従つて、數字の上から論ずるならば、テイラー教授の豫断は、若干の正確さを示してゐるといへよう。しかしながら、このことは、決して、北部領の空間充填を意味するものではない。この數字によつて示された區域の限界は、一般的に現實に明確な事實上の限界を規定するまでにいたつてゐない。のみならず、牧畜業のみの「北部領」への轉出によつて、果して、この方域における人口の稠密化を達成できるかといふことは甚だしく疑問視せられなければならぬ。一方的な牧畜事業の進展によつて、人口の稠密化を豫期することとは、至難であるといはれなければならぬ。もちろん、今日まで、北部領土の開發については、牧畜事業の進展を

中心として考慮せられてゐた。しかしながら、銅、錫等の地下資源を埋藏することを確實せられてゐる鑛山地帯の開發を殆ど等閑視したのは何故であるか。北部領の空間充填を、できるだけ促進しようとする場合に、鑛山開發に必要とする勞働力の供給並びに交通的連絡をも併せて考慮するにあらざれば、人口の稠密化を、到底、期待することが出来ないのではなからうか。

さらに「北部領」の空間充填策との關聯において考究せられなければならぬのは、クィーンズランド州北方方域である。クィーンズランドの甘蔗栽培は、カナカ族の移入によつて、その發展地盤を確立し得た。しかるに、後述するやうに、カナカ族は、その生國へ送還せられてしまつた。カナカ族によつて、開墾せられたる方域は、主としてクィーンズランド州中南部であつた。今日においても未だにクィーンズランド州北部方域には、空間補填が行はれずして放置せられてゐる。「濠洲における英國的植民地の建設は、熱帯が果して「白人のホーム」として適應するや否やについての結論を導き出さざるに先立つて行はれた。それ故に熱帶的濠洲、すなはち、北濠洲を、アジア人に開放して、その開拓能力に期待したのである。しかるに、英國的植民者も亦、熱帯において、ホームを建設し得るが故に、アジア人を必要としなくなつた」と論ずる英國の學者もある(註9)。この論據は、大陸開發に際して、何故に、アジア人の勞働を強制的にすら移入したのであるかといふ質問に對する一種の辯明にすぎない。

北部方域の空間開發のために、唯一可能な政策は、アジア人を導入することであらうといふ認識は、英國的移民の初期において把握せられてゐた。しかも、この認識は實踐に移され、約六十年間にわたつて施策せられたのである。

このやうな施策について、英國的觀點が、如何なる根據に立脚してゐたかを検討するに、その第一點は、北濠洲一帯をジャワのやうな植民地たらしめようとするにあつた。もちろん、北濠洲の南部方域にして、他の州とその境界を接してゐる方域は降雨なく、不毛の地域であつたけれども、北西濠洲の大部分は、モンsoonを受け、また河川流域の平原には植物繁茂してをり、さらにアーテシア地盆において地下水の供給が比較的容易であるといふ自然的所與の一面についてのみ注目し、北濠洲は、熱帶的桃源となるかもしれないといふ豫想が、支配的な勢力をしめたからであつた。それ故に、北濠洲を呼ぶに「黎明の國土」といふ名稱を以てした程であつた。そして、木棉とシサル麻との栽培による土地の開発が企圖せられた。そして若干の鐵道を建設し、歩道の構築に着手し、秩序維持のために警察組織の整備に着手した。この警察力は、主として、原住民から移民を保護することを任務としてゐた。このことは、この方域を開發するに原住民の勞力は不足であるといふことばかりでなく、原住民の存在は開發工作にとつての妨礙者であると認めたと起因するのである。そして所要の勞力は、アジアからの勞力の移入に、全く依存するといふ方針を採用したのであつた。そして、アジア人を導入するがために、しきりに、ダーウィンの近在の土地肥沃性が宣傳せられた。かうした開發方針が北濠洲なかんづく「北部領」の開発第一期、すなはち所謂「黎明期」における施策の基幹として、濠洲政府によつて、とりあげられてゐたのである。しかれば、この實績は如何なる様相を描き出したのであるか。

當時におけるこの方域の施策について、二つの重要な報告がある。その一は、一八八二年から一八九六年まで、ポート・ダーウィンの副税關長として勤務したアルフレッド・サーシー(A. Searcy)の報告であり(註11)、他の

二つは、「北部領」の測地事業に従事したチェンセン博士(Dr. Jensen)の報告である(註12)。いま、左に兩氏の報告骨子を摘記し、しかる後に、第一期開發が、果して誇稱せられたやうな「黎明の國土」開發たるに相應したものであつたか否かを検討することとする。

I サーシーの報告の要點

- (イ) この方域は、殆ど牧畜業に適應し、世界のために、開かれずに殘置せられてゐた區域である。家畜の飼育については、世界において、最も優秀なる方域となるであらう。
- (ロ) 沿岸方域並びに河川流域においては、熱帶性植物が成長する。
- (ハ) 内陸においては、農業的開發が可能である。
- (ニ) 北部領の面積は、ジャワ島及びマヅラ島との兩島の合計面積に匹敵し、如何なる種類の熱帶農業もこの方域に適應する。
- (ホ) 雨期は十月末に始り、五箇月間繼續する。一月及び二月における降雨量は、最も多量である。海岸方域の降雨量は六五インチ、降雨期における最高温度九五度、夜間の最低氣温六五度。

II チェンセン博士報告の要點

- (イ) 北部領の氣候は熱帶的である。しかし、この氣候は、決して健康を阻礙しない。もとより沿岸方域においては、人體にとつて甚だ不快な濕氣が存在してゐる。しかしながら、ポート・ダーウィン周邊の氣候は、決して不愉快さを感じしめない。

(ロ) 沿岸方域における土壤は、深度淺く、硅酸質であり、加ふるに鐵分を含有するが故に、沖積層以外の地帯を除いては、一般に土壤は肥沃でなく、貧弱である。肥沃なる土壤は、小區域にわたる沖積盆地と狭小な範圍にわたる海岸方域とに存在してゐるにすぎぬ。しかも、沖積盆地においては、灌漑の可能性を有つてゐるが、海岸方域における、それは甚しく小範圍に限局せられてゐる。

(ハ) 内陸の土壤は、植物の成育に適應してゐる。しかし、氣候が乾燥するから灌漑施設を必要とする。これがために、地下水を井戸によつて供給することが、唯一の手段であるが、水質は、アルカリ性であるから、栽植區域を頻繁に移動することを要する。

(ニ) 農業による收穫については、多くを期待し得ない。土地肥沃と稱すべき地域は、斷片的にしか存在しない。しかも、その面積は、極めて僅かである。それ故に、農業による收穫を増大しようとするには是非、大灌漑施設を完成しなければならぬ。このことによつてのみ、耕作による收穫は可能である。

(ホ) しかし、他の州において見るやうな(1)より良い氣候(2)交通運輸の便(3)市場への近距離といふ要件を具備しないから、他州において同一の廣袤を有する耕作區域の成績に比して、北部領の成績は、著しく劣悪となるであらう。

以上、二つの報告を對比するに、第一に前者の報告は報告者自身の調査範圍が、極めて一小部分に局限せられ、あたといふこと、また、専ら經驗的見聞的な記録であり、後者のその如く、科學的根據より結論づけられたものではないといふ點に、著しき差異を認められる。第二に、前者の報告は、副税關吏としての視察報告である限りに

おいて、その報告より導かれる結論乃至見透しには、多分に、政治性或は政策性を内包してゐた。ここにも一つの特徴を認め得るのである。果せる哉、サーシー報告によつて、北部領が將來においては、必ず人口稠密なる方域に改編せられ、英國的植民政府によつて、印度のやうに統治せられるであらうといふ見込乃至思惑を、一般濠洲人の腦裏に印象せしめたのであつた(註12)。第三に、後者の報告は、専ら科學的檢討に屬し、しかも、その結論は、悉く、北部領の風土上の貧困性を立證することにおいて、大きな特徴を示してゐた。

しからは、第一期施策運營の徐行は北部領の地盤の上に、如何なる刻印を與へたのであるか。

北部領土における人口の増加は、極めて、緩慢なる歩調を示し、かつ、極めて、不規則な變化を示現した(註13)。原住民を除いて、その人口構成要素は、日本人、支那人及びヨーロッパ人の三者であつた。一八八八年における總數は、三、四三四人、内譯ヨーロッパ人一、二四四人、支那人三、六五八人(そして、わが日本人は、三十三人に過ぎなかつた)。一九〇一年においては、ヨーロッパ人は一、〇五五人に、支那人は、二、六五九人に減じ、そしてわが日本人は一四九人に増加した。支那人の最高數字を示したのは一八九〇年の四、一四一人であつた。

支那人移民數は、一八九〇年を、轉回期として、漸減の傾向を辿り始めた。この事實は、一九〇一年の白濠主義政策の採用によつて、アジア移民が激減したのではないといふ理由に援用せられる場合もあり得る。かうした場合に、援用せられるところの根據は、支那人移民は、少くとも、平均五〇インチの降雨量を見る區域に限つて移住する(註14)。従つて、支那人は、北部領の全般的開發には不適當であり北部領において適應する區域は、ポート・ダーウィン周邊の小區域及び、北濠洲の北東方域たるケアンズ並びに木曜島であるといふのである。しかし、これは

一種の辯明にすぎぬ。

このやうにして「北部領」の空間充填は、十五箇年間の実績に徴して、何等の効果を示さなかつた。それ故に「黎明の國土」は、英國的施策の緩慢なる徐行とともに、英國人はかかる國土開發の擔當者たり得るや否や、換言すれば英國的觸手の空間的妥當性如何が問題視せらるにいたつたのである。

註1 Jose: p. 16-17.

洋洲大陸における所謂英國的空間開拓は、始原的にはシドニーを中心としての流刑植民地としての發見であつた。しかしこの植民地における食糧自給措置は、本國から遠隔の地點に位置してゐる關係から、特に、この點についての考慮を必要とせられた、しかもシドニー近在は飲料水關係並びに地質の構造上、農耕牧畜區域としては、不適當であつたので、シドニーの西方パラマッタ (Parramatta) に農場を開拓し、八〇ヘクタールの耕地を得たのであつた。

註2 からした年代は聚落の發生した時期を指すのであつて、州の行政的組織が行はれた年代は、次の如くである。

ニュー・サウス・ウェールズ州	一七八八年
タスマニア州	一八二五年
西 洋 州	一八二九年
南 洋 州	一八三四年
ヴィクトリア州	一八五一年
クイーンズランド州	一八五九年
北 部 領	一八六三年

註3 Dr. Schaefer: Australiens Wirtschaft u. Wirtschaftspolitik, 1931. S. 13.

一八二八年には三萬六千五百九十八人の人達が定住したが、うち一萬四千五百五十五人は男性、一千五百十三人が女性であ

【リ、いづれも流刑者として渡航したのであつた。右の数字の示すやうに男性の数字が全く壓倒的となつたので、女性の渡航を奨励するにいたつたのであり、到着の際に入税を支拂つたのである。

註4 Schaefer: S. 14.

註5 Schaefer: S. 23.

この傾向は、昨今においても顯著であつた。試みに一九二九年及び一九三〇年の統計を示せば次の如くである。(The Ministry of Labour Gazette, Mai 1931. p. 175.)

英本國からの移民數	一九二九年	一九三〇年
カナダ	六五、五五八	三一、〇七四
洋 洲	一八、三七七	八、五一七
新 西 蘭	四、七〇〇	三、九八一
印度及び錫蘭島	六、二六五	四、五五九
南 阿	五、七六六	五、六三六
そ の 他	六、二三四	五、四七四
計	一〇六、九〇〇	五九、二四一

註6 Geisler: S. 52.

註7 J. W. Gregory: The Menace of Colour, p. 152.

註8 Gregory: p. 152.

Griffith Taylor: Geography and Australian National Problems. Rept. Australas. Assoc. Adv. Sci., Vol. XVI, p. 486

註9 Gregory: p. 153.

註10 Gregory : p. 161.

Alfred Searey : In Australian Tropics, XXIII. 1907. p. 201. p. 357.

註11 Gregory : p. 162.

H. J. Janssen : The Northern Territory. Proc. R. Geogr. Soc., Austral, Vols. XXXII—XXXIII, reprint, p. 14—17.

註12 Gregory : p. 162.

註13 Gregory : pp. 162—163.

Year Book of Australia : No. 5, 1912. p. 1156.

一八八一年の聯邦國勢調査によれば、原住民を除いて、ヨーロッパ人の總數六、七〇人であった。

一九三三年六月三十日施行の聯邦國勢調査によれば、原住民を除き、總數四、八一八人であり、内譯は次の通りであった。

ヨーロッパ人	三三〇六
非ヨーロッパ人	七四四
日本人	九一
支那人	四六二
比島人	六九

註14 Gregory : p. 163.

Taylor : Geographical Factors Controlling the Settlement of Tropical Australia. R. Geogr. Soc., Australia, Queensland, Vol. XXXII—XXXIII. p. 56.

第八 白濠主義と北部領開發問題

「北部領」開發の第二期は、一九〇一年の白濠主義政策の採用とともに開幕せられた。白濠主義政策採用の一要因として、アジア人移民排斥が、有力なる因素として、とり上げられてゐた。北濠洲の陸地部分開發に關する限り、アジア人排斥理由は、第一にクイーンズランド州の開發と關聯して主張せられ、第二には「北部領」の開發と關聯して強調せられた。

北部領との關聯において論ぜられた理由は、北部領におけるアジア移民、なかんづく、最も期待せられた支那人がこの方域に定住せず、従つて、所要の勞働力を供給しない。のみならず、低賃銀によつて白人勞務者の移住を妨碍するといふにあつた。さらにまた、當局の指向とは異つて、「北部領」を自己の定住地域であると認識せず南東濠洲へ移住せんと意圖したといふにあつた。これらの人達は、洗濯人、コック或は果物栽培者として勞務に従事したのであるが、これらの職業に従事する地域を主として既に英國的ヨーロッパ人によつて割取せられたる方域において獲得した。また、英國的ヨーロッパ人が着手して既に放棄したる鑛山に入り込み、殘留の鑛物を獲得した。さらに、ゴールド・ラッシュの時期においては、鑛山の鑛夫として、夥しく移入して來た。一八五二年においては、在濠、支那人總數約二千人と算せられてゐたのが、一八五九年においては、實に四萬二千人を數ふるにいたつた。ニュー・サウス・ウェールズ州においては、一八八七年にいたつて、六萬人に上り、同州總人口の一五%を占むるにいたつた(註1)。英國的植民地の色彩、漸く褪せんとし、東洋的開拓地の様相を描き出すとするにいたつた。ここに

いて、「北部領」をアジア人に開放することは、洋洲南部の英國的植民中樞地盤へ強力に滲透するための、第一階梯或は最初の踏臺として、「北部領」の地盤が利用せられるかも知れぬといふ危惧の念が抱れるやうになつた。一八八八年五月十六日、支那移民排斥法案が同州議會へ上程され、即日通過を見たのである(註2)。

クイーンズランド州との關聯において重要な因素として、とり上げられたのは、カナカ族入植問題であり、クイーンズランド州甘蔗栽培事業との關聯において問題を生じたのであつた。この大陸の風土のうち、甘蔗栽培に最も適應せる方域として、一般に認められてゐたのは、クイーンズランド州の沿岸方域並びにニコール・サウス・ウェールズ州北部の沿岸方域である(註3)。一八二八年の試験的甘蔗栽培の結果、その有望なることが認められ、一八六二年には、甘蔗栽培地令が制定せられた。當時における砂糖の値段は、一噸當り四〇磅であつた。クイーンズランド州の氣候は、亞熱帶性を有つてをり、その沿岸は南緯十一度四〇分から二九度にいたる南北約七度にわたつてゐる。かうした緯度的位置を占むるが故に、気温は、極めて高度に上る。また、赤道を横切つて、緩慢に流れてゐる間に、その温度を昇められる海流が、クイーンズランド沿岸を洗ふが故に南東部における気温の高度性は、特に甚しい(註4)。一九〇五年、マッカイの都市——農村についての報告において「マッカイは、一年を通じて、トルコ風呂のやうに暑い」(註5)と記されてゐることによつてもクイーンズランド州の北方地域の酷熱性を察知し得るのである。しかも甘蔗栽培の好適地域は、主として、低地の沖積平原に限られてゐる。しかも、大氣は濕潤性を多分に帯びてゐる(註6)。

それ故にクイーンズランド甘蔗栽培園は、世界における最も苛烈な熱帯氣候の一種に屬し、高温と極端なる濕度性とを有つてゐる。従つて、前述のやうに、甘蔗栽培は、營利的見地から好適なる事業として認識せられたにしろ、前記のやうな風土性を克服し得る勞働力の供給を、如何にして措置するかが一大課題となつたのである。ここにおいて、一八六三年、南海諸島の原住民カナカ族を契約勞働者として、栽植事業に従事させることとなつた(註7)。

カナカ族の甘蔗栽培事業に對する能力は、極めて優秀なる成果を示した。彼等が、熱帯園内における勞力を提供したればこそ、クイーンズランド州甘蔗栽培事業は、その發展の礎石を確立し得たのであるともいひ得る。この意味において、彼等は、熱帯南洋洲の開拓者であつた。しかし、入植の當初において、彼等は契約移民とはいへ、半強制的に、クイーンズランドへ渡航せしめられたのである。當時「黒人誘拐」(Black-birding)といふ言葉が用ひられてゐたことに徴しても、この事實を認め得る(註8)。それ故に、ソロモン群島の原住民の如きは、強制的渡航に對して、極めて激烈なる抗爭を試みたのであつた。賃銀の如き、別段規定せられず、單に住居と食糧との供給を受けたに止まる。その後、一八六五年にいたつて、金錢若しくは物品によつて一人當り、年六磅を支給することに規定せられた(註9)。彼等の移住は、加速度的に増加した。都邑マッカイ及びその周邊の住民の三分の一は、カナカ族によつて占められた。かうした激増に對する恐怖は、遂に、一八八五年、サムエル・グリフィス(Samuel Griffith)によつて提唱せられたるカナカ族移入禁止條令の通過であつた。そして、一八九〇年以降は、移入を禁止することになつた。しかしながら、この禁止令は、かへつて甘蔗栽培事業に對する所要勞力の不足を招いたばかりではなく、事業そのものの破滅を誘發しようとする傾向を示した。それ故に、グリフィスの政策は、忽ちにして廢棄せられ、カナカ族の移入は續行せられた。一八九一年におけるカナカ族は、クイーンズランド州において、約九千人を數

へた。當時の同州總人口四〇萬に比較すれば、カナカ族移入排斥問題を論議する程の多數には未だ達してゐなかつた。それにもかかはらず一八九四年にいたつて、彼等を熱帯農業に傭入れることにつき制限を設けた。しかしこの制限は、カナカ族が、熱帯農業以外の仕事に従事することを制限するものではなかつた。それ故に、下男、コックとして、彼等は雇入れられ、これがために、白人側勞務者から、その職場に對して脅威を與ふるものとして嫉視せられるにいたつた。そして、遂に、一九〇一年、すなはち白濠主義の確立を見たる聯邦議會第一年において、太平洋島嶼住民條令 (Pacific Islanders Act) 所謂、移民制限法が通過し、契約移民としてのカナカ族の移入は禁止せられた。ここにアジア人の濠洲への通路は、全面的に閉鎖されるにいたつた。すなはち、移入せられたるカナカ族を、それぞれ、その出身地の島へ送還してしまつたのである。濠洲に残留し得たものは、聯邦の國籍を取得したものの一五〇九人に限られた。これら以外のカナカ族は一九〇五年と一九〇六年との期間において、悉く送還せられてしまつた (註10)。同時に、かうしたカナカ族の排斥は、クイーンズランドの甘蔗栽培を、白人勞働に依存して運営せんとする意思を積極的に表明したことを意味する。クイーンズランド州代表議員マクイーチャン (Sir Malcolm McEachern) は、聯邦議會において移民制限法に反對して曰く「若し、カナカ族による勞働の供給がなくなつたらば、甘蔗事業をマッカイの周邊或はマッカイ以北區域において、繼續することは不可能となるであらう。カナカ族の勞働なかりせば、この事業は亡滅するであらう」 (註11) と。しかしながら、クイーンズランドの甘蔗栽培事業は、カナカ族排斥後においても亡滅せずして存続した。統計的數字の示すところによれば、むしろ繁榮を徴表してゐる (註12)。しかし、われわれは、若し、カナカ族の勞働に依存することなくして、換言すれば、最初の鋤手とし

てのカナカ族の勞働なかりせば、恐らく、クイーンズランド州において今日の甘蔗栽培事業が存在してゐなかつたであらうといふ點に、クイーンズランド開發へのアジア的動力を認めたい。この觀點から検討すれば、クイーンズランド州に關する限り英國植民的開發の施策は、カナカ族の勞働を踏臺として發足せられたものであると論じ得る。アジア人に北濠洲を開放すれば、この方域を踏臺として、南濠洲の英國的植民勢力を驅逐するであらうといふ傾向と、「黎明の國土」としての北濠洲方域へ英國的植民勢力を扶植し滲透せしめやうとする指向との兩者、對進的遭遇といふ事態の生起にのみ、觀察眼を奪はれ、アジアの有する空間重量乃至壓力の未來的形相についての評價を殆ど等閑視したところに、濠洲當局の認識不足が介在してゐる。

次に、白濠主義の採用を契機としての「北部領」の開發は、如何なる過程を辿つたかについて論及する。が、このことは「北部領」を、「利益圈」として、如何に形成するかといふことに關聯してゐた。いま、その施策の梗概を左に摘記することとする。

白濠主義の採用せられた當時、北部領は南濠州政府の行政的管轄を受けてゐた。この州政府は、一九一一年「北部領が、聯邦政府の直轄區域として移管せられるまで」「北部領」の行政を管掌してゐた。南濠州政府の施策は殆ど零であつたといつても敢へて過言ではなかつた。北部領の居住地域から南濠州へ連絡することは、最も至難な課題であつた。北部領と南濠州とは、固より陸地において連絡してゐる。しかし、その間に中央沙漠といふ自然的障礙が存在してゐた。それ故に、北部領と南濠州との交通的連絡は、海路に依存して濠洲大陸の周邊を半周しなければならなかつた。この難關を解決すべく、南濠州政府は、「北部領」が聯邦政府へ移管編入せられた際、オードナ

ダッタ (Oodnadatta) から、バイン・クリークにいたる南北縦貫鐵道の完成を、移管條項のうち規定したのである。このやうな事情から南濠洲政府は、「北部領」に對し何等効果を發現するやうな空間的措置を講ぜず、北部領における人口は、原住民を除いて、一九〇一年の四六七三人から、一九一一年には三二三三人といふ萎縮傾向數字を示すにいたつた(註13)。

北部領は一九一一年、聯邦政府直轄區域として規定せられた。この管轄區域の變更を機として、聯邦政府は、この方域に對して、積極的な調査を開始した。メルボルン大學(註14)の生理學教授ギルルス (Dr. Gilru) が派遣せられた。同教授の主要任務は「北部領土開發と繁榮とのために、如何なる事業に着手すべきか」といふ諮問に答申することであつた。同時に、彼は、行政部門の首腦者として事務にも關與した。彼は、栽植試驗場、見本農園を設け、自然資源の開發方式を見出さうと努めた。人口は、一九一一年の三二三三人から四八〇三人(一九一七年)に増加した。一方、この方域における財政的赤字は従前に比して、約四倍の増大を示した。しかし、この所謂積極的方策も破綻してしまつた。すなはち、一九一九年、ダーウィン駐在の行政官吏の大異動が行はれた。その後、聯邦政府は北部領に對する積極的施策を殆ど等閑視するにいたつた。人口は一九二一年には、三七三七人に減じ、北部方域への海上交通の回数も減少した。見本農園は、原住民懷柔策の機具として利用せられ、設立當初の指向とは全く異なつた役割を演ずることになつた。精肉工場も、一九二〇年に閉鎖せられた。チンセン博士は、かうした破綻について、その要因を、左の五項の自然的障礙に基くと論結してゐる(註51)。すなはち、

一、沿岸方域の農園は、他の方域の農園よりも、土壌的に不適應であつたこと。
二、灌溉施設のために、高價なる機械的整備を必要としたこと。
三、農園經營のためには、沿岸方域よりも、むしろ、内陸を可なりとしたけれども、これがためには、灌溉事業の必要であつたこと。

四、交通状態の不良。

五、地方市場の缺乏。

を列挙してゐる。同博士の所論は、専ら自然科学的根據からのみ、指摘せられてあり、第二期の「北部領」開發については、英國的濠洲人、英國的移民のみによつて、遂行せられたといふ事實について、毫も論及せられてゐない。

最後に、北部領に關聯して印度人の要求について若干の考察を試みる必要がある。印度が所謂大英帝國の構成分子であるならば、印度人は、大英帝國の構成部分の何づれの地域に對しても自由に移住し得るわけである。しかるに、濠洲では白濠主義によつて印度人の入植を閉め出してゐる。この點について、グレゴリーは、歪められたる英國的世界觀を固持して次のやうに辯解する(註16)。

「大英帝國は地方的な拘束、制限に依據して成立してゐる。……ゼームス・ワットからグラスゴーにおいて機械製造業を開業しようとして、同市の同業者から開業することを拒否せられた。その理由は、ワットはグラスゴーの市民權を有つてゐなかつたからである。しかし、彼は大學教授の椅子に就いたではないか、同様に濠洲は、その居住者並びに移民一般の幸福のため、制限を加ふる權利を有つてゐる。」

彼の説明の歪曲性については、改めて、ここに論ずるまでもなからう。グレゴリーは「北濠洲は一層の勞力を要求する。——木棉やサイザル麻は、北部領において、最もよく成長するであらう。しかも、かうした耕作は低廉な勞銀によつて、さらに効果を發現するであらう」(註17)と論ずるとともに他面「北部領の無居住地域は印度人の耕作者にとつては役立たぬ。北濠洲の土地空間は印度人の勞働には適富しない。印度人の勞働に適する場所は東アフリカであり、東アフリカは印度に近接してをり、容易に開拓することができるであらう」(註18)と獨斷してゐる。大陸の沙漠周邊なかんづくサヴァンナ地域の交通を促進するために、シリア人をすら駭駝の馭者として入植せしめた。しかもシリア人は原住民を壓迫して、自己の部落を形成したのであつた(註19)。かうした事象と印度人に對する拒否的方策とを比較對照すれば、英國的濠洲人の空間保有についての眞意が奈邊に存するかを十分に察知することができる。

註1 Gregory: 154.

ニュー・サウス・ウェールズ州への支那人の移住を妨止するため、人頭税を設定し入州に際して一人當り十磅を課税した。また船貨については一人當り荷物百噸以上を禁止した。

註2 一八八八年三月、支那移民の制限につき英本國政府に抗議を發したところ本國政府から四月に入つても何等の回答に接しなかつた。たまたま、支那移民を乗せて四隻の船がシドニー港に入港した。ニュー・サウス・ウェールズ州首相ヘンリー・パークス(Henry Parks)は強硬方針を固持し、支那人移民の上陸禁止を斷行したのである。(Gregory: p. 155.)

註3 Geisler: S. 34, 108.

Gregory: p. 155.

註4 Gregory: p. 216.

註5 Gregory: p. 217.

Gregory: *White Labour in Tropical Agriculture. A Great Australian Experiment, the Nineteenth Century, Feb., 1910* p. 378.

註6 (イ)木曜島では、年平均気温は七〇度乃至七八度、温度の變化は約六八%乃至七八%、(ロ)タウンズヴィルでは、年平均気温六六度乃至八二度、温度の變化は六四%乃至七四%である。このやうな氣候は、印度のカルカッタに類似してゐる。(Griffith Taylor: *Australian Environment as controlled by Rainfall, 1918, p. 117*)

註7 Gregory: p. 155.

註8 Jose: p. 200. Gregory: p. 156.

註9 Jose: p. 201.

グレゴリーによれば、カナカ族の賃銀は一年三磅であつた。白人の一週間分乃至三日分の賃銀に相當した。しかし、カナカ族には、この賃銀の外に薬代、宿所費、食費等を見込まなければならぬから一年二五磅——三〇磅に上つた。(Gregory: p. 220.)

註10 Gregory: p. 157.

グレゴリーは、クイーンズランドからカナカ族を排斥した理由につき、當時の聯邦労働黨首領ワットソン(Watson)に對し、「北濠洲の發展を期する上において、カナカ族の排斥は果して賢明であるか」と質したところ、ワットソンの返答は「カナカ族の存在は労働市場に對して不安を導入した。クイーンズランドの勞務者が失業したとき或は栽植事業の不振なる時期において濠洲在住英人の勞賃が低下するといふ不安が生ずる」といふにあつた。この言葉は 白濠主義——英國的白濠主義の一つの大きな要因を端的に表明してゐる。

註11 Gregory: p. 218.
註12 Gregory: p. 219.

甘蔗生産額は次の如き数字を示した。
カナカ族の勞力に依存せる時期

年	栽植面積(英反)	甘蔗(噸)	甘蔗糖(噸)
一九〇〇—一年	一〇八、五三五	八四八、三二八	九二、五五四
一九〇五—六年	一三四、一〇七	一、四一五、七四五	一五二、二九九
カナカ族の勞力に依存せざる時期			
一九〇六—七年	一三三、二八四	一、七二八、七八〇	一八四、三〇五
一九〇七—八年	一二六、八一〇	一、六六五、〇二八	一八八、三五二

—以下略—

註13 Gregory: p. 163.
註14 Gregory: p. 164.
註15 Gregory: p. 165.
註16 Gregory: p. 158.
註17 Gregory: p. 159.
註18 Gregory: p. 158. (アフリカにおける印度人が如何に取扱はれたかを考察するを要する)
註19 Geisler: S. 53.

第九 結 言

白濠主義が採用せられざる以前において、北部領には、英國系ヨーロッパ人以外の勞力によつて運営せられ、それが効果を發現してゐたといふやうな事例、例へば、クイーンズランドにおける甘蔗栽植に見る如き施設は存在してゐなかつた。それ故に、北部領の開発は白濠主義を採用したるが故に、失敗したとは直接論議し得ないかも知れぬ。しかし、若し、アジア人の開發能力を北部領の地盤に結びつけたならば、如何なる成果を發現し得たであらうか。或は、クイーンズランドの甘蔗栽植の史的事實に見る如く、アジア的勞力を提供して一定の開發限度に到達したる場合に、自然方域を經濟方域に轉換せしめ得た利那において、勞力の提供者は、それぞれの生國へ返還せられるといつたやうな事態を繰返してゐたかも知れぬ。しかし、このやうな措置を繰返すべく、餘りにもアジアの空間壓力は増大し過ぎてしまつた。それ故に、アジアを恐れて白濠主義政策に立脚する北部領の開発工作が行はれた。しかし、白濠主義政策は、既往の實績に徴し、北部領の開発においては、その本質的に、その能力を具現し得なかつたのであると論議し得るのである。

もとより、北部領の開発は、今日においても狹義における利益圖としての經濟的開發を目標としてゐる限りにおいて、それは綜合的統一的生活空間構成への發足の徵表をすら示してゐない。斷片的個別開發が恣意的に徐行せられてゐるその限りにおいて、それは正に空間の浪費である。

第六章 大洋洲の地政學的勢力線

第一 空間的配置と區分

大洋洲を包括してゐる海洋空間は七千萬平方杆であると評價せられてゐる。海面に散在してゐる島嶼空間の面積は僅かに一二六萬平方杆に過ぎない。この島嶼空間を内部島嶼弧線と外部島嶼弧線とに分離して、その面積を計算すれば、内部島嶼弧線に位置する島嶼の總面積は、一二一萬二千平方杆、外部島嶼弧線に位置する外部島嶼弧の總面積は、僅かに四八、二二五平方杆を算するに過ぎない(註一)。

ここにいふ内部的島嶼弧線(内部島弧)とは、ニュー・ギニアから新西蘭にいたる島嶼弧線を意味し、地圖上、濠洲大陸に包括的に連なつてゐる。それは、所謂、メラネシア空間を占める島弧であり、三部分にわかれてゐる。その一は、新西蘭であつて地理的位置と植民的發展といふ二點から特に重視せられる。

その二は、ビスマルク(Bismarck)群島及びソロモン(Salomon)群島であり、ニュー・ギニア島の從物的存在である。

その三は南メラネシア空間として包括されるサンタ・クルーズ(Santa-Cruz)、バンクス(Banks)、ニュー・ヘブリディース(New Hebrides)、ニュー・カレドニア(Neu Kaledonien)等の諸島であり、これに、ロード・ホーウ島(Lord-Howe)やノー・フォーク島(Norfolk)をもつけ加へることができる(註二)。

外部島嶼弧線のうちには、二つの大きな群島が包括せられる。その一はハワイ諸島であり、その二はフィジー諸島(Fiji)である。この外部島嶼弧線は、ミクロネシア空間とポリネシア空間とを包括してゐる。ミクロネシア空間のうちには、パラオ、カロリン、マリアナ、マーシャル及びエリスの諸島が包括せられてゐる。この空間は既に「わが南洋群島」として、その位置價值を發現してゐる。ポリネシア空間に包括せられる諸島は、それぞれ、その位置に従つて區分せられ、北部、中部及び南部ポリネシア空間において、それぞれ包括せられる。北部ポリネシアには、ハワイ諸島があり、中部ポリネシア空間に包括せられる諸島は、赤道の兩側、東經一八〇度と一五〇度との中間に位置してゐる。但し、これらの島嶼のうちで、クリスマス島(Christmas)だけが、距離的に孤立した位置を占めてゐる。南部ポリネシア空間に包括せられる諸島は、これを、さらに南西ポリネシア、中間ポリネシア及び南東ポリネシアに區分し、南西ポリネシア空間には、サモア諸島(Samoa)、トケラウ島(Tokelau)、トンガ諸島(Tonga)、マニヒキ諸島(Maniki)及びフェニクス(Phoenix)諸島等が包括せられる。さらに、フィジー諸島も、この空間に包括できるのであるが、しかし、この諸島の位置が西方に偏在してゐること、及び原住民の分布状態から、メラネシアの過渡空間に位置すると認められてゐる。かうした中間ポリネシア空間にはミクロネシアとポリネシアの過渡位置を占めるギルバート諸島、メラネシアとポリネシアとの過渡的位置を占めるサンタ・クルーズ(Santa-Cruz)諸島その他、ニュー・ヘブリディース諸島(Neu Hebrides)、バンクス諸島を包括することができ、南東ポリネシアに包括せられる諸島は、廣汎な擴散的狀態におかれてあり、殆ど珊瑚礁から成立してゐる。すなはち、クック諸島(Cook)、ツプアイ諸島(Tubuai)、タヒチ諸島(Tahiti)を數へることができ、さらに、この

圈内へはパウモツ諸島 (Paumotu)、マルケサス諸島 (Marquesas) を包括し、終局においてさらに遙か東方に位置するオーステル島 (Oster) やサーラ・イ・ホームズ島 (Sala y Gomez) をも、とりしれることができる (註2)。しからば、これらの大洋洲諸島における政治的勢力分布及びその動態的要因は如何なる形相を示してゐるのであるか。次節においてこれを検討する。

註1 Geisler: Australien u. Ozeanien (1938.) S. 7.
註2 ガイスラー博士によつて面積を示せば次の如くである。

島嶼名	面積(平方軒)
新西蘭	二六七、四九七
北島	一一四、二九五
南島	一五、五二五
チャタム島	九六三
ステュワート島	一、七一四
第二部分	
ニュー・ギニア	七八五、〇〇〇
ビスマルク群島中	
ノイボメルン島	三三、七〇〇
ノイ・メクレンブルク島	七、〇〇八

ゾロモン群島 四、四〇〇

第三部分

ビスマルク群島中	九四〇
サンタクルーズ島	一二、二九八
ニュー・ヘブリディーズ諸島	八〇〇
バンクス島	一六、一一七
ニュー・カレドニア島	一六
ロッド・ホーウエ島	三九
ノイ・フォーク島	

註3 Geisler: 同

外部島嶼孤線に位置する諸島の面積は次の如くである。(わが南洋群島及びハワイ諸島の面積は除く)、(單位平方軒)

フィジー島	一八、三四四
クリスマス島	六〇七
サモア諸島	三、四五九
トウケラウ島	一三
トンガ諸島	九九七
マニヒキ諸島	一二
フェニクックス諸島	一四二
クック島	三〇八
ツバアイ島	一八七

第一 空間的配置と區分

タヒチ諸島	一、六四七
パウモツ諸島	八六〇
マルケサス諸島	一、二七四
オーステル島	一一八
サーラ・イ・ゴームス島	四

第二 衛星的機能

濠洲大陸と新西蘭とが、政治的統一組織をもち、タスマン海を内海化し、政治的重心としてカンベラを強化したならば、大洋洲に對して、ひとつの大きな壓力を發現することができるであらう(註1)といふことは、大東亞戰爭前においてドイツ地政學者によつて示唆せられたのであつたけれども、このやうな地政學的成長の傾向は、殆ど具現せられなかつた。

今日においては、わが南方圏の具有する地政學的壓力が大洋洲に對し極めて大きな射光を與ふるにいたつてゐるこの大きな射光の地政學的要因として指摘せらるべき顯著な標識は

(イ) わが南洋群島を發足空間とする南海空間への方向である。わが南洋群島においては、同群島がわが勢力圈内に編入せられてから、極めて急速な開發と人口充填とが行はれた。このことは、ミクロネシア空間を承繼し、ミクロネシア空間の有つ海洋空間の成長を、その本來の形相において促進せしめることのできる能力を具有するものはわが國を藉いて他にこれを求めることができないといふ事實を十分に實證してゐる。太平洋原住民本來の生活空間

を防衛し、これを維持し、これを高度に開拓することにおいて、わが國の海洋空間政策は、極めて剋切な機能を發現し、極めて優秀な實績を収めることができた。このこと目體が、この空間内に位置するナウル島において、またミクロネシア空間に北接するチャモロ空間に位置するグム島において、米英的異質的關入勢力が持續されることを拒否して、これに對抗し、これを除外せんとする有機的な對抗壓力を内發して來たのである。この機能は消極的性質を具備してゐた。

(ロ) 同時にまたこの壓力は、積極的な機能においてもあらはれて來た。それは南海における太平洋原住民の生活空間を擁護しようとする機能であつた。米・英はミクロネシア空間に政治的南方限界を劃しこの限界を恰もローマ法王の地球分割線同様に維持しようとし、この限界外の大洋洲すなはち、ポリネシアの海洋空間、メラネシアの海洋空間において、米、英的經濟帝國主義的世界觀による武装出撃基地を構築し、よつて以てミクロネシア空間の南方空間の以北に、太平洋本來的な生活空間を閉鎖しようとした。この米、英的遮斷勢力を超越しようとする空間機能は、正に積極的機能である。ここに「南海空間編成の仕上げのための發足」といふ偉大なる大洋洲空間政策の必然的なる出發を認めることができる。

(ハ) さらに、大東亞海に内包せられたインドネシアの壓力の方向が南海へ向つて、膨脹、擴大的傾向を促進してゐるといふ現實的事象を看過することができぬ。

かうした地政學的諸要因は、濠洲大陸——新西蘭を中心星座とし、大洋洲諸島を、衛星化しようとする試みを、遂に未完成のうちに葬り去つたのである。

第二十六圖 大洋洲島嶼空間と勢力圏の交錯



もとより、濠洲の聯邦首府、カンベラの建設動機としては、濠洲——新西蘭の政治的大空間組織がとり入れられてゐたことは、夙にハウスホッフ博士が太平洋地政學において指摘してゐるところである。同博士は、この試みに對して新西蘭が反對したために具體化するにいたらなかつたといふことにも言及してゐる。新西蘭の反對の故にこの試みが具體化しなかつたといふことは、最も現實的な支障として認められなければならぬであらう。しかし、この試みが地政學的な合理性を有つてゐるか否かといふことについては、この試みの有つていまいつの本質的な部分すなはち、濠洲——新西蘭にとつて、果して大洋洲の諸島は、地政學的衛星としての機能を發現することができるかどうかといふ點についての吟味を必要とする。このことは、大洋洲の諸島が、濠洲——新西蘭の衛星たるべく、果して地政學的に完成せられてゐたか否かといふ點についての検討を要請されるといふことを意味するのである。この場合、われわれは、大洋洲の島嶼散布面を地圖的輪郭にもとづいて、これを一括して、觀念的な形象を想定しこれに依存してその衛星的機能を誇りやかに評價することはできぬ。またこれと反對に個々の島嶼を一つ一つ抽出して、この島嶼のもつ自然的な與件を吟味し、その土地空間の性格が貧弱であるといふ理由から、衛星的機能の一部を擔當することにおいて、その機能において缺けるところがあると即斷することも許されない。

しからば、この問題を検討する基本的照準は、如何なる事象において把握せられるのであるか。陸地空間としての「中間ヨーロッパ」(註2)の東境は民族交織地帯として、パッサルゲによつて指摘せられた。それは極めて雜然たる空間形相を、過去の歴史において示してゐたからである。これと同様の形相を、大洋洲の海洋空間において認めることができる。それは、正に海洋勢力的交織地帯としての特徴を示してゐた。東ヨーロッパ陸

地空間における場合においては、「民族帯」の混交によつて示されてゐるに反し大洋洲空間においては、島嶼空間における人種的混淆といふ事象のほかに、海洋空間における海洋勢力の交錯といふ交織的勢力交錯が、前景にあらはれてゐる。しかも、この海洋勢力の交錯は海洋空間の有つ本來的な機能と結びついてゐるが故に、大洋洲の場合においては、「中間ヨーロッパ」といふ陸地空間における場合とは、異つた特質があらはれて來るといふことが認められなければならない。かうした特質は、海洋勢力によつて領域的基礎が確立せられてゐたか否かといふ點に關聯する。

かうした觀點から、濠洲——新西蘭に對する大洋洲諸島の衛星的機能は、地政學的に未完成であつたと論ずることが出来るであらう。かうした未完成は、同時に、南太平洋空間の新なる空間編成を、新なる海洋勢力によつて、太平洋の本來的勢力によつて確立されることを促進する。

註1 K. Haushofer: Geopolitik des pazifischen Ozeans. S. 152.

W. Schaefer: Australiens Wirtschaft. 1931. S. 29—30.

F. Metz: Die Hauptstadt (Vehpolitische Mittheil. Bd. 18) S. 100—101.

聯邦首都カンベラの建設に際し、新西蘭が反對したばかりではない。また、新首都の位置を決定するに當り、シドニーとメルボルン兩都市の間にそれぞれ意見の衝突を來たし、結局シドニーとメルボルンから殆ど同距離に存在するカンベラ盆地に新首都を建設することになつた。この都市計畫については、合衆國の建築技師の作成した歴大な計畫案が採用せられたが、この案に織込まれたる目標は、ワシントンとニューヨークといふ關係に類似した相互作用を、カンベラ——シドニー、カンベラ——メルボルンに適用して、それぞれの機能を發現し、防衛的見地からジャーヴィス軍港を強化しようといふのであつた。一九二七年五月九日、カンベラの建設に着手された際において、濠洲の大衆は、歡呼して聯邦首都の創成を祝福したのである。しかしながら、住民僅かに八千人。議會の會期中に限つて、政界關係者が集合する。従つて、デイリー・ヘラルド紙(一九三一年四月九日)の如きは「世界において最も寂寞たる首府である。」と批評してゐる。

註2 中央ヨーロッパ (Mitteleuropa) は一般にフリードリヒ・ナウマン (F. Nauman) によつて提唱せられたといはれてゐる。ナウマンの中央ヨーロッパは北は北海及びバルト海から南はアドリア海及びドナウ平原の南端にいたる區域であつた。

また、その後、アルブレヒト・ペック教授 (A. Penck) は、中間ヨーロッパ (Zwischenuropa) 論を唱へ、ドーバー海峡からフィンランド——オデッサにいたる區域を指稱した。本稿で論ずる區域は、かうした區域の東邊地帯を意味する。

第三 大西洋的勢力と大洋洲空間

大洋洲の島嶼空間における交織地帶的色彩は、英、佛の勢力闘争の交錯に起因する。英國的勢力の太平洋への闖入はハワイ問題の介入において、失敗した利那において加奈陀——濠洲——新西蘭の結びつきを遮断せられたのであつた。従つて、北太平洋空間における英國的利益圏の設定は、領域的完成を成就することができなかつたと論定しうるのである。これに反し、南太平洋空間については、これに介入することができ大洋洲における英國的所有を増大することができた。そして、この闖入空間をその利益圏として仕上げるといふ目標のもとに運営せられた。すなはち、英國は濠洲大陸を所有すると同時に、一八四〇年には新西蘭を獲得した(註1)。さらに一八三一年にはピトケーン島(註2) (Pitcairn) を領有するにいたつた。このことは、南東ポリネシア空間への英國的勢力の闖入

を意味する。ここにおいてビトケアン島——新西蘭——濠洲といふ東西的結びつきにおいて、大洋洲海洋空間の底邊的英國勢力線の方向が規定せられたのであつた。

次にフランスの南東ポリネシア空間への闖入は(註3)、一八三八年のタヒチ島(註4)の所有を端初とし、一八四二年には、マルケサス(Marquesas)の保護領宣言、さらにその後二年にして、マンガレワ島(Mangarewa)が佛領に編入せられた。一八八〇年にはパウモツ諸島(Pamotu)を、一八八五年には、これらの島嶼空間を包括して佛領オセアニア植民地として、政治的に規定せられたのである。この空間枠の内面においてのみ、佛國が、小規模の植民帝國を構築することができたならば、或は、大洋洲の政治的緊張が生起しなかつたかも知れぬ。さらにまた英國が、ハワイ島への介入を米國の勢力によつて閉出された後、これを契機として、専ら南太平洋空間の底邊、すなはち濠洲——新西蘭——ビトケアンの結びつきの方向において、海洋的勢力圏を設定してゐたならば、或は大

洋洲空間の政治的緊張への進行は極めて緩慢化せられたであらう。

しかしながら、かうした限界的规定は、種々雑多なる根據から恣意的に、蹂躪せられたのである。

すなはち、佛國の勢力は、一八五三年、メラネシア空間とポリネシア空間との漸移的空間に位置するニュー・カレドニア島に闖入するにいたり(註5)、さらに一八六四年にはニュー・カレドニア島に近在するロヤリテイ島も亦、圈内に包括せられ、ここに濠洲——新西蘭の内部的島弧における重要な空間位置が、佛國によつて確保せられるにいたつた。このことは濠洲と新西蘭との結びつきを阻害する極めて有力なる地政學的要因であつた。濠洲——新西蘭にとつて、内部島弧を地政學的外堡化することができなかつたといふ大きな要因でもあつた。當時、濠洲に

おいては各州間の内部的葛藤甚だしく、各州の分離自治運動による軋轢深刻を極め、佛國の勢力によるニュー・カレドニア確保については殆どこれを等閑視して顧みなかつたのである。しかるに佛國は占據後十年、對岸の濠洲における英國的施策を模して、一八六三年、ニュー・カレドニアに流刑植民地を設定するにいたつた。一八七〇年、普佛戰爭の結果バリーに暴動勃發するや、佛國政府は暴動参加者を捕縛し、一時に四千餘名の政治犯人をニュー・カレドニア島へ送つた。しかるに、これらの流刑囚徒は、同島においても、暴動を企圖し、或は脱走を企て、對岸の濠洲へ脱走する者も相つぐにいたつた。ここにおいて、英國政府は、自國は形式的には既に一八四〇年において流刑移民制を廢止してゐたといふ事例に鑑み、佛國政府に對して、流刑移民制度の廢止を要求した(註6)。このことはニュー・カレドニアの地政學的位置がタスマン海を隔てて濠洲大陸へ何等かの様相において壓力を及ぼすといふ地政學的な、極めて素朴な徵表として認められるのである。さらに佛國の勢力は、引續き内部島嶼弧線の斷續線を進んで北進し、ニュー・ヘブリディース島へ闖入した。一八九二年には、佛國植民商社は同島各地に農園を開闢し、ニュー・カレドニアとの間に定期航海を開始した。かうした積極的施設は、濠洲に對して脅威であると解せられ、一八八七年に英・佛協定成立し、英・佛の混合委員會によつて同島を管理することとなり、さらに一九二七年の協定に基いて英・佛共同統治制度が施行せられるにいたつた。一九三六年の調査によれば、同島住民四、三〇〇人のうち、佛國人は八五一人、英國人は二五一人、アジア人は一、〇〇〇人である(註7)。この住民數はメラネシア、ポリネシアの漸移的生活空間傳統の持續を物語つてゐると同時に、かうした漸移空間と大東亞的生活空間との生活的結びつきの必然性を數字的に示現してゐる。また、英國ではニュー・ヘブリディース島への佛國の勢力闖入は、濠洲

への脅威であるとして、共同統治制度創設の端緒を開いたのであるが、今日、その住民数において見られるやうに、佛人數は遙かに英人數を凌駕してゐるのみならず、ニュー・ヘブリディースの空間の廣さと濠洲大陸とへの距離並びに占據當時の武器の進歩の段階より論ずれば、英國當時の施策は、濠洲への脅威を交除するために共同統治制度創設を要求したのではなく、むしろ、英國的權力政策のニュー・ヘブリディースへの貫通を目標としてゐたと論ずることができらうであらう。

註1 新西蘭に對する英國的權力の優越は一八四〇年二月六日ワイトンギ (Waitangi) 條約によつて認められた。(Jose: p. 124) 同條約は第一條酋長の有つ一切の統治權を英國王に讓る。第二條土地所有の不可侵——土地買却の場合は英國に提供する。第三條マオリ族に對し、英國臣民としての一切の權利を與へる。當時マオリ族は、この條約の意義を理解できなかった。それ故に一八五六年にマオリ族が叛起したのであつた。同條約によつて新西蘭の統治權を獲得し、翌一八四一年五月、ニュー・サウス・ウェールズ植民地から新西蘭を分離して英國の直轄屬領と規定したのである。

註2 ビトケアーン島は面積七平方軒、海拔三三八米の山が聳えてゐる。この山は玄武岩によつて構成せられてゐる。珊瑚礁を認めることができぬといふ點において、この島は、周邊空間に存在する諸島嶼とは、異なつた性格を有つてゐる。一七六七年、C. C. ビトケアーン (Pikeain) によつて發見せられた。發見の際には、無居住島嶼であつた。しかし、かつて文化的原住民によつて居住せられたといふ偉大な痕跡が發見せられた。それは、記念碑や繪畫を刻んだ石柱の存在であつた。一七九〇年、英國はこの島へ、船長ブライ (Bryce) に反抗した船員十五名とタヒチ島から十二人の女性とを送つた。その後、二回入植が試みられ、今日においては人口一四〇人、一平方軒の密度三五人を算してをり、住民は農業、牧畜及び漁獵に従事してゐる。

註3 Gesler: S. 171—172. Gesler: S. 351. (一九三〇年版)

註4 Jose: p. 232—233.

ジョーセによればタヒチ島へ最初、到着したヨーロッパ人は英國人のクックやブライであつて既に一八二五年に、タヒチの女王ポーマー (Poumare) が英國の保護の下に存立したいと要求して來たのであるが國際的慣習を考慮して保護領宣言を行はなかつたのであると記述してゐる。しかるに、フランスにおいて、一八三〇年ルイ・フィリップ (Louis Philippe) が王位につき、大衆なかく商人達の意向を重視し、海外市場を擴大して、一大植民帝國を建設しようとしてみた。アルゼリアを獲得したフィリップは、さらに眼を太平洋に轉じ、艦隊を派遣してタヒチ島を占據し、これをフランスの保護領となした。今日の佛國大洋洲植民地は、次の如き島嶼空間的構成を示してゐる。

	面 積 (平方軒)	住民 (一九二六年調査)	住民 (一九三六年調査)
ソサエティ諸島(タヒチ島を含む)	一、六四七	二五、五七〇	
マカテエア島	二五	一、〇八六	
パウモツ島(トアマツ)	八六〇	四、二七六	原住民 三一、三七〇
マルケサス島	一、二七四	二、二五五	佛人 六、四一〇
ガムビア島(マンガレワ)	三〇	五〇一	その他 五、八二〇
アウストラル島(ツプアイ)	一二四	二、九四〇	
ラバ島(オポロ島)及びバス島	四〇	二三〇	
計	四、〇〇〇	三六、八六二	四三、六〇〇

備考 一九二六年の住民数は(ガイスラー一九三〇年版—三九八頁)による。また、一九三六年度の住民数はガイスラー一九三九年版—一五〇頁による。

註5 ニュー・カレドニア島は、一七七四年、クックによつて發見せられたが、ナポレオン三世の指令によつて占據せられた。

(Jose: p. 234.) 同島は當初、佛國大洋洲植民地の一部であつたが、一八六〇年にいたつて獨立の植民地として取扱はれることになり、一八六四年にはロヤルティ諸島を併合した。今日の佛領ニュー・カレドニア植民地の地域構成は次の如くである。

面	積(平方軒)	住	民	數
ニュー・カレドニア島	一六、一一七	五、	八七六	
ロヤルティ島	一、九二七	内、	佛人	
ビニエゾ島	一五四	一六、	一七四	
チエスターフィールド島	一			
ウオリズ島	九六			
ホーレン島	一五九	五、	七五四	

備考 右の島嶼のうち、ウオリズ島 (Uolis) 又は (Uis) 及びホーレン島 (Loom) 又は (Looma) の二島はサモア島とフィジー島との中間に位置し、南西ポリネシア空間に存在する。

註6 Jose: p. 236.

註7 Geisler: p. 172. (三九年版)

第四 勢力域の變貌(英・米・佛の勢力消長)

ニュー・ヘブリディース島とニュー・カレドニア島とを結びつけて、一つの佛國的空間勢力を南太平洋に確保しこの海洋空間とタヒチ島を中心とする所謂佛領オセアニア植民地との結びつけをなすために、ニュー・ヘブリディ

ース島への英國的勢力の介入は佛國的發展の基礎を脆弱化せしめたと論ずることが出来る。のみならず、タヒチ島とニュー・ヘブリディース島との中間に存在する主要なる島嶼空間を英國的勢力圏内にとり入れられたことによつて、佛國の南太平洋上の植民的勢力は分立的配置におかれるにいたつた(註1)。

佛國は、ここにおいて、南東ポリネシア空間において、一箇の佛國の植民帝國を建設しようとして試みた。しかしながら、この空間においても、クック島とマヒキ島とは英國領である。それ故に、この海洋空間において佛國的な固有的發展を再現すべく、餘りにも土地空間的基礎が薄弱であつた。南東ポリネシアの空間は、太平洋上においても孤立的海洋空間である。この方域に對し、太平洋の對偶的空間たる大西洋から發足して、ここに南太平洋上の植民帝國を建設するといふことは、それ自體、一つの幻想曲であり、牧歌であらねばならぬ。佛國はタヒチ島を、かうした孤立的海洋空間の交通的軸點として完成しようとして試みた。首都パペーテ (Papeete) の人口は、八、六四〇人を數へてゐる。また、佛國大洋洲植民地の全住民四三、六〇〇人、うち原住民は三一、三七〇人、佛國人は六、四一〇人を數へてゐる。佛國は、この土地空間の經濟的開發に着手し、棉作、果樹、コーヒ、椰子の栽植を行った。しかし、これらの栽植事業は、佛國人よりも支那人の手によつて運営せられるにいたつた(註2)。

さらにまた、佛領大洋洲植民地を構成するマルケサス島においては、住民數の減少傾向が著しく、一八五六年には、ポリネシア系住民一二、五〇〇人を算したのであるが、現在において二、二五〇人といふ減退を示してゐる(註3)。さらに、パウモツ諸島における人口密度は、今日、僅かに一平方軒、五人といふ稀薄な状態を示してゐる(註4)。所謂フランス的大洋洲植民政策は、所期の効果を發現することができなかつたのである。かくして、佛國

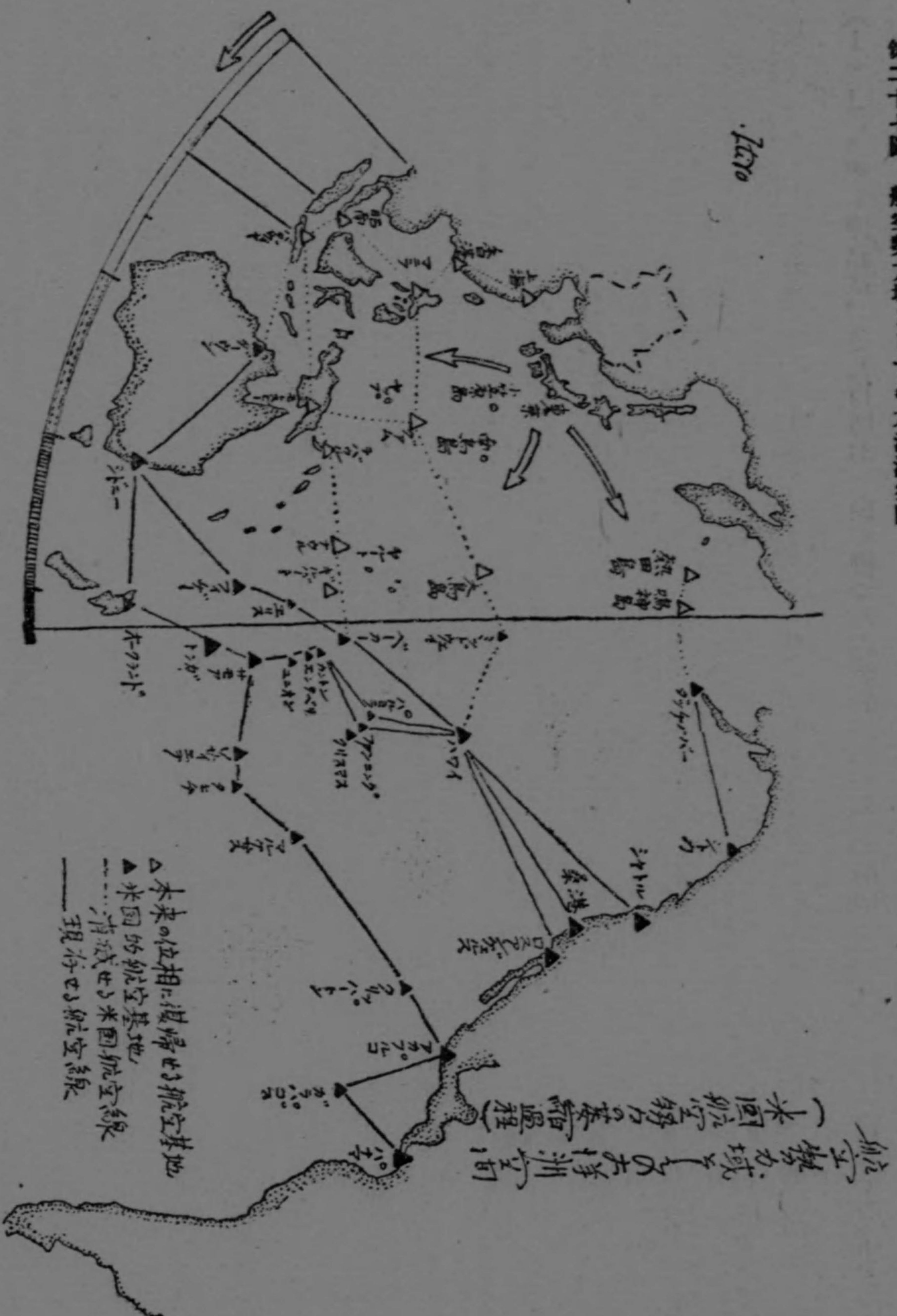
大洋洲植民地は外部島嶼弧線の末端において、弧立的な運命におかれてゐる。南東ポリネシア空間における佛國の勢力の成長を阻止すべく、この空間の西南隅には英領クック島、この空間の南方海洋空間には英領ビトケアーン島、さらに、この空間の東南隅には智利領オーステル島(註5)が存在し、佛國の勢力の成長を阻止してゐる。

フランス的勢力の内部島嶼弧線の進出に對抗するかのやうな形相を帯びて、英國的權力圏は南東ポリネシア空間へ闖入した。そして既述のやうに、クック島やビトケアーン島を占領したのであるが、さらに南西ポリネシア空間への轉進も行はれた。既に、この空間への英國的勢力の進出は、一八七四年フィジー島の占據によつて露呈せられてゐた(註6)。すなはち、フィジー島は南西ポリネシア空間への漸移空間に位置してゐたのである。一八八七年には、マニヒキ島(Maniki)とファンニング島(註7)(Fanning)とを占據し、さらに、その翌年には、ユニオン諸島(Union)を領有し、さらにフェニックス島(Phoenix)に及び、一八九二年にはエリス島を占據し、一八九八年にはサンタ・クルーズ島(Santa Cruz)一八九九年にトンガ島(Tonga)(註8)を英國的勢力圏内に編入した。さらに前世界大戦後においては、サモア島を割取したのであつた。

かうした英國的勢力の南東ポリネシア空間並びにその漸移空間への闖入のうちにおいて、特に注目すべきは、フィジー島の領有と、サモア島の割取とナウル島の略取といふ三つの事象であり、また、米國の勢力については、サモア島への介入といふ事象である。以下この三つの島嶼空間について検討を試みる。

(1) フィジー諸島は、それ自體が一箇の纏つた島嶼的單位空間を構成してゐる。約二百五十の諸小島によつて環狀に總括せられた島嶼空間の總面積は一八、三四四平方杆に達する。最大の島嶼ヴィティ・レヅ島(Viti Levu)

第二十七圖 航空勢力域としての大洋洲空間



第四 勢力域の變貌(英・米・佛の勢力消長)

は、面積五、五〇〇平方軒を有つてゐる。土地景觀はメラネシア的景觀を示してゐない。植物景觀も異つてゐる。原住民はメラネシア系よりも、文化の程度が低い。ヨーロッパ人は四、〇〇〇人を算する(註9)。この數字によつて、如何に英國がフィジー島を重視してゐたかを察知するに難くない。この島の經濟的開發は、第一に甘薯栽植によつて行はれた。製糖工場も設置せられた。また、バナナは濠洲、新西蘭へ輸出せられた。椰子樹の植林も行はれさらに牧畜事業も經營せられてゐた。メラネシア空間においては、牧畜業の運營が不良であるにもかかはらず、フィジー島においては、良好なる經過を示してゐる。ポリネシア系と同様原住民は栽植作業に適應しないといふ理由の下に、印度人が栽植勞務者として移住せしめられた。その數、八五、〇〇〇人に達する。ここに、所謂、海外インド人主義の擡頭するといふ地政學的根據の一つが存在する。インドネシア的空間壓力は南西ポリネシアの漸移空間を指向してゐるといふことは、敢へて過言ではなからう。しかしながら、英國的勢力の支撐點として、フィジー島は、その港灣設備と海底電信の基地として、從來、特殊な關心が注がれてゐた。すなはちヴィティ・レヴ島の新海港都市スヴァ(Suva)は良港であつて、原住民は一五、五〇〇人、英人約一、〇〇〇人が居住してゐる。それ故に、スヴァは、外部島嶼弧線においては、ハワイ群島と對稱的位置價值を有つものとして注目せられるにいたつてゐる。また、ヴァンクーヴァー・ファンニングリフィチー・フォークリプリスベーンといふ系列における海底電信の連結においても、フィジー島の空間位置は、英國の大洋洲における核心的空間として評價せられてゐたことを察知することができらう(註10)。

(2) サモア群島 サモア群島は南西ポリネシア空間に位置する。この群島は、サワイ(Savaii)、ウボル(Upoli)

ツツイラ(Tutuila)の三つの島嶼より成り立つてゐる。サワイ島(面積一、七〇七平方軒)とウボル島(一、五五〇軒)は、夙に、ドイツ人によつて注目せられてゐた(註11)。前世界大戰の結果、サワイ島とウボル島とは新西蘭委任統治領に編入せられ、ツツイラ島は米國の勢力圏内に編入せられた。氣候は海上からの微風を受けて、快適であり、森林は殆ど灌木で交通を阻害しない。山嶽はサワイ島に海拔一、八五八米のヘルトハーベルヒ山があるがハワイ島における如き積極的な火山作用は認められない。同島の北東海岸に近くマタヴァヌ山(Matavunu)は、今日においても活動してをり、熔岩が流出して、海中へ注いだ痕跡を残してゐる。島の構造は全體として平面的な玄武岩から成り立つてゐる。都邑としては、ウボル島のアピア(Apia)とツツイラ島のパゴパゴ(Pango Pango)が目せられてゐる(註12)。アピアの背後には約一、〇〇〇米の標高を有つレプエ山(Lepue)が聳えてをり、この山の北方斜面空間が、この島嶼において最も居住に適應した方域として認められてゐる。一八五七年、この方域の開發に着目したドイツのゴートフロア會社(Gottfroy)は、代理店を開設し、定期貿易を開始したのであつた。

この方域において、特に注目すべきは颶風である。風向としては東風が最も強い。五月から八月にいたる間は、雨量が乏しい。雨季の終る頃に、恐るべき颶風が吹く(註13)。殊にアピア港については、颶風に對する防護設備が缺けてゐた。これに反し、米國の勢力圏にとり入れられたパゴパゴは、北方が開放してゐるのみで、他の三方面は悉く珊瑚礁で包圍せられてゐる。従つて、米國はこの地點に放送局、貯炭所並びに艦隊基地を整備したのであつた。このこと自體が空間位置との關聯において、ツツイラは米國の大洋洲への闖入尖端として裝備せられたと認められたのであつた。

英國勢力圏（新西蘭委任領）においては、ミッションを通じて英語を原住民に普及しようと試みた。ミッション・スクール就學の原住民兒童數は、戦前において一六、〇〇〇人に上つてゐた。原住民數は約五〇、〇〇〇人、支那人は五〇〇人、メラネシア系約一〇〇人を算する。支配層は約三、〇〇〇人の英人並びに混血種によつて構成せられてゐた（註14）。輸出の主要なるものは、コブラ、カカオ及びバナナである。一九二八年の輸出總額は四二二、〇〇〇磅であつたが、一九三四年には一二八、〇〇〇磅に減じた。一九三六年には二五〇、〇〇〇磅といふ數字を示してゐる。一九三四年の數字は世界不況、特にコブラの値下りによると解せられてゐた（註15）。かうした關係から戦前の英國經濟にとつては、この地域の經濟的重要性は漸次、低下したのであり、英國的文化の移植化に反比例して、この國土の經濟的開發については熱意は示されず、放任の状態におかれてゐたのであつた。

(3) ナウル島 ナウル島は、ミクロネシア空間に位置する。この空間の諸島嶼は夙に「わが南洋群島」の領域として包括せられてゐるのであるが、ナウル島だけが英國の殘燭的勢力を徵表するかのやうに異物的な存在を續けてゐた。この島嶼の面積は僅かに二二平方呎に過ぎぬ。その内約四平方呎が原住民の住む地域である。二百ヤードから三百ヤードの廣さに於て島の周圍に平地がある。島嶼内部は珊瑚礁でその最も高いものは海面から七十米の高度を有する。椰子の栽培はこの島の主要な産業であつて、約十一平方呎の地積を有する。またこの島の土地は久しい間海鳥糞によつて蓋はれてゐる。しかも雨によつて融解して珊瑚礁の岩と密着してゐる。

英國は、僅かに五千四百英反、廿二平方呎の小島を委任領として割取した。燐礦がナウル島に存在するからである。如何にこの燐礦が國內農業に必要であるか、それはドイツ人も夙に認めたところである（註16）。

燐礦の年輸送高は、約六九六、〇〇〇噸に達した（註17）。しかも、それは悉く、英本國四二%、濠洲四二%、新西蘭一六%の比率に於いて割當られてゐた（註18）。

原住民は、原住民千五百六十七、支那人九百三十三、英人百六十三人である。支那人の數が多いといふことは、燐礦を得ようといふ目的の熾烈さを證する。英人も或程度迄は同様の目的で同島に生活してゐる。一九二二年末には原住民は千百五十六人であつたが、その後十二年間に千五百六十七人になつた。以前相當數に上つてゐたカナカ族は採取労働者としての支那人の進出に依り驅逐せられ、著しくその數を減じてしまつた。英國は、ここにロンドン宣教師を送り宗教的開拓を試みたが、ガイスラーは「東洋的勞務者の多數の故に、ヨーロッパ文化の刻印を見ること極めて稀である」と論じてゐる（註19）。

さらに、ギルバート島については、ミクロネシア空間とポリネシア空間との漸移空間に位置する。ギルバート島とエリス島とが、英國植民地として存続しなければならぬといふ理由は、決して絶對的ではない。

註1 ウォリズ島とホールン島との面積が餘りにも狹隘であつた。それ故に、航空機の機能が今日のやうに評價せられてゐない時代においては、二つの小島嶼空間によつてタヒチー・ニュー・カレドニアの結びつきを持續することは、蓋し困難であつたといふであらう。

註2 Geisler: S. 150. (39年版) 前節註4 参照。

註3 Geisler: S. 172. (39年版)

註4 Geisler: S. 149. (39年版)

註5 Geisler: S. 150. (39年版)

オーステル島には、數百の石像がポリネシア系原住民の文化の痕跡を残してゐる。ポリネシア系原住民が、若し航海を利用して、この島に到達したのであるならば、必ずや、これらの原住民が、アメリカ大陸とも接觸してゐたであらうといふことを認めなければならぬ。前掲(註四)のピトケアン島の原住民文化と、この島の文化とは、同一系統に屬するといはれてゐる。一八八八年、智利領となり、流刑植民地として利用せられた。今日、殆ど開發せられず、住民は岩窟のうち生活し、バナナ、甘蔗、馬鈴薯を栽培してゐる。一七九三年、西班牙の航海家サーラス・イ・ゴームスによつて發見せられた無人島、サーラス・イ・ゴームス島とともに、オーステル島は智利が太平洋上に領有する二つの島嶼である。

註6 Jose: p. 234.

ジョーセの記述するところによれば、一八五九年、フィジー島から英國の保護を受けたいと申込んだが、英本國では同島の位置がシドニー—バナマ間の支拄地點として不十分であるといふ理由でフィジー島側の希望を拒否した。しかしその後、濠洲においてクイーンズランドの開拓のために、太平洋諸島の原住民を誘拐し始めた。フィジー島は、これがために苦しんだ。ここにおいてニュー・サウス・ウェールズ州總督ロビンソン(Hercules Robinson)が、英本國に説いて、一八七五年九月、フィジー島を英國の直轄植民地としたのである云々と。フィジー島を英國勢力圏内に編入した形式的理由は兎に角、その頃、既に英本國政府當局者の視角のうちに、バナマ—濠洲といふ結びつきにとつて好都合な位置を探究してゐたといふ事象の存在してゐたことについては特に留意する必要がある。

註7 ファニンング島は英國の海底電線の基地である。約四百人の勞務者がギルバート島から移住せしめられてゐる。この地の開發會社に勤務するため約五十五人の白人が居住してゐた。(ガイスラー三〇年版—三五七頁)

註8 Geisler: 172. (39年版)

トンガ島に對しては英國の保護下に王國を建設し、一九〇五年以來、英國はトンガの財政を管理してゐる。一九三六年における住民數は三二、八〇〇人である。

註9 Geisler: S. 145—146.

註10 Geisler: S. 146. S. 149.

註11 シュネー(Ludwig Schnee)は「サワイ島は、經濟的に最も重要な島嶼であり、聚落と開發との重心的地點であり、南海の科學的研究の基地である」と指摘してゐる。(Deutsche Schutzgebiete unter Mandatherrschaft 參照、拙稿新西蘭委任統治領サモア群島—太平洋第二卷五號—二四頁—二五頁)

註12 ガイスラーによれば、バゴバゴの人口は九四〇人である。(前掲書一四八頁)

註13 Geisler: S. 36—37.

一八八九年、ドイツ軍艦アドラー(Adler)及び「キートン」(Ellen)がアピカ港で遭難した。

註14 Geisler: S. 172.

シュネーによれば一九三四年—三五年における人口は次の如くである。(拙稿、太平洋二卷五號—二四頁)

	一九三四年	一九三五年
サモア人	四九、五〇一	五一、〇九四
ヨーロッパ人	五九二	五九六
雜	二、三九六	二、四四七
支那	五〇三	五〇三
メラネシア人	九五	九三

註15 Geisler: S. 173.

なほ、シュネーの記述するところによるも、同島開發への熱意は冷却してゐるやうである。未だ新西蘭委任領における生産能力については総合的な數字を得ることはできぬが、二、六〇〇平方呎の地域における資源は一般に考へてゐるよりも大

きい。カカオの輸出は、最近増加してゐる。一九三六年における輸出状況は次の通りである。

	輸 出 量	價 格
コ プ ラ	一三、二二二噸	一五六、八七三磅
カ カ オ	一、〇八二噸	四六、六〇七磅
バ ナ ナ	一二八、〇四五箱	四六、七三七磅

コブラの栽培者中、原住民は約四分の三を占め、残りの四分の一はヨーロッパ人である。一九三四年に比較して輸出は決して少いとはいへぬ。一九三五年には、コブラの市場価格が回復したので輸出の数量も増えた。カカオの輸出は、一九三四年には好調であつたが、一九三五年には天候に災されて半減した。

バナナも増加した。それはニュージーランドへ輸出されるのである。バナナの栽培は、一部分は原住民、一部は英人の手に依つて行はれてゐるが、しかしながら、カカオの栽培はヨーロッパ人によつて殆ど獨占的に行はれてゐる。

ゴムの輸出は數年來、全く停止されてゐたが、一九三五年に二五噸を輸出し、一九三六年においては五三噸を輸出した。

註16 一八八八年十月二日にドイツ軍艦エーベルがドイツ國旗をナウル島に掲げ、同島はドイツ領となつたのであつた。ヤルト會社に燐鐵獲得の権利が與へられた。一九〇五年にこの契約は更新せられ、九四年間すなはち一九〇六年四月一日から二〇〇〇年四月一日迄效力を繼續し得ることとなつた。ヤルト會社は政府の同意を得てロンドンのパシフィック燐鐵會社へ燐鐵採取の権利を與へた。その後國際聯盟によつてナウル島は英國の委任領となつた。一九一九年七月二日英・濠・新西蘭の三政府の取極めにより、一九二〇年十二月十七日ゼネヴァでナウル島が委任領たることを規定せられた。英國的利益圏内に割取されたのである。今日、この島嶼空間は皇軍の勢力圏内に復歸してゐることはいふまでもない。

註17 Geisler: S. 173.

シュネーによれば燐鐵輸送高は次の如くであり、本稿に掲載したガイスラーの數字より少い。

一九三〇年	二七一、二五五噸
一九三一年	二四五、一六五噸
一九三二年	四一八、一八〇噸
一九三三年	三六三、六八〇噸
一九三四年	四一八、九五〇噸
一九三五年	四八〇、九五〇噸
一九三六年	五四七、〇〇〇噸

註18 英・濠及び新西蘭の三政府當局の取極めに基づいて、この島の統治は總督によつて行はれた。最初の五年間總督は濠洲政府から任命される。五年が過ぎた後には、三政府の意見一致によつて更に總督が任命される。その取極めの第一條は、總督の権限を定め、第二條は燐鐵委員會の費用並びに行政費等はその不足分を補填するため燐鐵販賣利益から支出すべき旨を規定した。第三條の顧問會議は、三人の議員から成り立つてゐる。三政府から一名宛任命せられる。第七條は燐鐵の獲得、販賣は三人の顧問の諮問に待つ旨を、第十條は燐鐵が英本國、濠洲及び新西蘭へ割當販賣される旨を規定する。價格は第十一條第一項に基づき規定される。第十一條第二項は過剩の燐鐵に對する適當なる價格を附すべきを規定してゐる。第十四條によれば、燐鐵産額の割當は、英本國四二%、濠洲四二%、ニュージーランド一六%で、この比率に基づき、自國の農業へ割當られる。それは輸出目的に充當せられたものではなかつた。

註19 Geisler: S. 173.

第五 結 言

ミクロネシア並びにポリネシアの海洋空間における島嶼原住民は、米、英的勢力の闖入に對して大きな反抗を示

し得なかつた。反抗を試みなかつたから米・英が、この空間において恣意的に搾取的利益圏を設定することを得るといふ根據にはならぬ。今後單なる利益圏を設定するといふ目標の下に施策せられるところの島嶼空間の征服は禁ぜられなければならない。かうして施策は結果において原住民の存在を否定することになるからである。また、この島嶼空間相互における下層移動についても従来、無秩序恣意的に行はれた施策も匡正せられなければならない。この大空間において、ひとりアングロサクソン文化を滲透せしめ、これによつて原住民を支配しなければならぬといふ米英的制約は、太平洋の生活傳統にとつての唯一の至高の原動力として容認せらるべき筋台のものではなかつたのである。米、英的海洋勢力は、南太平洋において、海洋交織地帯を描き出してゐる。そこでは、海洋空間の恐るべき無秩序が露呈せられてゐる。

皇軍のニュー・ギニア並びにソロモン群島における恩威は、正にメラネシア海洋空間に對し米英的交織的恣意的壓力を解消するにいたるであらう。同時に、この皇軍の恩威は、既に「わが南洋群島」に包括せられた میکロネシア海洋空間の内在的勢力を高度に發揮することによつて、mikroネシア本來の圈内に歸屬すべき「ナウル島」や「ギルバート島」を、本來の空間位置に復歸せしむるとともに、他面メラネシア並びにmikroネシア海洋空間の内在的勢力を、新たに綜合することによつて、南西ポリネシア海洋空間及びその漸移海洋空間の秩序の建設に、大なる貢獻を致すであらう。

第七章 地中海の地政學的意義

第一序 言

地中海はアジア、ヨーロッパ及びアフリカの三つの大陸に包圍せられてゐる枝海であり、その四隅においては、ジブラルタル海峡を通じて大西洋へ、東隅においてはスエズ運河及び紅海を通じて印度洋へ連絡する。地中海民族は、如何にして地中海地政學を具體化しようとするか。ムッソリーニ首相は、一九三六年十一月一日、「地中海は他の民族にとつては通路である。しかし、イタリア人にとつては生命を意味する」と主張した。盟邦イタリアの地中海に對する地政學は、民族生命の源泉としての地中海を認識することにおいて「内海」に對する新しい認識の導入であり、その限りにおいて、われわれは、イタリアの民族によつて認識せられ、評價せられつつある地中海の地政學的意義の検討を要請せられるのである。

第二 空間的形象の特質

地政學的原因としてとりあげられるべきローマ地中海の空間的形象は

第一、地中海に臨むヨーロッパ大陸の沿岸（ヨーロッパ大半島の南部縁邊）形象とアフリカ大陸北岸の縁邊形象との間に著しき相違を認めることである。すなはち、アフリカ大陸の沿岸方域は、極めて單調なる臺地的形象を呈

し、殆ど沿岸線においては屈曲なく、僅かに大シルタ灣及び小シルタ灣の彎曲を示現してゐるに過ぎない。沿岸の背後地域においては、西部沿岸においてアトラス山脈及びシヨット臺地が東西的方向に連亘してゐる。これに反し、ヨーロッパ沿岸においては、地中海海溝を生起したると同一の壓力作用を演じた大陸塊の壓力作用が、主として第三紀において、西ユーラシアの地塊を混淆・煽起せしめ、ここにシエラネヴタ、ピレネー、アルプス、アペニン、ディナルアルプス、バルカン、コーカサス、ロドーベ等の諸山脈並びにアルメニア高地を斷續的に構成し、アドリア海、エーゲ海並びに黒海及び運河的島嶼において、極めて複雑多様な分枝化を示してゐる。すなはち、ヨーロッパ・アジアの側邊とアフリカの側邊とにおいては、極めて顯著な地形的對立が認められるのである（註1）。

第二、地中海海盆においては、東方海盆に比して、西方海盆が閉鎖的であるといふ事象である。すなはち、東方海盆においては、島嶼の散布夥しく、陸地空間と海洋空間との交錯は極めて顯著であり、西方海盆は東方海盆を、アペニン山脈によつて構成せられた半島によつて限界づけてをり、西方海盆は、その閉鎖・隔離性を東方海盆より、強度に發現することができたのであつた（註2）。

第三、地中海は、所謂十三度の等温線によつて、氣候的に綜合せられてゐるが、しかしかうした綜合のうちには、夏季と冬季とにおける相違を内包してゐることを看過することを許されないのである。すなはち、夏季においては、ギリシア人によつて名付けられたエテジエン氣候がその特徴を發現する、貿易風としての北風は寡雨にもかかはらず涼味をもたらず。冬季においては、北風が吹き地中海の風浪の動搖は高められ、降水量は増大するけれども、

温暖さは保有せられる。かくて夏季においては、アフリカの性格が著しく優越し、冬季においてはヨーロッパの性格が前景にあらはれるのである。従つて、ここにヨーロッパ的なものとアフリカ的なもの、すなはち、アフリカ的な静的作用とヨーロッパ的動的作用との交互作用がみとめられる（註3）。

第四、最後に植物景觀と水流との關係が注目される。降水量が五〇〇耗に過ぎないこと、地盤が可透性の石灰岩によつて構成せられてをること並びに廣大かつ肥沃な平原は存在せず、僅かに山脈相互間、ステップ或は沙漠の間隙に入り込んだ沃地が存するのみである。しかも、もし排水の自然的または人工的條件が具備せられざるに於ては、これらの沃地と雖、沼澤化する。これらの沃地においては熱帶的果樹（オリーブ、葡萄樹、扁桃樹、桃樹、無花果、杏樹）が、地中海植物景觀の特徴を示現する。このことに關聯して注目すべきことはヨーロッパ地中海縁邊においては、ヨーロッパ大西洋縁邊において認められるやうな大平原乃至森林地帯が缺けてゐるといふこと、いま一つは、大西洋縁邊域におけるやうな河川は存在せず、ローヌ河、ポー河、タイパー河及びアルノ河を認められるけれども、航行の可能性においては、ローヌ河並びにタイパー河以外の河川が急湍・激流である上に、周期的に水量の缺乏するが故に、大西洋縁邊域の河川の航行可能性に比して、著しく劣つてゐる。さらにまた、アフリカ沿岸域においては、河床は存在してゐるけれども流水に乏しい。ひとり、ナイル河が沙漠を貫流してをり、また小アジアの側面においては、ドナウ河、ドニエプル河及びドン河は、それぞれに、小規模において、ナイル河に類似した機能を發現する（註4）。

かうした地中海空間の基本的な特徴は、この縁邊域にすむ諸民族の生活空間を、遊牧的・獵人的生活過程にお



第二十八圖 地中海を繞る陸地紐帶

いて、或は地盤に固着せる農民的生活形態において、或はまた海洋開拓者の生活形態において、把握したのであつた。殊に前述第一において記述したように東地中海地域における開放性並びにアフリカ沿岸地域の背後空間に存する沙漠の人間に對する敵對性とは、アジア的影響力の作用する空間的大限界を示した。アジアのステップはドナウ河まで擴延してゐる。また、メソポタミアの通路はベルシア灣に通じてゐる。スエズ地峽とナイルの沃野は、ステップ的アジア的勢力を東地中海へ導入する大いなる空間的契機であつた(註5)。次に、東方海盆より西方海盆が閉鎖的であつたが故に、ステップ的アジア的影響に對する反撥力を發現することができたのであるが、同時に、このことは、東方海盆と西方海盆とを統一的に支配しようとする鬭争を惹起する契機を構成するにいたつたのである(註6)。

第三の特徴から理解することのできる事象は、温和な地中海氣候を求めて、北歐の森の住民や南アジア・ステップの住民が、刺戟と憧憬とによつて、地中海への衝動に驅られたといふこと

である。このことは、地中海空間が大西洋と印度・太平洋の通過的空間としての機能を發現するとともに他面、大陸的住民の海洋支配への衝動に對して大いなる刺戟ともなつた。かうした通過的空間に移動・定住したる民族は、久しきにわたつて、自らの運命を規定することができず、自らの運命を打開する方途は、新たなる征服か、屈服か、のいづれかを選ばざるを得なかつたのである(註7)。

第四の特徴から人類の生活と水利との關係の重要性が、特に重視せられる。マッシーは、この點を特に力説して、水源と河川とが、地中海においては特別な地政學的意義を有つと論じてゐる。彼によれば、特別な意義を有つといふことは、自然的な地理學的概念における河川が、單に「境界」として考察せられた場合との比較において指摘せられてをり、水と人間との戦のうちに生活空間獲得・確保への特別な地政學的意義を認めてゐるのである。すなはち、地中海地域における沃地においては水の配分を、また新たな土地空間の開拓にとつては、ダムの構築、運河の開鑿を不可分の關係において認められなければならぬ。それ故に、地中海地域における國土空間には必然的に國家權力による水利政策が強行せられたのであり、水の配分が移住・聚落の要因として大きな役割を擔當したのである。このやうにして地中海農耕は水利と結びついた。

それ故に、地中海ステップは遊牧民のために存置せられた空間であり、しかも、この空間は飼料の不足、沙漠、山脈並びに丘陵による遊牧の制約及び膨脹する農民の水利的施設による新たな農耕空間の獲得によつて規定せられたのである(註8)。

以上の地政學的諸要因を檢討することにおいて、地中海地域における民族の生活空間は、その發展過程の動態に

において、農耕的空間の獲得と航海的動機とが緊密に結びつき得る場合に、民族には、空間的權威を與へられ、その生命を悠久ならしめることが可能であると論ずることが出来る。

註1 Walter Vogel : Der Raum des Mittelmeers, S. 9.

フォードの論文は、Reich u. Volk 誌に掲載せられ、その後、P・シュミット博士が編纂した「地中海における變革——イタリア生活空間闘争」(Revolution im Mittelmeer—Der Kampf um dem italienischen Lebensraum. 1940, Volk und Reich Verlag, Berlin) に採録せられてある。以下拙稿に引用する部分は、P・シュミット博士編纂したる論文集の頁數によらる。

註2 Ernesto Massi : Kömische und Italianische Mittelmeer-Geopolitik, S. 551—552. E・マッシー博士は、盟邦イタリア、

ミラノ大學の地政學教授、一九三九年一月一日以來、トリエスト大學のロレット教授 (Prof. Giorgio Rolletto) と協力して、月刊學術雜誌「Geopolitica」を發行してゐる。拙稿に引用してある部分は、同博士がドイツ地政學雜誌第十六卷八・九號に掲載せられた論文による。

註3 Vogel : S. 10.

フォードは、「この點については、「海洋的ヨーロッパと大陸的アメリカとの對立である」と指摘してゐる。

註4 Vogel : S. 10, Massi : S. 554—556.

註5 Massi : S. 553.

註6 Dr. Albert Prinzing : Die europäische Bedeutung des Mittelmeers. S. 34. Zeitschrift f. Politik, Heft 1. Januar 1941.

プリンツィンク博士はハッセル (Ulrich von Hassel) の所説を引用して、東方海盆と西方海盆との統一的支配への闘争過程において、ヨーロッパ地中海の意味を認めようとして、その論旨を展開してゐる。

註7 Massi : S. 556.

註8 Massi : S. 554—556.

第三 東ステップ的空間擴大と地中海空間との關係

地中海縁邊方域においては夙に國家的形態の發生を見た。一般に遊牧民の集團或は民族的集團が、かうした國家的形態の萌芽として認められてゐる。西紀前十四世紀において、ナイル河及びユーフラット、チグリス兩河の流域において、かうした國家的形態の發生を見たのであるが、エジプト國家の境界は土地空間の形狀に拘束せられ、リビア沙漠とアラビア沙漠との間に存する方域、なかんづく、ナイル河の流域方域及びそのデルタ地帯を占めてゐたに反しメソポタミアの國家境界については、セミチック的なアツカデルの勝利によつて規定せられた境界に關する限り、沙漠と山脈との間に存する豐穰な水利の良好なる方域を占めたやうである。この方域は、印度・太平洋世界と大西洋世界との通過空間に位置してゐた。それ故に既に、西紀前三世紀半の頃から、ペルシア灣からレバント海並びにシリア沿岸にいたらんとする貿易的動機が必然的に生起し、この通過空間には、セミチック的なバビロニア人、アッシリア人、イラン的なコッセル、小アジア的アーリア的なヘッチテールによつてそれぞれの國家が建設せられた。地政學的には、かうした諸國家はシリア・メソポタミア的空間に發生した東洋的國家であり、かうした諸國家の核心は舟狀海盆に發生し、支配民族は、本來、かうした核心空間において地盤固着的に結びついてゐたのではなく、この核心空間の周邊に存するステップ並びに山嶽地方から出現したのであり、これらの諸民族のうちで、最も廣汎なる支配空間を確保したのは、アーリア的騎馬民族とベルシア的戰車民族であつた。その支配空間は

ナイル河からガンデイス河に及んだ(註1)。かうした空間的廣がりをも促進することができたといふことは、かうした民族の有つてゐた創造的才能に負うたことも亦看過することを許されない。かうした民族の有つてゐた創造的才能の所産の一つとしての新しい武器、すな



第二十九圖 ペルシア帝國

きはち戦車が、空間的擴大を形成したのであり、この武器を操作することができた民族にとつては、この武器によつて到達することのできる地域の支配權が與へられたのである。従つて、ナイル河及びガンデイス河が、初めてこの武器による勝利を遮断するにいたつて、ここに、一つの空間的擴大に對する限界が規定せられたのであつた(註2)。

しかしながら、かうした空間的擴大を、久しきにわたつて支配することができなかつた。かうした支配を持続することができなかつた地政學的要因として、ペルシアの勢力は、地中海空間に比し、異質的空間から發したこと(註3)、また海洋的動機においては、地中海空間に内在せるそれと比して、對抗すべくもなかつたこと(サラミス海戰)を指摘することができ

る。さらに、その後、メッカを發足空間とし、バクダットを核心的空間とするアラビヤ的移動的騎馬武者は、半月旗を翻し、權力感情と信仰戰爭主義を強調して、北アフリカの沿岸方域に進出し、カイロからタンジェールにいたる



第三十圖 サラセン帝國の版圖

イスラム的東洋的大帝國を建設した(註4)。しかしながら、この空間的擴大は、地中海の南岸及び東岸を越えて、ヨーロッパ大陸へ擴大せんとするに當つて、その精神的統一性を喪失した(註5)。この精神的統一性を喪失せしめたる對抗的勢力は大西洋的ローマ・ゲルマン的勢力であつた。同時に、その頃におけるヨーロッパにおいては大陸經營によつて政治的重心が構成せられてゐたに反し、アラビヤの勢力にはかうした重心が構成せられてゐなかつたこと及び地中海の支配を確保するために、アジアまたはアフリカに基地を設定するといふことは、餘りにも距離的結びつきにおいて不便であり、沙漠と海洋との間に存する狭小なる空間より發現せられる壓力は距離的に接近してゐたヨーロッパ大陸の背後地よりする地中海縁邊への壓力に比し、量的にも劣勢であつたといふことを看過し得ない(註6)。

かうした勢力は、その後において、トルコの勢力形態において、メッカ的なるものを復活し、ローマ的皇帝都市コンスタンチノープルを核心空間としてヨーロッパ・地中海方域への進出となつた。しかし、一五七一年のレバントの海戦によつて、トルコの勢力は萎縮の過程を辿つた(註7)。この故に海戦が、大いなる地政學的要因となつてゐる。従つて、ステップ的勢力が海洋へ到達した場合、直ちに、積極的海洋動機を發現することのできる民族でなければ、その勢力圏を久しきにわたつて維持することができない。これがためには、海洋への到達が、恣意

的偶發的動機によつてなされるべきではなく、かうした海洋を包括するにたる國家形態が整へられてゐなければならぬ。ステップの戰車民族乃至騎馬武者の發足空間においては、かうした形態が整へられてゐなかつた。それ故に、地中海縁邊に到達した場合、積極的な地中海政策を行ふことができなかったのである(註8)。

このやうにして地中海東部縁邊方域よりする進出は、その歴史的過程を通じて作用したる地政學的要因によつて、地中海を包括する完全なる形象を描き出すことができなかった。しからば、かうした勢力の未來的形相は如何であるか。それには、地中海の他の縁邊よりする勢力の成長過程を検討するとともに、他面、これらの検討によつて得られる答解と東部縁邊勢力とを比較して総合的に判斷することによつて理解せられなければならぬ。



第三十一圖 トルコ帝国

註5 Prinzing : S. 36.

註6 Prinzing : S. 36.

註7 Vogel : S. 16.

- 註1 Vogel : S. 12.
 註2 Otto Muuck : Geopolitik der Luftwaffe. Z. f. Geo., Heft II. 1940, S. 549.
 註3 Prinzing : S. 36.
 註4 Vogel : S. 14.

註8 Maass : S. 561.

第四 ヨーロッパ縁邊よりの力歴

ヨーロッパ縁邊から發足した地中海空間に對する最初の偉大なる闘争は、ギリシア人によつて行はれた。ギリシア人は、紀元前二世紀において、タラケル人やイリリル人とともに、大西洋的な北方的の原始的故郷から發足して地中海縁邊に移動しエーゲ海の周邊において先住民族であつた前アジア的種族を征服し、同時にこの先住民族と多様に混血したのである。彼等は、所謂、航海民族としての素質を發現するとともに、沿岸植民諸都市を建設した。これらの諸都市の間において、エーゲ海を繞つての争覇戦が行はれ、高度な精神的藝術的ギリシア民族の文化が現はれた。スパルタにおいては、カースト的な誇りの故に、商業や勞務は奴隷に委ねた。ギリシアの商人並びに移住者はエーゲ海を乗り越えて、ヨーロッパ縁邊に多數かつ廣範圍にわたつて都市植民地を建設した。西方においてはイベリア半島にマラガ、東方においては、黒海の沿岸オルビア、下部カウカサスのファシスにいたるまでフェニキア人の後繼者として、地中海の水路を最大の様式において使用した(註1)。しかしながら、ギリシア人による地中海廣域の建設は、遂に成就せられなかつた。それは、都市植民地を餘りに西方海盆へおし出し過ぎたために、ペルシア的勢力との闘争において、東方海盆へ勢力を集中することができなかつたし、また、外交政策的に積極的一體化を具現するを得なかつたのである(註2)。従つて、地中海東縁方域におけるペルシア的陸地勢力は殘存することができたのであつた。

かうしたベルシア的勢力を克服したのは、アレクサンダによつて統合せられた大帝國の勢力であつて、ヒンツク
ーシ山脈、インダス河にいたる方域にわたつて、ギリシア・マケドニア的都市植民地とマケドニア的王朝といふ二
つの形態の結びつきによるヨーロッパ的性格を具有する支配制度が設定せられた(註3)。ハッセルによれば、「アレ



第三十二圖 アレクサンダの帝國

クサンダは地中海東方海盆から東方縁諸國土を貫通したる後に、カルタ
ゴを屈服せしめて、西方海盆を大帝國の版圖に包括し、大ギリシア帝國を
完成しようとする意圖を藏してゐたのであるが、アレクサンダの崩殂は、
かうした意圖の實現を不可能ならしめた」と論じてゐるが、かうした帝國
の存立は、大王の政治的天賦の才能を待つて、初めて達成せられた事象で
あり、それ故に、大王の崩殂は、とりも直さず、この帝國がカルタゴとロ
ーマとの勢力によつて挾撃せられ、地中海において包圍せられるといふ運
命の宣告であつた(註4)。

次に、ローマとカルタゴとの間に、地中海支配をめぐる鬭争が行はれた
が、この鬭争は、陸の強國が、海洋の強國となつた時にのみ、自己を維持
することができるといふ一つの大きな教訓であつた。

マッシイもプリンツィンクも、さらにフーゲルも、いづれもローマとカルタゴとの鬭争を「水のカルタゴ」と
「陸のローマ」の鬭争であつたと指摘してゐる。

フーゲルによれば(註5)、ローマ人は、ヨーロッパ的北方的性格を繼受しつつ、ラテン的ローマ人として、タ
イバー河畔において、小國家を構成してゐたのであつたが、エトルスキの優越的支配が動搖するに及んで獨立し山
岳的種族であるサムニテ、ザピニを敗り、さらに、高度の目標をねらふにいつたのである。もとより、ローマ人に
は貿易的要素、海洋的動機が内在してゐたのであるが、かうした動機は、農民的なもの背後に埋れてゐたのであ
る。そしてイタリア的山嶽諸種族とエトルスキの大ギリシア諸都市との中間に挟まれながら、北方においては好戰
的なガリア人、南方においては、海洋支配的なカルタゴ人との間に介在し、自らの中央的位置を維持しなければな
らぬといふ立場におかれてあつた。かうした位置を維持しようといふ動機が、西紀前二世紀にあつたので、所謂、
ローマの空間獲得への戦となつたのである。

プリンツィンクは(註6)ローマとカルタゴにおいては、二つの政治的な原理が對立してゐたと論じ、カルタゴに
おいては、海上貿易と海上支配に立脚する權力政策、従つて前アジア的性格が多分に織り込まれてあり、それ故に
膨脹的勢力が強かつた。これに比較してローマにおいては、北方的農民的戰鬭意思が旺盛であつた。陸上の勢力で
あるローマが海洋へ進出して、地中海におけるカルタゴの海洋支配を截斷した。それ故に、ハンニバルは、西方の
地橋に出現せんがために、幻想的計畫をすら試みなければならなかつたのである。従つて、地中海を支配するため
に決定的な要件は交通の支配といふことであり、同時にまた、地中海は、單に一つの陸上勢力のみを以てしては、
これを支配することができぬ。それには同時に海上の勢力にも依存しなければならぬと論斷してゐる。

カルタゴを撃破したる後のローマにとつては、全地中海の沿岸を、ローマの命令に服従せしめるといふことだけが



第三十三圖 ローマ帝國

残された課題であつた。このやうにして、結局マリウス(Marius)からコンスタンティンにいたる大方域にわたつて、パックス・ローマーナ(Pax Romana)が発生したのである。それ故に、フーゲルはいふ、「海面を一定の廣さにおいて、独自の様式に秩序づけられた地球空間として示現せしめるといつたやうな地中海領域の自主決定は、この世紀において、初めて具象化せられたのである。しかも、イタリアは地中海空間の中樞國土として、また、ローマはイタリアの中樞都市、西ヨーロッパにおける文化圏の核心體としての課題を充足したのであつて、かうしたことは、その後の世紀においては、未だ實現せられてゐない」(註7)。

しからは、パックス・ローマーナの地政學的基底は如何であつたか。

- 註1 Vogel : S. 13.
- 註2 Prinzing : S. 34—35.
- 註3 Vogel : S. 13.
- 註4 Prinzing : S. 35.
- 註5 Vogel : S. 13—14.
- 註6 Prinzing : S. 35.
- 註7 Vogel : S. 14.

A、パックス・ローマーナの地政學的根據

一、地政學的權力意識の徵表 イタリア半島の有つてゐた特殊な地理的構造が、地政學的發展にとつて、如何なる作用を演じたかを、先づ吟味する必要がある。

この點について、マッシイの所説を概説すれば、彼はかうした作用の徵表として、第一に地中海における地理的個別性を規定してゐる部分が、殆どイタリア半島の地域的統一性のうちに保有せられてゐるとなしてゐる。また地中海縁邊空間において發生した固有的生活形態は、イタリアに移植せられたる場合において、生成發展することの可能であるやうな諸條件が具備せられてゐる。さらにまた、イタリアが地中海の中央的位置を占めてゐること、同時に、偉大な通過空間的位置にあつたことが、力強い効果を發現することができたと論じてゐる。種々なる創造や経験を、イタリアにおいて綜合することができ、従つて巨大なる内生的價値を創造することができたのである。かうした通過空間としては、南北の方向において、チレニア海、アドリア海及びイオニア海が存在し、イタリア土地空間の居住者をして、地政學的價値を發現することを可能ならしめたのであつた。すなはち、所與の條件の下において、通路、河流及び山脈を人間のため役立てるやうに克服することができたのであつた。かうした空間的經驗は、ローマに移植せられ、ここで、空間的位置價値が把握せられ効果を發揮することができたのであつた。何となれば空間に對する知識から、地政學的權力意識が目覺めるからである(註1)。

かうした地政學的權力意識を逸早く表現したものは、古代中部イタリアにおける都市國家乃至都市同盟といふ形

態であり、これが地政學的要因として、アドリア海とチレニア海との中間に存する廣汎なる空間、すなはちアペニン山脈と前部アルプス山脈との間に存する空間を支配することができたのであつた。都市同盟に参加したる當時の都市は、それぞれに、重要な空間地點に位置し、通路監視の役割を擔當するとともに、同盟そのものの有機的形態の發展を促進したのであつた(註2)。

かうした事象は、古代イタリアの植民地設定の地政學的優秀性を示現してゐるのであるが、この優秀性は、さらにローマにおいて極めて顯著に發現せられたのである。その地政學的端緒として把握せらるべきは、正にローマの建設であつた。

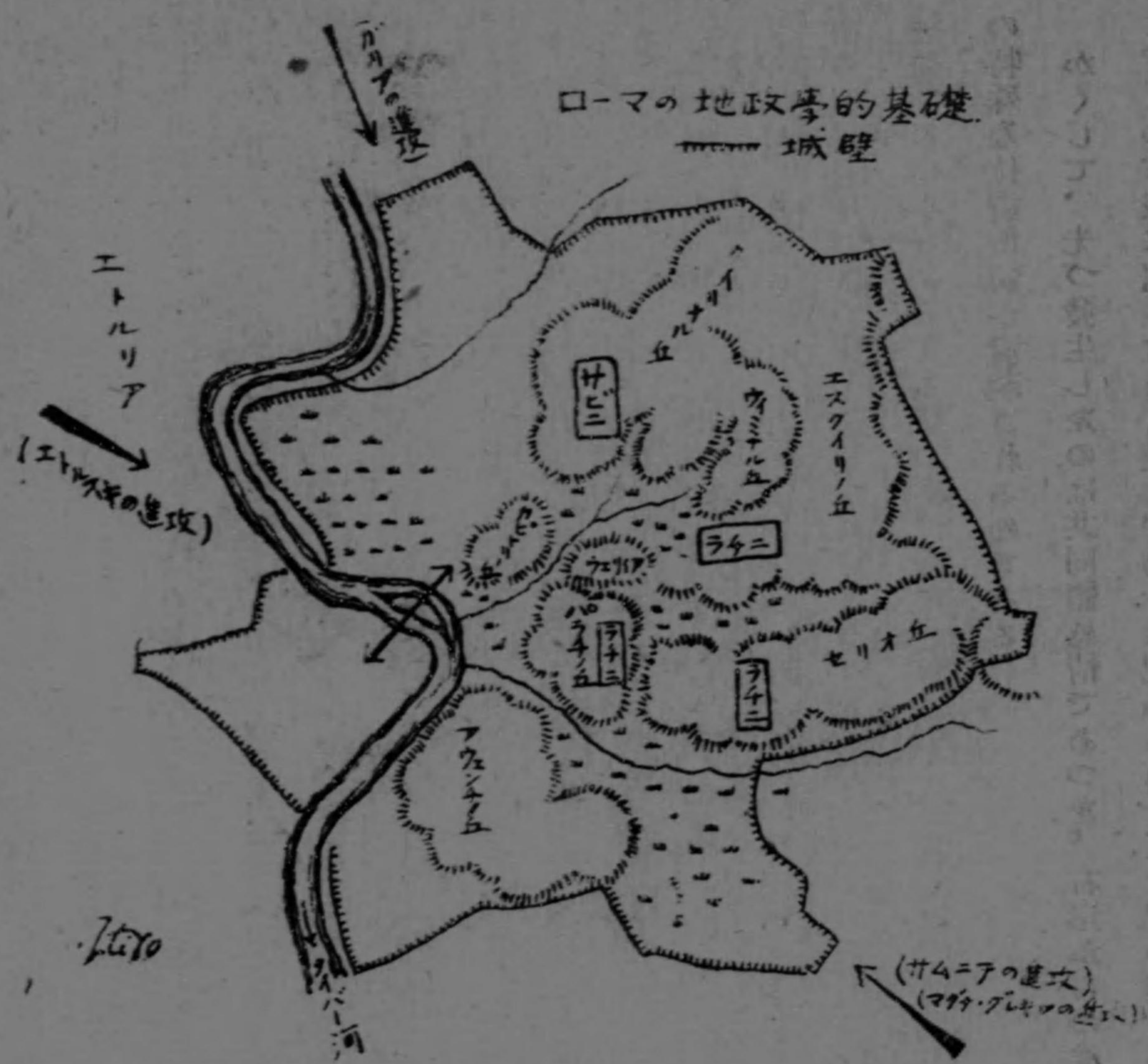
二、ローマの地政學的位價値

第一に、タイバー河に在るタイバー島は、先史的な通路として、すなはち、チレニア海からサビニア(Sabinia)への通路として夙に注目せられてゐた。

第二は、所謂「七丘」の方域である。タイバー河が左折せる河岸からパラチノ(Palatin)丘が隆起する。これがために、七丘によつて包括せられてゐる空間においては、只一つの路線がヴーリア丘とエスクィリン丘との間を連絡するのみである。牧場や耕作地に赴かんとするならば、必ずこの路線を通過しなければならぬ。ここにローマの特殊な位價値が發現されるのである。

かくして、先づ發生したのは共同體感情であつた。右岸からの進攻を受けるかも知れぬといふ絶えざる脅威の故に、この方域に居住する人達は、第十世紀から第十三世紀の間において共通的な防衛感情を有つやうになり、

第三十四圖 ローマの地政學的基礎



第四 ヨーロッパ大陸の勢力

感情は、この方域における人間的對立や場所的闘争に超越する勢力として發現せられたのであつた。

次に、發生したのは、明確な境界概念であつた。かかる概念は、タイバー川がエトルリアの領域を分離してゐたことによつて生じたのである。それ故に、タイバー河の防衛機能が重要視せられ、河口に近きオステア(Ostia)には要塞が構築せられた。

さらに、考慮に容れらるべき事象は、ラティニ、エトルスキ、サビニの三種族による結合意識が生じたこと、殊に、エトルスキが、アジア的企畫によるローマの都市建設に對して、大いなる要因として作用したのであつた。なかんづく、エトルスキによつて、七丘を包括するところの體系が、基

礎づけられたものの如くである。すなはち、彼等はその居住空間をクリイナレエやヴィミナレの丘に見出し、ここに居住したからである。それ故にマッシイは「ローマは種族の坩堝化した」。それは新しい種族を創生せんがためであるかのやうに混合せられ、地政學的經驗を伴ふところの綜合が行はれた」（註3）と論じてゐるが、誠にマッシイの指摘するやうに、進歩的な農耕民であり、かつ都市的空間政策の最初の経験者であつたエトルスキ、山地的な空間において、剛健な開拓者であつたサピニ、而して遊牧民としてのラティニ、この三者の地政學的綜合は七丘の空間編制を具現し、かくして核心空間としてのローマが創設せられたのである。しかしながら、この核心空間は當初から核心空間として、意識せられたのではなく、むしろ、それは通過空間（註4）に位置するものとして意識せられてゐたのであつた。そして、この空間を保障しようとして、ローマがその周辺への必然的な空間擴大を遂げるにいたつて、ローマはその核心空間としての位置價值を發現するにいたつたのである。

かうした位置價值の發現のための地政學的勢力演戲は、第一には七丘の同盟対非同盟都市との對抗演戲において行はれ（註5）、第二に、この同盟の擴大はラテン的諸都市やギリシア的都市（註6）を包括するとともに、他面、タイバー河を越えて擴大してゐたエトルスキの勢力を後退せしめ、第三には、エトルスキの侵寇に対する監視者としてのローマは、タイバー河の自然的景觀を利用しての防衛機能を發現することができたのである。

かうした有機的地政學的生成は、とりも直さず、ローマ防衛空間の秩序を維持しようとする一箇の理念を導入するにいたつた。この防衛空間を維持しようとして行はれたる戦は、正に正義のための戦であり、ローマ人は、實にかうした戦を戦うたのであつた。かうした戦の結果、ローマが締結した各箇の平和條約には、いづれも、共通的な

理念を内包してゐた。すなはち、ローマによつて征服せられたる都市にしろ、支配者にしろ、いづれにしても、ローマの都市同盟の構成分子に加へられ、共同防衛の任務を擔當した。従つて、ここに地政學的見解を導入したるパクス・ロマーナの理念が發展するにいたつたのである（註7）。

二、地中海帝國としてのローマ　かうしたローマを核心とする七丘同盟の生長が、やがて地中海帝國としてのローマを出現するにいたつたのであるが、かうした帝國は、有機的構成員の一種としての様相を示してゐた。かうした空間構成員の生成の過程において、ローマによつて攝取・同化せらるべき對立物が存在してゐたことはいふまでもない。

この對立物を攝取・同化するための基本的要因は、目醒めたる農村青年のために耕作區域を保障しようとするにあつた。すなはち、かうしたローマの空間編成を阻碍しようとして、北方からは好戰的なガリア人が南下しようとしてゐるし、また、イタリア半島自體においても、エトルスキの勢力やギリシア的植民諸都市の勢力は、不斷に、ラテン的ローマの生成發展に對して脅威を與へてゐた。従つてローマの空間防衛の動機のうちには、海洋的動機が前景にあらはれず、むしろ、農民的陸地空間的動機が優先的に示現せられてゐたのであつた。ローマが、かうした空間脅威を芥除して、直接的に地中海空間と接觸するにいたつて、海洋的動機が具現されたのである（註8）。

かうしたローマの陸地的空間防衛の動機は、北方的農民的戰鬪的性格に基づくものであつた。かうした陸地空間的動機に對して、大いなる刺戟をあたへたのは、とりも直さず、ローマの對岸、カルタゴの海洋的動機であつた。カルタゴにおいては、海上貿易と海洋支配とに立脚する權力が確立せられてをり、この權力は前部アジア的な、多

分に膨脹的な特徴を具有してゐたのであつた。それ故に、かうした二つの對照を、特に抽出して、プリンツ・リンクは「地中海の支配にとつて決定的なのは、その交通關係である……同時に、今までの決定的な事實は、地中海は陸上の勢力のみで支配することはできぬ。それは同時に海上の勢力であらねばならぬ」(註9)と論じてゐる。すなはち、ローマが地中海の海洋空間に接觸した際に海洋的動機に基づく地政學的評價によつて、島嶼や半島における港灣乃至基地を占據するとともに、海峡若しくは地峽の空間的機能を高度に發現することができた。それ故に、地中海は、ローマにとつては、隔離性を賦與する限界空間ではなく、この海洋空間は、その周辺における接水區域の肢節化とともに、ローマ帝國主義の有機的な空間構成體をつくり上げるために役立つたのである。ここにおいて、ローマ的有機的的空間構成體は、地中海空間を包括するところの統一的形象を示した。このことは全く、地中海の地政學的表現としての廣域圏として認められるのである。マッシイは、それ故にローマ帝國の文明の本質は、ラテン思想で統一された地中海的文明であつたと論じてゐる(註10)。

地中海が「ローマの海」として、東部海盆と西部海盆とを包括してゐたことは今日にいたるまで、ただ、これを古代ローマ帝國において、原型的に認められるのみである。しからば、何故に、古代ローマ帝國は没落したか。プリンツ・リンクは、「ローマの大陸經營の擴大過程を維持するべく、地中海の權力的基底が餘りに脆弱であつた」(註11)と指摘してゐるが、極めて示唆に富む空間理論であるといへよう。

註1 Massi : S. 557.

註2 Massi : S. 558.

同博士は「この點について、若干の事例を挙げてゐる。すなはち、

Meljo, Verona 及び Mantua はアルプス山脈から流れ出づる河川流域を、また Urentona はポー河流域を、さらにまた Parma, Modena 及び Felina はアドリア海への通路を、Perugia は、中部イタリアへの主要連絡線たるタイバー河の溪谷を、Targuina は、Marfa 谷地と Bolsen 湖への通路を、Rosellae は Ombrone 並びに Orcia 兩河の水路を Ukasi は Chiava 谷地とタイバー溪谷への通路を、Cortona と Arezzo は Chiana 高地の溪谷を、それぞれに監視したと記述してゐる。

註3 Massi : S. 559.

註4 この意味において、ローマは通路國家であつたといはれてゐる。

註5 この事例は、七丘同盟對アルバ (Alba) との戦において示されてゐる。

註6 キリシヤの都市とは、イタリア南西部に存するギリシア最古の植民地キュミを指す。

註7 Massi : S. 559.

註8 Massi : S. 560.

マッシイは「大陸的態度から海洋的態度を執るにいたつた」と論じてゐるが、私は陸地的動機と海洋的動機とが、素朴ながら空間的に綜合せられて所謂イムペリウム・ロマヌム (Imperium Romanum) の空間的構造の基底を構築したのであると解し、この意味において「動機」といふ文字を使用するのである。

註9 Prinzing : S. 35.

註10 Massi : S. 560—561.

からした文明を形成した主要な動因は、農民の定住、移住、治水的施策であつて、かうした動因が種々たる國家的形態の有つ特質を統一することに役立つたのである。それ故に マッシイは (イ)フェニキアやカルタゴにあらはれた商人的精

神、(ロ)、エトルスキの國家が有つてゐた都市的性格 (ハ)、サムニウム人の権力的國家の性格 (ニ)、ナイル河流域に發生した祭祀的國家の性格 (ホ)、ステップ的或は山地的生活によつて培養せられた果敢な性格 (ヘ)、(レイン)的東洋的諸都市の有つ美術的性格をラテン的思想において統一したと指摘してゐる。

註11 Prizing: S. 44.

B、アングロサクソンの地中海支配

一、史的概観　ローマ帝國没落以來、アングロサクソンが地中海へ進入するにいたるまでの久しきにわたつて、地中海空間の征服若しくは支配は、完成せられなかつた。少くとも、古代ローマ帝國において達成せられたやうな理念を再現或は復活若しくは、それを超克するやうな形相を示現することができなかつた(註1)。これらの關聯につきプリンツィンクはハッセル(Hassell)の所説に依據しながら論述を試みてゐる。彼は、ハインリヒ六世並びにフリードリヒ二世によつて企畫せられた地中海帝國の地政學的運命、また、東西兩ローマ帝國によつて施策せられた地中海支配、さらにまた、ナポレオン一世によつて意圖せられた地中海制覇について、それぞれの有つ地政學的特徴、なかんづくその脆弱性を指摘してゐる。すなはち、ノルマン王朝の承繼者であつたハインリヒ六世は、シチリア島と南部イタリアとを發足空間として、ゲルマン的海洋的動機に基づいて、地中海の東部海盆並びに西部海盆を包括して、地中海帝國を建設しようとして試みた。この試みは地中海の運命を新たに規定する一箇の地政學的標準であつたことを否定できない。しかし、ハインリヒ六世の後繼者であつたフリードリヒ二世の時代において、ヨーロッパ大陸よりする陸上勢力による反撃を受けて、この地中海帝國は崩壊したのである。ヨーロッパ大陸よりする陸上勢力とは、ドイツと南部イタリアとの中間に介在したローマ法皇領に集結せられたる勢力を意味する。従つて、

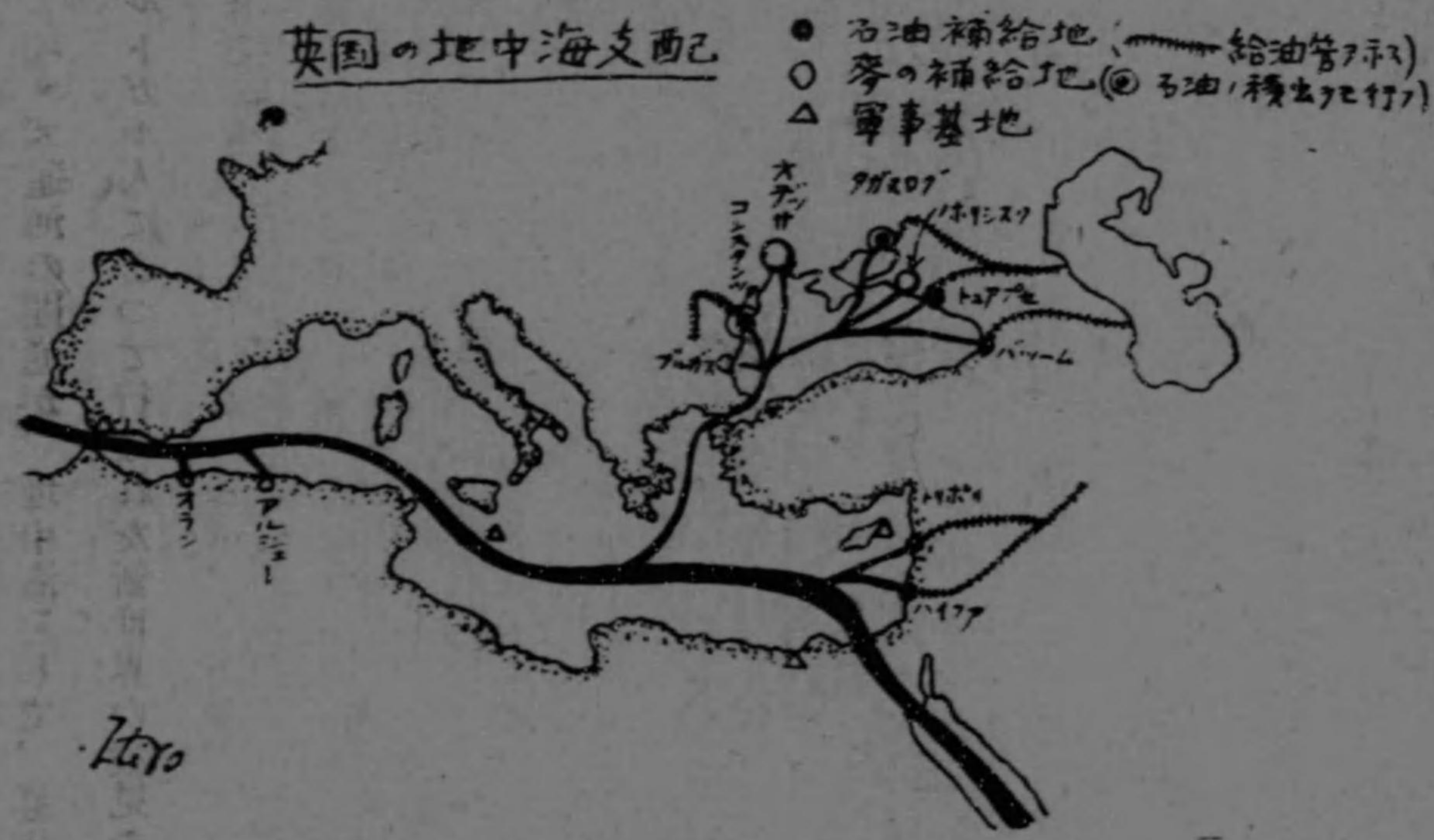
法皇權が、世俗的權力を把握した限りにおいて、法皇權は、陸上勢力としての特質を具有する帝國主義的權力たるの要因であつたことを認めなければならぬ。同時に、フリードリヒ二世の地中海帝國の挫折は、地中海支配が陸地における支配的空間と結びついてゐなければ、これを確保することができないといふ條件を充足することができなかつたことに因由するとも論ずることができらう(註2)。

次に、東・西兩ローマ帝國による地中海支配は、支配の重心が、西ヨーロッパ、中央ヨーロッパへ偏在しすぎてゐたことと、小アジア内陸へ偏在してゐたこと並びに海洋的勢力よりも、陸地的勢力が優越しすぎたといふ事象によつて、地中海的核心を喪失し、帝國的構造の有機的生活力が著減するにいたつた。従つて地中海の支配を久しきにわたつて確保することができなかつたのであつた。

さらに、かうした地中海支配の確保はナポレオン一世によつても行はれた。しかしながら、彼のヨーロッパ支配は、地中海支配を確保することにおいて、破綻を生じたが故に彼の試みは、一切、破綻せざるを得なかつたのである。すなはち、彼は、海上における權力手段を第二義的に考へた程、大陸的に考へすぎであつたのである(註3)。

このやうにして、遂に英國によつての地中海支配の世紀が展開せられた。

二、英國的地中海支配の空間政策基底　英國の地中海支配における空間政策的基底は、ヨーロッパ大陸に内發したる勢力と地中海空間諸地點との結びつきを妨害する反面において、英國の勢力を地中海空間へ積極的に導入することによつて達成せられた。このことは「英國の反ヨーロッパ政策の枠内において、最も前景におし出されてゐた政策は地中海政策であつた」(註4)と論ずるプリンツィンクの所説は、通説として認めても差支へなからう。



第三十五圖 英帝國の地中海支配

英國的地中海政策の端緒は、一七〇四年のチブラルタル占據による西班牙への海洋的壓力として、先づ示現せられた。さらに一七〇八年にはミノルカ島を占據した。ミノルカ島と既に占據しありたるチブラルタルの空間的位置と結びつきにおいて、形成せられたる海洋的壓力をフランスに及ぼすことによつて、英國的地中海勢力を、遂次、強化するにいたつた。この二つの空間位置の有つ勢力の強化は、とりも直さず地中海西部海盆における英國的勢力の確立を意味し、同時に、當時、ヨーロッパ大陸における最強の陸地強國として、フランスの地中海支配を遮断したばかりでなく、フランスの有つ防衛力を低下せしめたのであつた。

さらにまた、ヨーロッパ大陸の政治的混沌期を利用して、マルタ島を占領した(註5)。さらに進んで、ヨーロッパ大陸の關心が小アジア、エチプトへ向けられた際に、英國はキプロス島(註6)を領有した(一八七八年)。次いで、英國的勢力はエチプト並びにスエズ運河へ介入するにいたつた。

スエズ運河の開通が、地中海をして、通過海峡としての機能をさらに高度に發現せしめたのである。それは、ポルトガル人によつて行はれた新世界の發見の故に、爾來地中海は舊世界の中樞的交通路線としての機能しか發現できなくなつてゐたのであるが、いまや、アフリカの市場とアジアの市場とを、スエズ運河によつて結びつけることができるやうになつた。このことは、地中海沿岸の復活であるとともに、既に英國によつて占據せられてゐた地中海空間の海洋的諸位置に内在してゐた價值を昂揚したのであり、この結びつきによつて、地中海における諸島嶼や諸半島や諸海峡については新たな評價が行はれた。マッシー教授は「それは勢力均衡の闘争でもなく、また王朝主義の争ひでもなかつた。それは、帝國主義の權力闘争であつた。……すなはち、地中海勢力と地中海外の勢力との遭遇……その一は、古代ローマ地中海における主要な鎖鑰的地位を確保した英帝國、その二は、東方地中海において海峡を目指すロシアの巨像、その三は、北方においてバルカンを横切つて、アジアの方域へ鷲進せんとする中央ヨーロッパであつた」(註7)と指摘してゐるが、ここで特に留意すべきは、英國の地中海支配には、古代ローマ帝國の有つてゐたやうなヨーロッパ大陸に根差したところの陸上勢力を具備してゐなかつたといふ事象であり、この缺陷は反ヨーロッパ政策の強行によつて補填せられたのであつた。プリンツィンクは、かうした政策の強行が、地中海空間をして、その空間的運命に本質的に背反するやうな機能を發現せしめたのであり、地中海の運命とヨーロッパの運命との結びつくことに、英國が協力或は援助することを否定するのみならず、かうした結びつきを阻碍したのであると斷じてゐる(註8)。かうした事例は、空間政策的には沿岸の諸國を大陸から裂開しようとする試みると同時にこの裂開によつて、ヨーロッパ大陸における特定の國土空間に對し、他の諸國土空間を連衡しこれを包圍しまたは

特定の國土空間を孤立化せしめ或は特定の國土空間を地中海沿岸から後退せしめて、ヨーロッパ諸國の勢力均衡状態を出現せしめ、よつて以て、地中海における英國的支配を確保・維持しようとしたのであつた。例へば、戦前におけるフランスの如きヨーロッパ大陸から空間勢力的に裂開せられ、英國的地中海勢力圏内へ包括せられたるが如きはヨーロッパ大陸の勢力を裂開したところの英國的施策の一事例であつた(註9)。また戦前、英國的包圍政策の對象として、とり上げられたのはドイツであつた。プリンツィンクは、「ヨーロッパ大陸において、英國の反ヨーロッパ政策に敵對する勢力が出現し、しかも、かうした勢力が、海洋から直接攻撃を免れることができるやうな大陸の核心において發生した場合、英國の地中海的勢力の減退を意味する、すなはち、舊來の海洋的基地は、攻撃機能を表現し得ぬからである(註10)」と論じ、かうした勢力は、正にドイツであり、従つて、かうしたドイツに對抗する手段として、英國に残されたる施策は、ドイツ包圍政策であつたと指摘してゐる。さらに一九一四年から、一九一八年にあつたつての世界大戦においては、戦争場域の重心は、地中海空間から、さらに東部邊境方域へ移動し、それ故にトルコは、地中海沿岸國家から轉位して小アジア的國土へと萎縮せざるを得なかつた(註11)。殊に、前世界大戦後、ドイツ海軍全滅後においては、フランス海上權とイタリア海上權とを尖銳的に對立せしめて、勢力均衡を策したる如きは、英國的地中海の優越さを保持せんとする施策の表現であつた。

このやうにして地中海に對する、英國的勢力配置によつて、ローマ人による地中海征服以來、初めての一方的な權力支配が行はれたのであつた。プリンツィンクは、この英國的權力支配の絶頂期は、西班牙を除く諸國を以て、イタリア包圍政策が完成せられた時期であると指摘してゐる(註12)。

かうした英國的地中海支配も、新しい空間的勢力の成長の故に、慌しくも没落の過程を辿りつつある。ウルラフ(Ullrich)は、それ故に「異質空間的な英國の地中海に對する強制的支配期は過ぎ去つた」(註13)と論じてゐる。

われわれは、通常、英國的地中海への力壓をも、ヨーロッパ的力壓として解してゐるけれども、しかし、英國の地中海に對する空間關係とイタリア乃至ドイツの地中海に對する空間關係とにおいては、著しき空間性格的相違を認めなければならぬ。このことは、ウルラフの言説においても明示せられてゐるやうに、英國の地中海空間に對する關係は異質的關係であり、イタリアのそれは、同質的、内生的關係にある。従つて、英國の地中海支配は地中海に内生した諸國にとつては、正に異物的支配であつたと論ずることができるのである。

しからば、かうした英國的地中海支配を解消するに足る新しい空間勢力は、如何なる生成過程を辿つて發現し、果たしたのであるか。

註1 Prinzing : S. 37, S. 44.

註2 Prinzing : S. 37—38.

註3 Prinzing : S. 38.

この點について、プリンツィンクは、ナポレオンのエチプト遠征と西班牙における失敗とを指摘してゐる。

註4 Prinzing : S. 39.

クロムウェルはブレイク宛書翰において「チブラルタルを英國の根據地たらしめたい。この場合においては、六隻の海賊船を有つてをれば、この沿岸において何等大船隊を所有せずとも、大船隊以上の苦痛を西班牙に與へることができ得るであらう」と述べてをり、またガレット(G. T. Garrett)は、「チブラルタルと地中海」(Gibraltar and Mediterranean)において

一七〇四年のチブラタルの占據、一七〇八年のマホーン港(ミノルカ島)の占據は、對佛海戦の急迫化による論理的歸結である」と論じてゐる。この二つの事例をあげて、プリンツィンクは、英國的勢力の地中海への進入動機を解説してゐる。

東西地中海の関



第三十六圖 東西地中海の関

註5 マルタ島は元來、聖約翰輪船派の所領であつた。一八九七年、ナポレオンによつて

占領せられ、次いで一八〇〇年英領となり、今次のヨーロッパ戦争において、樞軸國の勢力圏内に包括せられた。面積は僅に三百平方軒に過ぎず、住民の食糧すら自給できぬ状態ではあるが、しかし、その位置と港灣の優秀性の故に、この地に配置せられた地中海船隊は、イタリア、ギリシアの海岸並びにアドリア海を威壓することができたのである。英國海軍は、この島のラ・ヴァレッタ(La Valletta)に海軍基地を設定して、シチリア海峡を支配してゐた。しかし、イタリア空軍は、常に、シチリア島西南端マルサラからアフリカ北岸のビゼルタ(Biserta)への最短距離二五〇軒を飛翔することにおいて、シチリア海峡の海洋縁邊航空権を把握し、遂にマルタ島における英國地中海海軍の機能を封じてしまつた。

註6 キプロス島の占領は、シリア海岸及びスエズ運河に對する英國の地位を強化したのであつたが、英國がエチオピアの實権を把握するに及んで、その價値は喪失せられた。しかしながら、英國はキプロス島の東岸ファマグスタ港(Famagusta)を改修することにより、對岸シリア一帯への英國的勢力の擴大及びトランスカウカサス方

城への英國的壓力を強化しようとい圖してゐた。このことは實に前世界大戦前において極端に示現せられた事象であり、かうした施策のうちには帝政ロシアと地中海の連絡についての對策及びシリア海岸に接近してゐたバクダット鐵道についても考慮されてゐたことは、いままらここに論ずるまでもなからう。

註7 Musi : S. 561—562.

註8 Prinzing : S. 39—40.

註9 Prinzing : S. 40—41.

註10 Prinzing : S. 40.

註11 Vogel : S. 17.

註12 Prinzing : S. 41.

プリンツィンクは、イタリアに對する英國の干渉或は包圍的政策の發足として一九二六年P・ニューマン(Peason Newman)の論文「イタリア問題は將來の危険信號である。イタリアの幸福並びに平和維持のために、諸強國とともに解決に當ることが大英國の義務である」といふ見解を引用し、かうした言説は英國の地中海支配を固執せんがために吐かれた言説なることを強調してゐる。

註13 Albrecht Fürst Ulrich : Das Ende der englischen Zwingerschaften Mittelmeer, Revolution im Mittelmeer, S. 177.

C バックス・ロマーナの繼承者としてのイタリア

一、マッシイは「地中海における久しきにわたる領域的分裂にもかかはらず、ローマの地政學的遺産やイタリア帝國思想は、イタリア人のうちに殘存してゐた。かうした遺産や思想は、イタリアの歴史の跳躍的過程のうちにあらはれてゐる。イタリアは、その地政學的構造に基づき、ローマの遺産を擁護承繼する地位に置かれてゐた」(註1)と論じ、地政學的核空間はポイ河流域方域、すなはちサヴォイアとピエモンテであつたと斷じてゐる。この核空間こそは所謂サルチニア王國の發足空間であり、この核空間が地中海空間と有機的な結びつきを不現したのは一七二〇年のサルチニア島の獲得(註2)及び一八一五年におけるジェノアのサルチニア王國への編入であつた

(註3)。

次には、かうした核心空間が、國家的に高度の發展を經驗することができるか否かといふことが吟味せられなければならぬ。これがためには、この空間に居住する人々の民族的特質を檢討することを要する。マッシイは、この點について、リグリア人の海洋的性格とアルプス住民の山岳的體験とが合一した。加ふるに創造的統一的思想が發生したのであると説いてゐる。すなはち、ピエモンテ出身のカヴール、リグリア出身のカリバルディヤマツツイーニ、ロムバルディア出身のマンツォーニによつて、イタリア統一といふ創造的概念が發生するにいたつたのである。そしてジェノア獲得後五十五年、新イタリア王國の首都は、ピエモンテのトリノからローマへ遷され、パックス・ロマーナの重心としてのローマは近代的國民的國家の首都として、新しき形態において復興するにいたつたのである。これを要約すれば(イ)核心空間が地中海空間と結びついたこと(ロ)この空間に居住したる民族は海洋的性格と山嶽的體験とを統合し得たること(ハ)イタリア統一といふ創造的概念が生起したること(ニ)首都をローマに決定し得たことを擧げることができらうであらう。

パックス・ロマーナにおける政治的成長の中心位置はローマであつた。すなはち、當時における地中海政策の主體は、地中海空間において自然的な中央位置を占めるイタリア半島に存在してゐたのである。しかるに、その後における所謂地中海政策なるものは、イタリア空間の外部に存在する權力によつて遂行せられ、地中海空間において自然的な中央的位置を占めてゐたところのイタリア空間は、地中海政策の客體として取扱はれるにいたつてゐた。もとよりイタリア空間において、主體としての地中海政策を遂行しようと試みられたといふ事象が存在しないこと

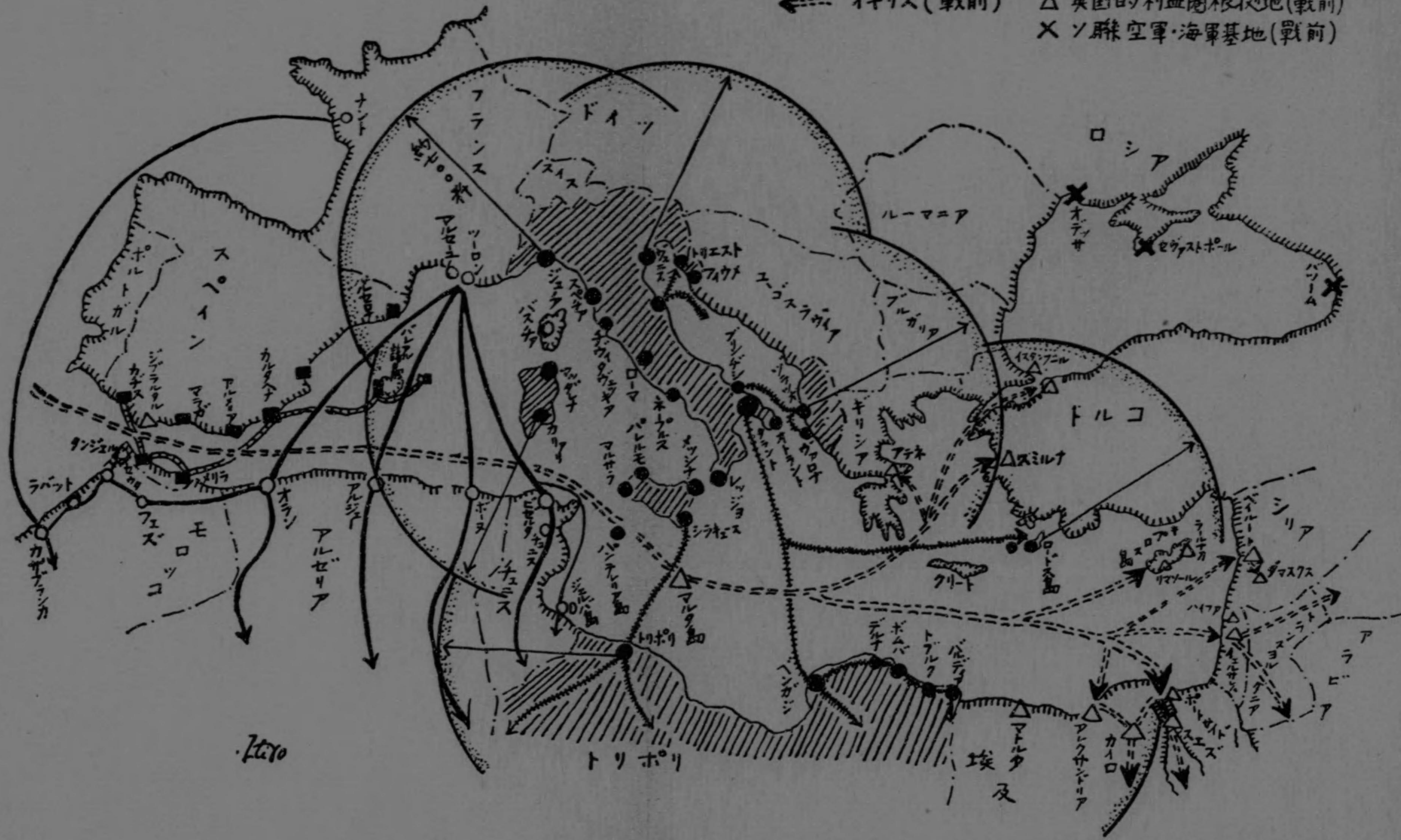
はない、ピサからジェノアへ、ジェノアからヴェネチアへといふ系列において、地中海における商業的支配と海上支配とが試みられ「結局パックス・ロマーナにおける傳統的海洋支配手段を、イタリア國民はヴェネチアによつて教へられた」(註4)のであり、なかんづく、ヴェネチアの海洋的勢力線はその絶頂期において、ビザンチオン帝國の海洋勢力圏であつた東地中海を包括した。このヴェネチアの東地中海政策は、一箇の原型として一九二四年から一九二八年にかけて、ファシスト・イタリアの東地中海政策のうちにおいて再現せられた。しかしながら、ヴェネチアにしろジェノアにしろ主體としての地中海政策を久しきにわたつて維持し發展せしめることができず、萎縮消滅したのは何故であるか。それは前述の諸位置が地理的位置のみならず、政治的位置として國家的に高度な發展を經驗することができなかつたからである。従つて地中海政策の客體化たるの地位を脱却せんがためには、國家的高度の發展を體驗することにおいて、始めて主體として地中海政策に参加することができるであらう。それ故に、エシュマンは「一八七一年のイタリア王國の完成から、一九四〇年六月十一日イタリアが獨英戰爭に参加するまでの七〇年間は、新しい地中海政策の潜在期であつた」(註5)と論じてゐる。この新しい地中海政策とは、イタリアを主體とする地中海政策を意味してゐることはいふまでもない。それ故に、パックス・ロマーナの近代的意味における承繼者としてのイタリア地中海政策の礎石は、この七〇年間に培養せられたと論ずることができらうであらう。またマッシイの解するイタリアの新しい地中海政策は一八一六年、ジェノアとの結びつきにおいて開始せられ、一九二二年ファシスト・イタリアの完成によつて古代ローマの偉大性、海洋的地位及び境界空間意識を以て、地中海政策を基礎づけるにいたつたといふのであるから、この場合においては、約百年間の培養期を認め得るわけである(註6)。

それ故に、ファシズムに基礎づけられたイタリアの地中海政策は、ジノア乃至ヴェネチアの要素をも内包しつつ、古代ローマ主義的海洋政策を展開したのであると論ずることができであらうし、またエッシュマンの指摘する七〇年間の潜在期を通じジノアの要素とローマ的要素とが絶えず培養せられてゐたと解することもできるであらうし、さらに、マッシの所説のやうに百年以上にわたつて空間政策の基礎的構築が行はれたとも解釋せられるであらう。しからば、この所謂「潜在期」におけるイタリア地中海空間政策の地政史的培養過程は如何なる様相を描き出してゐたのであるか。

イタリアが地中海空間の對岸において空間を確保しようとして發足したのは、漸く一八六九年代である(註7)。すなはちスエズ運河の開通を契機として、紅海を通過して東アフリカへの結びつきを試むるにいたつた。サベト、(Sugeto)によつて、一八六九年、エリトリアの南端、紅海沿岸のアサブ (Asab) において沿岸の延長三六マイル、幅員二乃至六マイルの地域が買収せられた。サベトによつて買収された地域は、その後一八八一年、イタリアがエリトリア植民地を建設するに際して、併合せられた。そしてアサブは、一八八一年にイタリアによつて保護領化せられた。一八八九年にいたり、イタリアは、アビシニアとの間にウチァリー條約 (Vertrag v. Utschalle) を結んだ。ここにおいてイタリア植民地としてのエリトリアの面積は、十二萬平方呎を占めることとなつた。一八九一年にはソマリランドの一部(面積約四十五平方呎)が獲得せられた。一八九一年及び一八九四年において、英國との間に、アビシニア分割についての交渉を行つた。一八九五年に、イタリア首相クリスピ (Francesco Crispi) は、エリトリアとソマリランドとを結びつけんがためにアビシニアを領有しようと試み、この空間編成の完成によつ

第三十七圖 地中海空間における勢力線

- イタリアの国土空間
- イタリアの航空防衛圏
- イタリア防衛基地
- フランス
- スペイン
- △ 英国的利益圏根拠地(戦前)
- × ソ聯空軍・海軍基地(戦前)
- ← 矢印付き線: イタリアの勢力線
- ← 実線: フランス
- ← 点線: スペイン
- ← 破線: イギリス(戦前)



1940

き出してゐたのであるか。

イタリアが地中海空間の對岸において空間を確保しようとして發足したのは、漸く一八六九年代である(註7)。すなはちスエズ運河の開通を契機として、紅海を通過して東アフリカへの結びつきを試むるにいたつた。サベト、(Sapeto) にあつて、一八六九年、エリトリアの南端、紅海沿岸のアサブ (Asab) におきて沿岸の延長三六マイル、幅員二乃至六マイルの地域が買収せられた。サベトによつて買収された方域は、その後一八八一年、イタリアがエリトリア植民地を建設するに際して、併合せられた。そしてアサブは、一八八一年にイタリアによつて保護領化せられた。一八八九年にいたり、イタリアは、アビシニアとの間にウチャリー條約 (Vertrag v. Utschalle) を結んだ。ここにおいてイタリア植民地としてのエリトリアの面積は、十二萬平方軒を占めることとなつた。一八九一年にはソマリランドの一部(面積約四十五平方軒)が獲得せられた。一八九一年及び一八九四年において、英國との間に、アビシニア分割についての交渉を行つた。一八九五年に、イタリア首相クリスピ (Francesco Crispi) は、エリトリアとソマリランドとを結びつけんがためにアビシニアを領有しようとして試み、この空間編成の完成によつ

てエリトリア、ソマリランド及びアビシニアの三方域を包括する東アフリカ植民地を建設しようとした。しかしながら、この企畫は英佛によつて妨阻せられ、一八九六年三月一日、アビシニア北境方域アドッア (Adua) からイタリア軍が撤去するにいたつた。當時における英・佛の對伊干涉は、英・佛兩國がそれぞれの立場からアフリカ大陸への勢力貫通を試みてゐたからであり、フランスにとつては紅海沿岸のヂブチと中央アフリカ及び西アフリカを結ぶために、アビシニアの空間が重視せられ、イギリスにとつてはアビシニアがイタリア勢力圏に包括せられることは、所謂ケーブカイロの南北的結びつきに脅威を與ふるからであつた。英・佛の干涉によつて、イタリアの東アフリカ植民地建設は挫折したのである(註8)。このやうにしてイタリアの東アフリカへの進出は中断せられたのであるが、一九一一年にいたつて、再び地中海政策を復活せしめることができた。すなはちトルコとの開戦によつてリビアを獲得した(註9)。さらに一九一二年にはエーゲ海のロードス島及びドデカネーズの諸島を獲得した。ここにおいて古代ローマの道のみならず、ヴェネチアの道をも辿ることとなつた(註10)。次いで一九一五年四月二十六日のロンドン協定に基づき前世界大戦に参加したのであるけれども、戦後、イタリアの要求は貫徹せられなかつた。このことは一八七一年から一九一一年までのイタリアの権力配置の状態を固定化せしめることを意味する。イタリアの英國への追隨性を、この枠内において確保しようといふにあつた。それ故に、エシュマンは「英・佛兩國はイタリアの地理的國民的條件を無視してゐたが、しかし地中海民族にとつて不可避な地中海勢力は實現されるにいたるであらう。イタリアの條件を如何に無視したるやについては驚くの外はない」(註11)と論じてゐる。それ故に一九二二年以降——一九四〇年にいたるまで——換言すれば、ファシスト・イタリアの完成からイタリアが今次

のヨーロッパ戦争に参加するまでの間において施策せられた所謂フランス・イタリアの獨自的な新地中海政策の發足の要因として、以上述べた如き歴史的背景の存在することを無視することを得ぬのである。

しからばこの期間におけるフランス・イタリアの新地中海政策は、如何なる地政學的見地に立脚して施策せられたのであるか。

先づ、著眼せられたのは東地中海であつた。ここではユーゴ・スラヴィアの問題が生起し、ダヌンチオの英雄的行動によるフィウメ問題が、兩當事國間においては條約的に解決せられたが、さらにダルマチアをイタリア經濟空間に包括しようと試みられた。一九二七年にはオトランド海峡を越えて、アルバニアへの進出が企てられた。イタリア・アルバニアの結合は、一九三九年に完成した。アドリア海の内海化が達成せられた。

西地中海においては、リビアの南方境界地域の擴大、なかんづく、キレナイカにおいて、獨自の聚落移住策が遂行せられた(註12)。すなはち、一九二八年、リビア移住令が制定せられ、リビアの土地空間への人口充填と、空間開發に關する方向が指示せられた。一九三四年までは、特許民間會社によつて移住業務が取扱はれてゐたが、同年以降植民協會が設置せられ、この協會の手を通じて、國策としてのリビア移住が行はれたのである。一九三九年まで、この協會の手を通じ二千七百世帯十二萬人を移住せしめることができた。次いで一九三五年、アビシニア遠征の結果、往年の東アフリカ植民帝國の企畫が實現せられるに及んで、リビア移住と同様の空間充填・開發政策が施行せられた。一九三五年においてアビシニア在住のヨーロッパ人は、僅かに六千人を數へたに過ぎなかつたが、一九四〇年においてはイタリア人だけでも二十五萬人を算するにいたつた(註13)。

このやうにしてフランス・イタリアの地中海政策は、第一に東地中海においてエーゲ海諸島嶼における勢力圏の強化をはかり、第二には對岸リビアの植民地において古代ローマの道路政策を再現するとともに(註14)他面、重商主義的觀點を超克したる聚落政策を施行し、第三には東アフリカにおいて、ソマリーランド、エリトリア及びアビシニアを包括する百七十萬八千平方軒(住民七百六十萬)にわたる地域を確保することができたのである。かうした空間膨脹は、母國イタリアの生活空間を、アフリカにおける植民可能の地盤に移植し、地中海縁邊及びこれに近接する地域の開拓を目標としたことはいふまでもない。

しかしながら、かうした擴大も、パックス・ロマーナの空間的大規模に比すべくもなく、地中海支配についてはイギリスと同權的地位すらも獲得できなかつた。それ故に、イタリアはヨーロッパ戦争開始の直前においては、次の如き空間的要求を強調してゐたのである(註14)。

第一、リビア植民地とエーゲ海の諸島とは地中海におけるイタリア防衛空間として最も緊要なる勢力域である。それ故に、この海域におけるイタリアの優先的支配の確立せられることを要求する。

第二、リビア植民地とアビシニア植民地との結びつきを防阻してゐるのは英領埃及である。それ故に、航空機を使用せざる場合における兩地域の連絡は、スエズ運河を經由して行はなければならぬ。従つてスエズ運河會社の理事會にイタリア代表を参加せしめるか、或は運河通航料金を低減若しくは撤廢するか、然らざれば新しい形式による運河管理制を要求する。

第三、リビア植民地南部境界は、ティベステイ方域やボルク方域をも包括すべきである。何となれば、イタリア

のリビア統治は、トルコからその権利を承継したのであり、前紀の二方域は、何づれもトルコの統治範囲内にとり入れられてゐたからである。

第四、アヂス・アベバへの鐵道起點は、紅海沿岸のヂブチ港である。同港はフランスの勢力圏内にあるが、イタリアは、この方域における勢力域の合理的解決を要求する（註15）。

しからば、ヨーロッパ戦争の勃發を契機として地中海支配は如何なる地政學的根據に基いて完成せられようとしてゐるのであるか。

註1 Massi : S. 563.

この核心空間はポー河の支流セシナ川 (Sesina) タナロ川 (Tanaro) 及びテッシン川 (Tessin) の流域をとり入れて形成せられたのである。

註2 奥太利繼承戦役後のウトレヒト協約によつて、サヴォイア公國は、王號とシチリア島とを得たのであつた。従つて、シチリア島を獲得した際に、地中海空間との結びつきが行はれたといふこともできるであらう。その後、シチリア島を、サルチニア島と交換した。この交換は主として距離的接近性を考慮して行はれたのであるから、シチリア島を獲得した場合に比較してより一層強化された一つの有機的な空間的結びつきを認めることができるであらう。

註3 ジェノアのサルチニア王國への編入は、一八一五年のウィーン會議によつて規定せられたこといふまでもない。歴史的觀點からは一八一五年から一八三一年までをイタリア獨立運動の第一期として取扱はれてゐる。地政學的には一八一五年は、新しきイタリアの地中海政策への端緒として把握することができ、特にジェノアの獲得が重要視せられるのである。

註4 Ernst Wilhelm Eshmann : Italian im Mittelmeer, (Revolution im Mittelmeer) S. 83.

註5 Eshmann : S. 82.

註6 Massi : S. 564.

註7 植民史上では、後進植民強國たらしめてイタリアが、遅れ走ながら参加したのであると解せられ、かうした植民地獲得にイタリアが遅れて参加したのは、國內の不統一に基くものである。イタリアの國內統一が完成せられたのは、一八五九年—六〇年におけるカヴールの獻身的努力に依る。従つて所謂「潜在期」におけるカヴールのイタリア統一運動も亦大いなる役割を演じたといふことを等閑視することができない。

註8 フランスは、その後、英國と衝突した。フランスの東西的連結線と英の南北連結線との交叉によつて衝突が惹起せられたのである。すなはちフランスはオーボックからナイル河の水源に對して遠征部隊を派遣するとともにコンゴ地方からマルシヤン (Marchand) 及びリオタール (Riohard) の指揮する部隊を派遣、英國も亦遠征軍を送り一八九八年秋ナイル河上流ファシヨダを中心として、英・佛の衝突を生じしようとしたのであるが、兩國交渉の結果、フランスは、ナイル河流域を全部、イギリスに委ね、その代償としてチュニスとトリポリ地方を得た。この結果、イギリスの南北連結線が確保せられることとなり、フランスの東西的連結線は截斷せられるにいたつたのである。

なほ、本文の記述は Adolf Dresler : Raum und Kulturpolitik des khalanischen Imperiums, Z. f. Geo., Aug., 1940. S. 77. 参照。

註9 Eshmann : S. 86.

註10 Eshmann : S. 86—87.

註11 Eshmann : S. 88.

註12 Eshmann : S. 89.

註13 Dresler : S. 79.

註14 Dresler : S. 78.

註15 この問題はフランスが、今日樞軸側に参加してゐる關係から、樞軸側が勝利を得ることによつて適正なる空間政策的解決を見るであらうことを豫見せられる。

第五 地中海指導力の大空間的生成

プリンツィンクは地中海のヨーロッパ的構成の原型を、古代ローマの地中海支配の形態のうちに求めつつ、ヨーロッパ大陸と地中海との史的相關關係を吟味して、次のやうに規定してゐる(註1)。

第一、地中海の支配は陸上勢力であり、同時に海上勢力であつた場合においてのみ、これを持續することができ。これがためには國家勢力の強力なることを要する。

第二、地中海南岸及び地中海東岸の縁邊地域は、その空間的ひろがり、あまりに狹隘であるから、地中海を支配する空間的根據たるべく不十分である。

第三、地中海の海域には、ヨーロッパの沿岸から及ぼされる力壓が存在してゐる。この力壓を、他の縁邊からの力壓によつて相殺することができない。従つて地中海支配は、ヨーロッパ大陸における勢力關係に殆ど依存する。

かうした根據から地中海における勢力の均衡状態は、ヨーロッパ大陸において勢力の均衡状態が行はれた場合において効果を現はすのである。この反面においてヨーロッパ大陸における一つの權力が超越的重力を獲得した場合、地中海における優先的支配が可能である。

なほ、プリンツィンクは、地中海支配のための權力についての二重性を第四に指摘し、進んで「地中海勢力によ



第三十八回 獨伊樞軸形成の要因としての地中海

る地中海の形成は、指導的大陸勢力と合一したる場合において可能である」と結んでゐる。

それ故にかうした勢力の生成のうちには、パックス・ローマーナの新しい形相がとり入れられてゐなければならぬ。これが要件としてイタリア自體がヨーロッパ大陸の指導的勢力の一要因たり得ることを要請せられる。

かうした指導勢力の構成は獨伊樞軸による大空間的構造の生成によつて可能となつた。この構造を生成せしめた要因としては、理念的には古代ローマ主義理念と神聖ローマ帝國主義理念の新たなる統合として解せられ、他面、ローマ的性格とゲルマンの性格の協調であり(註2)また、政治的にはドイツの舊植民地返還要求とイタリアのボルニカ、ニース、チュニスについての要求(一九二四年—一九二五年)(註3)が、獨・伊樞軸の基本的構成を可能ならしめたと解し得るのであるが、海洋地政學的には、海洋本來の機能の取り戻しと内發的勢力の結集を意味する。すなはちヨーロッパ半島部の大西洋縁邊においてドイツが英本國の要塞的遮斷位置によつて大西洋上における海洋的行動を閉塞せられ、地中海においては、イタリアが英國の海上權力によつて所謂「海の囚人」として幽閉せられてゐた。しかも獨・伊兩國はヨーロッパ大陸において、中心的位置を占めてゐたにもかかはらず、アメリカ大陸の發見以來、大陸における中心星座としての地位を喪失してゐたのである。その反面において、大西洋の色彩は英國化され、ヨーロッパ大陸の縁邊海洋たる地中海も亦、ヨーロッパ大陸本來の縁海すなはちヨーロッパ地中海としての形相を奪はれ、米英的大西洋の従物化した。かうした歪曲せられたる形相を矯正して、本來の姿相に還元し、新たなる發足のための海洋空間の機能を取り戻さんがたのには、ヨーロッパ大陸に内發したる地政學的勢力を結集することを要する。ここに獨・伊樞軸結成の地政學的要因の一つが存在する。それ故に大陸的結成せられた陸上勢力が同時に海上勢力でなければ、

地中海の支配を持續することができぬといつたブライツィンクの所論も地政學的に肯定せられなければならぬであらう。次にかうしたヨーロッパ大陸に結成せられたる地政學的樞軸勢力は地中海の對岸たるアフリカ大陸に對して如何なる空間作用を及ぼすのであるか。この點について、ブリンツィンクは空間的狹隘といふ地理的事象の故にアフリカ沿岸方域からは、地中海支配力を生起するに十分でないといふ説明してゐるに過ぎぬ。しからば、ヨーロッパ地中海の縁邊として對岸アフリカの限界は如何に規定せられなければならないか。ギユイルヒェルは、この點について次の如くに規定する。「アフリカは地中海海溝よりもサハラ沙漠によつて、多節的なヨーロッパ世界から分離せられてゐるが故に、この方域はヨーロッパ舊文化空間の團地的從屬物としての形相を地圖上に示現する」(註4)。果して然らばヨーロッパ大陸的に結成せられたる陸上勢力が海上勢力と綜合せられ、その綜合作用が地中海における英國的力壓を克服し、同時にサハラ沙漠以北のアフリカ縁邊方域に及ぶことが地政學的條件として要請せられる。

しからば、かうした勢力の評価は如何なる標準においてこれを求むべきであるか。このことは、(イ)獨・伊樞軸の指導が効果的であるか、(ロ)かうした指導が、明確な目標に對して、かうした勢力を綜合してゐるか、(ハ)綜合せられた勢力は統一性を有つや否やによつて判定せられなければならない。

第一に獨・伊樞軸の指導の效果的なりや否やといふことは、英國的支配の效果的なりや否やといふことの比較において判定せられるであらう。英國的支配の效果的部面は支配を受くるものの壓迫乃至抑壓を輕減するといふ消極的效果でしかあり得なかつた。これに反し、獨・伊樞軸の指導は、如何にして實績・成果をあげるかといふ積極的部面を意味する。ここに既に觀念上、大いなる相違のあることを認めなければならぬ。

第二に明確な目標に對してヨーロッパ大陸の勢力が綜合せられてゐるか否かといふ點である。この點では米・英の現状維持といふ消極的目標に對して樞軸的新秩序建設といふ積極的目標を提示してゐる。この目標への大陸的勢力の綜合的原型こそは獨・伊の共存・共榮關係において示され、兩國はビスマルク時代を除いては殆ど舊式な領土獲得慾によつて對立抗爭の關係におかれてゐたのであるが、この關係をヨーロッパ共存關係といふ形態において淨化したのであり(註5)、東部國境方域、所謂中間ヨーロッパに對しては、バルカン化を回避し、「異種共生」の關係を新しく規定しようとして施策せられたのである。また、フランスについては、アフリカにおける植民地の存続及びその開拓に協力することによつて、樞軸對フランスの對立性を解消した。かうした事象はヨーロッパ大陸における樞軸的勢力の綜合性における強度化を示現してゐる。

第三に、かうして觀點において、ヨーロッパ大陸において綜合せられた勢力の統一性が形成せられるか否かが問題になる。これがためには、從來ヨーロッパ大陸に存在したる諸政治勢力のうちで米・英的世界を維持せんとする政治勢力が樞軸的政治勢力によつて克服せられなければならず、ヨーロッパ經濟運營の方向が、樞軸的方向に協力、並進しなければならぬ。今日、ヨーロッパ大陸の諸國は、殆ど、かうした方向に進みつつあるが故に、この點に關する限りヨーロッパ大陸に共通な勢力的統一性が認め得られ、従つて大空間的な勢力の成長を豫定し得るであらう。それ故に残された問題は地中海空間における異物的存在である英國的支配を如何にして解消せしめるかといふ防衛地政學的問題であつて、このことは勢力域の位相に關聯し、同時にそれは戰略・戰術の問題でもある！

註1 Prinzling : S. 45.

註2 Prinzling : S. 38.

註3 Eshmann : S. 87.

註4 E. Gilleker : Südafrika zwischen Europa und Empire, Z. f. Geo., 1939, Heft 8—9, S. 575.

同氏の所説は「世界史の過程において、サハラ沙漠以北の地域は、間接、直接關係するところ大なるものがあつたけれどもこれに比較して南阿のそれは、殆ど、いふに足らぬ」といふ觀點からも考究せられてゐる。

註5 J. Kühn : Über den Sinn des gegenwärtigen Krieges, Z. f. Geo., 1940, Heft 2, S. 62.

六 結 言

ヨーロッパ大陸の核心空間において結成せられた樞軸勢力は、海洋支配に對する新たな觀點をとり入れた。すなはち、ヨーロッパ大陸の縁海空間を、ヨーロッパ大陸に結成せられたる陸上勢力と海上勢力の綜合によつて指導し、よつて以て地中海の英國的支配を解消し、英國的地中海を改編してヨーロッパ的地中海たらしめ、かくすることにおいてパックス・ロマーナの新しき形相を示現しようとして試みてゐる。英國は地中海支配を確保せんがために、常に反ヨーロッパ政策をヨーロッパ大陸諸國に對し遂行した。獨・伊の結びつきによるヨーロッパ的核心勢力の構成乃至生成を阻止せんとしてスペインやトルコに働きかけて、ヨーロッパの政治的分裂を策したことは、記憶になほ新しいことである。スペインもトルコも英國の勧誘を拒否した。それ故に、英國の獨占的海洋路線であつた地中海は英國的地中海勢力の萎縮と反比例して、ヨーロッパ的地中海の性格を具備して來た。フランスの國土を流れて地中海に注いでゐるローヌ河は、ヨーロッパ大陸の心臓部に結びつき、ここに新しい經濟的交通線が形成せられるにいたつ

た。従つてヨーロッパ内陸の水路と地中海沿岸水域とによつて新しい經濟空間が形成せられる可能性が示唆されるにいたつてゐる。それ故に、英國の地中海政策なるものは、ヨーロッパ的にあらずして、大西洋アメリカ的政策であつたといふことができるであらう。この限りについて英國はヨーロッパ的性格の異端者であつたといひ得るであらう。このことは今日、英國本土がアメリカ大西洋の現状維持勢力の最前線の役割を演じつつあることによつても察知することができる。それ故に、従來、屢々呼號せられたる「英國の生命線としての地中海」は、英國的世界權力政策遂行のための單なる機具に外ならなかつた、それ故に久しきにわたつてこれを持続する合理性を有つてゐない譯である。若し、地中海に生命線といふ名稱を與ふるならば、それは正に「樞軸の生命線」と呼ばるべきであらう。

第八章 アメリカ地中海の地政學的作用

第一 空間的輪郭

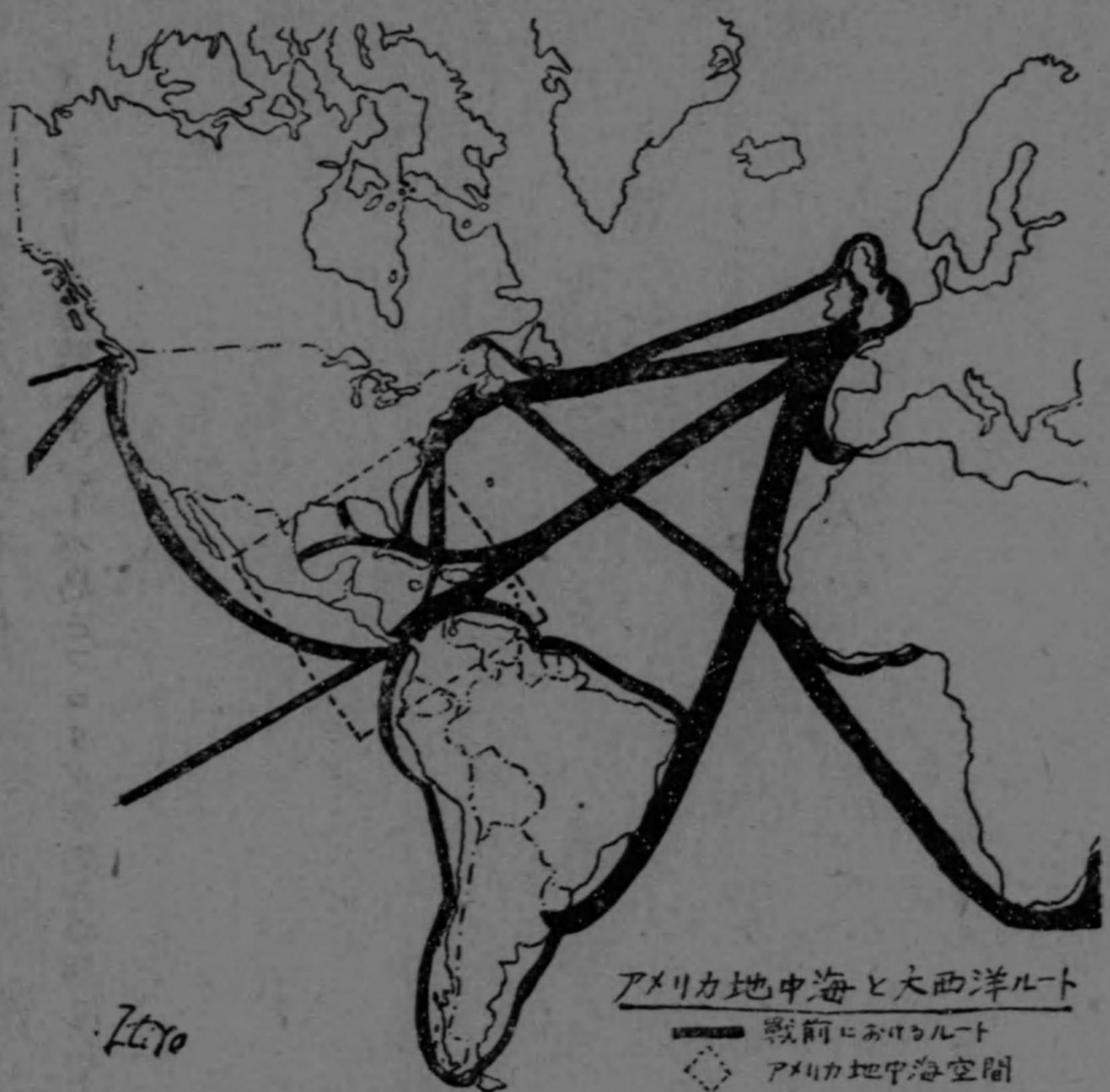
アメリカ地中海の海洋空間は、その西部、南部及び北部の三側面を陸地空間によつて限界づけられ、東部の側面だけが斷續的島弧によつて規定せられてゐる。所謂「中米」として呼稱せられてゐる狹隘な陸地空間が北アメリカ陸塊と南アメリカ陸塊とを結びつけてゐるのであるが、同時にこの結合空間としての「中米」陸地空間は太平洋と大西洋とを隔離してゐる（註1）。

この地中海空間の東闕的位置において、大アンチル及び小アンチル諸島が、約三千三百軒の延長にわたつて弧状を描いて、北アメリカ大陸のフロリダ半島から南アメリカ大陸北部縁邊空間に互つて連つてゐる（註2）。中米陸地空間において本質的に隆起してゐる高山脈の裂開的繼起は大アンチル諸島において卓越的に示現せられてゐる。

（註3）北西海洋空間に突出してゐるバハマ諸島は、全く、平地的な珊瑚島としての構造を示してゐる。

次にアメリカ地中海における海洋空間の構造的特徴として認められる事象は、二つの鋭角的交叉によつて分割せられた海盆が存在してゐるといふことである。すなはち、北部海洋空間においてはメキシコ灣。南部海洋空間においてはカリビアン海（註5）。この兩海盆は、ユカタン半島とキューバ島との中間に存するユカタン海峡によつて結びつけられてゐる。さらにカリビアン海においては、二つの海盆が存在する。この分界線はハイチ—ジャマイカー

—セラアナ・バンク島を経てニカラグアとホンデュラスとの境界にいたる線によつて區分せられる。



第三十九圖 アメリカ地中海と大西洋ルート

メキシコ灣の水深は殆ど、四、〇〇〇米、カリビアン海のは四、五〇〇米以上であり、概括して、アメリカ地中海は深海地域(水深一〇、〇〇〇尋以上)に屬するといへるのである。メキシコ灣においては、大西洋からフロリダ海峽が入り込んでをり、同灣の南部において、カンペーシュの彎曲を見る以外には、殆ど分岐化を示してゐない。そしてこの灣岸に位置するポルト・メキシコと太平洋岸サリナクルスとの間に構成せられた狹隘なる陸地空間は、所謂「テワンテベック地峽」であり、その幅員は、約二〇〇軒である。

この地中海の空間的輪郭を、ヨーロッパ地中海のそれに比較して、最も顯著なる自然的差異はヨーロッパ地中海西方の入口としてはチブラルタル海峽といふ唯一の通路を與へられてゐるのに反し、アメリ

リカ地中海においては、その東界が、斷續的島嶼の撒布的布置の故に、多様な通路を與へられてゐるといふことである。その主要なる通路としては、

- イ、フロリダ海峽(キューバ島とフロリダ半島との間に存する)
- ロ、ウインドワード海峽(キューバ島との間に存する)
- ハ、モナ海峽(ハイチ島とポルト・リコ島との間に存する)
- ニ、アネガダ海峽(ポルト・リコ島とヴァーヂン島との間に存する)

が存在する。小アンチル列島中の諸島間の狹隘なる海峽を通過することは、極めて困難である。數多くの顯礁、暗礁が存在するとともに、急速なる潮流が渦巻いてゐるからである。加ふるに八、九、十の三箇月間にわたつて颶風が、アンチル列島の東岸を襲ふ。そして波蝕を構成する(註6)。

かうした空間的形象は、テルマ(Therme)(註7)が記述してゐるやうに、南北兩米大陸の通過空間として、さらにはまた、太平洋、大西洋の媒介的空間としての形象を示してゐるのである。しからば、この地中海における地政學的動態は、如何なる勢力演戲を示現したのであるか。以下において検討する。

註1 「中米」空間の東西の幅員は約七五軒—五〇〇軒、南北の延長は約一九〇〇軒として規定せられてゐる。

註2 Handbuch der Geographischen Wissenschafts, II, S. 477.

註3 前掲書四七八頁。

註4 前掲書四九二頁。

註5 アメリカ地中海といふ場合はカリビアン海のみを指さず、メキシコ灣をも包括すべきである。しかし、勢力域の變位を

重視してゐる關係から、本稿では、主としてカリビアン海を対象として論じてある。

註6 前掲書四八〇頁。

註7 前掲書四四四頁。

第二 ヨーロッパ的勢力の角逐——東西的勢力の滲透

一四九二年、コロンブスが、スペイン探險船を指揮してパロス港を出帆し、西方への大膽なる航海を試みた際、大アンチル列島の外側周邊海洋に位置するグアナハニ島（コロンブス名附けてサンサルバドルとなす）に到着し始めてアメリカ大陸の陸地空間を望み見たのであるが、その後一年、コロンブスは大アンチル諸島と小アンチル諸島との中間海峡を通過してチャマイカ島に向つて航海を試みた。一四九八年、彼はトリニダード島及びオリノコ河口に向つて進み、一五〇二年にはカリビアン海の西海岸ホンデラスに上陸したのであつた。

このコロンブスの探險とそはヨーロッパ的大西洋勢力のアメリカ大陸への闖入の契機であり、この闖入の地政學的作用は次の三點において示現せられた。

第一點は、當時、恰もカリビアン海空間において、インディアンの大移動が行はれた時期であつた。すなはち、南米大陸から北進したカライブ族が西インド諸島を征服し、西インド諸島の原住民たるアルアク族が驅逐せられつゝあつた時であつた。また、中米においては、西海岸に沿うてホンデラス方にいたるまで、アステク文化が滲透してゐた時であつた（註1）。

カライブ族は南米大陸からアンチル列島の連鎖を辿つて西インドの島嶼空間に進出し來たつたのであつて（註2）、彼等は獨木舟（Pirogna）に乗り組み、帆走しつゝ、島嶼相互間を移動往來したのであつた。小アンチル諸島は、殆ど彼等の支配下にあり、なかんづくポルト・リコにおいては先住民アルアク族を征服し、ハイチ島においては、アルアクーイカライブ兩種混血種族の國土空間を構成したのであつた。また、カライブ族は、この島の北岸方に住んでゐたアルアク系の原住民に迫り、さらにキューバ島にまで進出した。ここにおいてカライブ族は、アメリカ大陸への進出が可能となつた。その頃ニカラガアの東海岸方域には、海洋民族たるミスキト族（Misquito）が居住し、ホンデラスのベリゼ（Belize）やドリエン灣並びにチャマイカ方域までを、その居住區域にとり入れてゐた（註3）。それ故に、ラウテンザッハは「その頃の中米には文化が發達してゐた。恐らく政治的權力も亦、この國土に相應し、南北アメリカの媒介線として發達してゐたであらうと觀られる。今日においても、なほ、中米には、南米のチブチ語（Chibcha）が残存してゐるし、また北米に發達したアステク文化が太平洋側面を傳はつてコスタリカにまで傳へられてゐた。」（註4）と論じてゐるが、かうした原住民の生活文化は、コロンブスのカリビアン海への進入によつて、萎縮せざるを得ざるにいたつた。

第二點は、コロンブスのカリビアン海進入の方向に關聯する。前述のやうに、コロンブスが、南方への帆走を試むる代りに、バハマから西方或は北方への帆走を行つたならばアメリカの全植民史は、今日とは異なつた過程を示したであらうといふことである。それ故にシュモルクは「かうしたコースを進んだならば、コロンブスは、アンチル列島に到達せずして、恐らくフロリダ半島或はチサピーク灣へ到達し、従つて北米全部或は北米全南半が「ラ

テン・アメリカ的」となつてゐたかも知れぬと論じてゐる(註5)。
しからば、スペイン的勢力は如何なる方向において、如何なる陸地空間に闖入したのであるか。

貿易風によつて、アメリカ大陸へ送り込まれたスペインの勢力は直接、アメリカ地中海空間において、アメリカ大陸を把握したのであるが、その最も狹隘な位置、すなはち先づ、中米的閘を越え、引續き、太平洋を望見し、さらに地中海空間の鎖鑰的位置から通過的な廻廊を利用して南北へ移つて行つたのである(註6)。

闖入の方向は、(イ)自然的與件、(ロ)太平洋の發見、(ハ)自然的資源、(ニ)母國との結びつき等の四點によつて、以下記述する如く規定せられたのであつた。

(イ)メキシコ灣の北方ミシシッピー盆地及び南米の諸大河の全地域は、スペインの征服者達の進出に對する自然的障得であつた。それ故に進出の範圍は、中米



第四十圖 スペイン勢力の中米地橋突破

並びに南米の大西洋沿岸に制約せられた。すなはちファン・ボンセ、デレモン(Juan Ponce de Leon)によつて、フロリダ半島への足跡が印せられ(註7) コルテス(Ferdinand Cortez)によつてメキシコが征服せられた。

(ロ)一五一三年、ヴァスコ・ヌネス・デ・バルボア(Vasco Nunez de Balboa)が太平洋岸に到達し得たために、中米西海岸に沿うての貫通が行はれ、パナマ地峽を發足點としてピサロ(Pizarro)によつてペルー征服が行はれた。

(ハ)自然的資源に對する結びつきは、鑛山地域に對して行はれ、インカの黄金は、フォンセカ灣(Fonseca)から、パナマ地峽を越えてホンデュラスの諸港へ、或はバルボアから、この地峽を突破しホルト・ベェロヤクリストバールへ運ばれた。すなはち、太平洋側から大西洋側への結びつきにパナマ地峽が利用せられた(註8)。

(ニ)北米の南部周邊から南米の北部周邊にいたるまで、ヨーロッパ的勢力圏が構成せられたのであるが、かうした勢力圏は、中米並びに南米の陸地空間に對するヨーロッパ植民地化を意味し、勢力線の「結びつき」といふ觀點から、その方向を規定すれば、正に「東西的方向」の結びつきである。シュモルクは、特に、この點を重視するが故に「ヨーロッパの母國は、それぞれ、その地理的緯度に沿うての方向において、西方に進出したのであり……ヨーロッパ植民地化の時代のアメリカ大陸——十五世紀初頭におけるアメリカは、ヨーロッパ大陸との結びつきを、緯線方向において行ひ、かつ調整せられてゐた。」と論ずる。それ故に、スペインが、その緯線方向に沿うて、南米の北部周邊北米の南部周邊及び中米空間へ伸張したといふことは、中米地橋における「南北的結びつき」が、殆ど存在しなかつたといふ事象によつても理解することができるのである(註9)。

このやうにして、スペインは、アメリカ地中海を獨占することができたのであつた。しかし、このスペイン植民帝國も崩壊して共和諸國が成立したのである(註10)、スペイン植民帝國の勢力線萎縮の要因としては、スペイン

の植民地統治における脆弱性の外に、地政學的に次の如き諸點が考慮せられる。すなはち

第一、スペイン植民國家は、アメリカ大陸における勢力域の重心をカリビアン海周邊において構成しなかつたと(註11)。

第二、第十七世紀以來、スペイン以外の植民的勢力、すなはちフランス、オランダ、デンマーク及びイギリス勢力線が北東の方向から介入し、この介入によつて得られた成長尖端によつて、地中海空間への闖入を開始したこと。さらに、また、フランス、オランダ及びイギリスをして引續き、その進入を容易ならしめた地政學的要因としては、スペイン植民國家の崩壊後、その領域において、發生した種々なる諸國家は、それぞれに、孤立的、閉鎖的立場をとり、相互に結びつくことを拒否し、個別的に獨立的な發展をとげた。それ故に、むしろ各國相互の結びつきが弛められたといふ事象を無視することを得ない。のみならず、かうした國々の結びつき弛緩は、自然的與件すなはち、高地と低地、海岸の構造、河川、湖沼、山脈の構成によつても促進せられたのである(註12)。

要するにスペインの中米空間に対する把握力は極めて微弱であつたし、また、スペイン勢力の崩壊作用を促進した一要因であつたところの南米空間に内發した各側の諸勢力も、スペインに後れてアメリカ地中海へ闖入し來つた諸勢力に對抗して、中米空間を維持することができなかつたのである。

註1 Georg Engelbert Graf : Das karibische Meer : Deutsche Allgemeine Zeitung, 12. Januar 1941.

註2 Hermann Lautensach : Die Mittelmeer als geopolitische Kraftfelder. Bausteine zur Geopolitik : S. 176.

註3 Lautensach : S. 176.

但し、同氏の記述は、主として W. Krichenberg : Illustrierte Völkerkunde I. Band, 1922. に據つてゐる。

註4 Lautensach : S. 176.

註5 Frank H. Schmolk : Das amerikanische Mittelmeer. Z. f. Geo., Heft 8—9, 1939, S. 582.

註6 Lautensach : S. 187.

註7 デ・レオンはキューバの總督であつたが土地獲得のため、バハマ諸島中のベミニ島 (Benini) に赴かんとして、フロリダ半島に到達したのであつて、フロリダ半島の探險を目標としてゐたものではなかつた。

註8 Schmolk : S. 584.

註9 Schmolk : S. 582.

カルタゲナ (Cartagena) やボゴタ (Bogota) からメキシコへの交通は、當時においては、キューバやサント・ドミンゴを經由して行はれたのであり、時にはマドリッドを經由して行はれたのである。

註10 政治上、一般に一千八百六年のヴェネズエラにおける反スペイン空氣がスペイン植民帝國崩壊への第一歩であつたと解せられてゐる。ヴェネズエラ側の要求は、1、母國市民権と同一の権利の賦與、2、農産物、工藝品の自由生産、3、スペイン全領土及び友交國との貿易、4、スペイン領アメリカとスペイン領アジアとの貿易、5、スペイン領アメリカと比島間の貿易、6、獨占権を廢して、租稅制度を確立すること、7、水銀鑛の探掘、8、南米在勤官吏の半数はアメリカ出生の市民から任命すること、9、諸制度改革のため、各首都に市民會議を設置すること、10、インディアンの教育及び改宗のため、チェスイット僧侶本國歸還の十項目であつた。一八一一年七月五日、獨立が宣言せられ、一八一六年にはブエノスアイレスの十四州獨立し、爾來、各方域において獨立が宣言せられ、一八二四年、ペルーを失ふに及び、南米大陸からスペイン勢力が驅逐せられたのであつた。

註11 前掲註グラーフの所説參照。

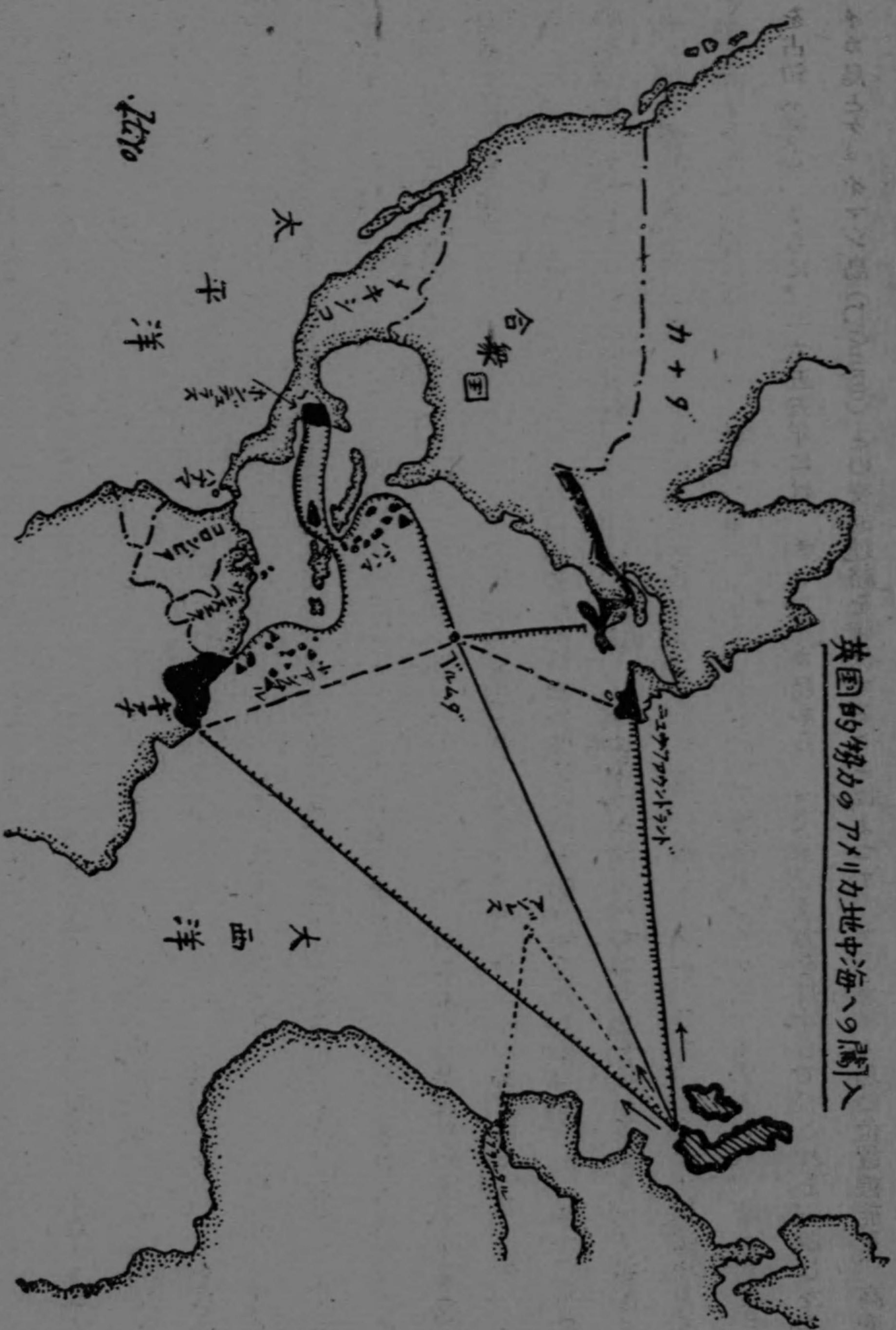
註12 Schmolik : S. 583.

南アメリカの汎理念を、中米にまで及ぼさんとしたポリヴァ (Simon Bolivar) の如き「汎理念」主義の先驅者として評價せられるであらう。

第三 英國的勢力の闖入

英國的勢力のアメリカ地中海への進出は、スペインの所謂「無敵艦隊」撃破(一五八八年)を契機として、著しく積極化せられ、カリビアン海周辺の西印度諸島は、ヨーロッパ諸國の貿易商社の略奪対象と化し、カリビアン海周辺の入江は、英國的海賊の隠れ家として利用せられたのであつた。かうした英國的勢力の大西洋横斷的なる進出過程を概観すれば、サー・ウォルター・ローレー (Sir Walter Raleigh) が、自ら巡征隊を率ゐてギアナに心かんとし、その途次、トリニダードに投錨し、この地を占領したのが地中海闖入の端緒である。また、一六〇五年、英國の船員は、小アンチル諸島中のバーバドス島 (Barbados) に上陸、銘を刻んだ標識を残した(註1)。さらに、ベルムダ島 (Bermuda) は、一六一二年英領となり、一六七九年以來、直轄植民地となつた。この島は「大西洋の新嘉坡」と呼稱せられてゐた(註2)。次いで一六二三年には、小アンチル諸島中のセント・クリストファ島 (St. Christopher) を占領(註3)。さらに、一六五五年には、チャマイカ島から、スペイン勢力を排除して、これを占領した。チャマイカ島とケイマン島 (Cayman) との交通連絡を確保することによつて、チャマイカ島の位置機能を、高度に發現せんと試みた。これによつて、ユカタン半島北邊を通航する諸船舶を監視し得たからである(註4)。その後、一六

第四十一圖 英國的勢力のアメリカ地中海への闖入



八七年には、モスキートー沿岸 (Mosquito) を占據し、對岸ホンデユラスに保護領を設定した。殊にホンデユラス北方海洋縁邊に位置するベニイ諸島 (Bay) に對しては、英國的勢力は、三度、この小島嶼空間への闖入を試みたのである (一七三九年、一八三五年、一八四二年—一六〇年) (註5)。また、バハマ諸島では、一七一八年以來、英國的勢力の闖入を見たのであるが、スペインも亦この島嶼空間を獲得しようとして、進出したが、その意圖を達成することができなかつた (註6)。トリニダット島は、一八〇二年に英領となつたが、この島は、對岸の英領ギアナ (一七八一年英領となる) との結びつきにおいて、南米大陸縁邊を流制し得る位置を占めてゐた (註7)。かくて、十八世紀末までには、セント・ルーシア島 (St. Lucia) マルチニク島 (Martinique) グァデループ島 (Guadeloupe) ドミニカ島 (Dominica) を領有するにいたつた。セント・ルーシア島は小アンチル諸島の中央に位置することと、自然的良港を有つことによつてヨーロッパとの交通關係上重要視せられた。マルチニク島、グァデループ島及びドミニカ島は、その後も英・佛間において領有争ひが行はれ佛國によつて獲得せられたのであつた。かくして第十九世紀初頭にいたるまでアメリカ地中海の周邊は、ヨーロッパ諸勢力の植民地獲得の角逐場域であり、これらの諸勢力中、最も壓倒的勢力を發現したのは、英國的勢力であり、しかも、その方向は、スペインの植民軸線たる東西的方向に沿ふところの闖入であつた (註8)。かうした英國的膨脹の目標が明確に示現せられたのは、すなはち、一八一五年、ホンデユラスからパナマ地峽までの地域を保護領化し、中米空間を貫通して太平洋へ登場せんとしたる際であり、この目標を貫徹するためには、アメリカ地中海の優劣的支配を確保しておくといふことが、不可分の條件として解せられた。

註1 ベーバドス島は、ウインドワード群島の東方海面に轉出した位置にあり、貿易風の關係上、帆船時代において、極めて優秀なる位置價値を發現してゐた。(Josef März : Die Dominie der Seemacht, S. 483. — Z. f. Geo., Heft 10, 1940.)

註2 「中米からの航路の集中地點であり、海洋交通線を統制するため良好なる基地である」とメエルクは断じてゐる。(前掲論文) 文)

註3 その後、佛國が、この島に着目して占領、英佛協商の結果、佛國の領有となつたが、一六三〇年、スペインは、この島から英・佛兩國人を追放し、次いでまた英國の領有となつた。

註4 März : S. 482.

註5 モスキートー沿岸から、さらにベニイ諸島をも英國勢力圏にとり入れようとした根據は「この諸島は、對岸の英領ホンデユラスのベリゼ (Belize) に歸屬してゐる」といふのであつた。この空間占有理由は、英國的權力政策の一面を露呈してゐる。ベリゼは木材業者の移住地であつたのが、時の経過につれて英領植民地として認められるにいたつてゐたのである。しかし、今日においても、グアテマラは、ベリゼを自國の國土に歸屬すると主張してゐる。(前掲論文參照)

註6 バハマ島を繞つて英、西間に闘争が行はれたのは、この島の空間位置を確保することによつて、アメリカ大陸への連絡を監視することができたからである。

註7 この島のポート・オブ・スペインは、カリビアン海への出撃地及び南大西洋殊に南米東海岸への出撃地としての位置を重要視せられ、サン、フェルナンドは要港として防備を堅められてゐる。(Graf : Verkaufte Festungen, Sept., 1440. Deutsche Allgemeine Zeitung.)

註8 Schmolk : S. 589.

第四 ヨーロッパ的勢力線の排除（合衆國的閉鎖海）

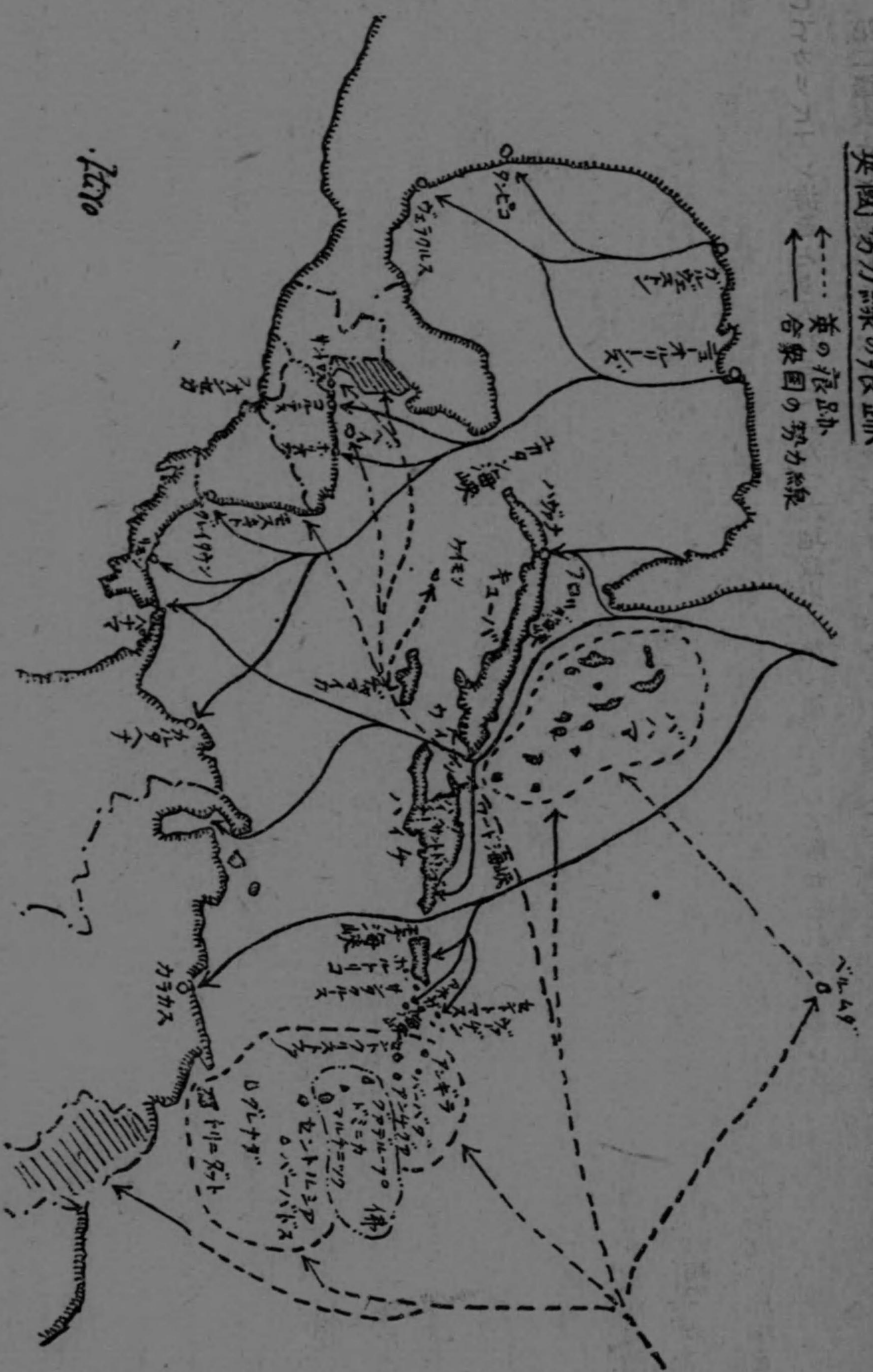
しかしながら東西的植民勢力線は、南北的勢力によつて遮断せられるにいたつた。シュモルクは、この事象を「植民軸線の方向轉換」(註1)であると指摘してゐるが、南北的勢力線のカリビアン海への介入を意味する。従つて、カリビアン海へ同一方向より競合して進入したヨーロッパ諸勢力の角逐場域としてのアメリカ地中海は、これらの諸勢力に垂直的に交錯激突する合衆國勢力の南下により、勢力域における闘争は、愈、深刻化の様相を示唆し來たつたのであつた。しからば米國の勢力線は、如何なる経過において、アメリカ地中海へ伸張するにいたつたのであるか。

一八〇三年のルイチ・ナ買収によつて、メキシコ灣に進出、次いで一八一九年フロリダ半島を獲得したる米國的南進は一八二三年のモンロー宣言によつて、カリビアン海を、その照準のうちにとり入れてゐたのである。

ラウテンザッハは、一八二三年のモンロー宣言には「アメリカ地中海に對する英國的優先的支配を速かに消失せしめんがための牽制的意義をも含められてあり、このことは、正に地理的事象に起因する論理的結論であつた」(註2)と論じてゐるが、このことは當時の米國が、商業心理的根據から熱帯資源の獲得へ、その空間的照準を擴大してカリビアン海をとり入れるにいたつた地政史的徴表として解せられるであらう。

第二徴表として認めらるべきは、クレイトン・パウラー條約(Clinton-Bulwer—一八五〇年)の締結であり、これによつて英國的勢力のパナマ地峽への滲透を阻止したのであつた(註3)。しかしながら、垂直的勢力を以て水平

第四十二圖 英國勢力線の痕跡



第四 ヨーロッパ的勢力線の排除（合衆國的閉鎖海）

的勢力を排除・萎縮せしめようとする政策的實踐に合衆國が着手したのは、實に一八九八年キューバを繞つての合衆國對スペインの抗争であつた。そしてスペイン勢力を「ポルト・リコ」と「キューバ」から追放した(註4)。従つてカリビアン海への合衆國的勢力の進出は、カリビアン海域の島嶼空間と中米地峽、なかんづくパナマ地峽との二つの方域を目標として分進的進出を試みたのであつた。この分進的進出は、その合一點を何處において把握しようとしたのであるか。パナマ運河か、南米大陸か。さらに、より廣汎な空間において、これを求めたのであるか。

一九一五年にはハイチ共和國に干渉するの權利を確保し(註5)、一九一六年にはドミニカン共和國の軍事占領を行ひ(註6)、一九一七年にはヴァーヂン島及びセント・トマス島をデンマークから買収した。

かうした合衆國的勢力の進出は、スペインの勢力を萎縮せしめたばかりでなく、カリビアン海における英國的勢力をも萎縮せしめるにいたつた。合衆國的勢力を島嶼空間たるキューバ、ハイチ及びポルト・リコに扶植することによつて英國的勢力はアメリカ地中海から殆ど閉め出された如き様相を呈して來たのである。ラウテンザッハは「クレイトン、パウラー條約によつて英國的勢力が後退し始めたのである。合衆國においては、強烈なる自己意識があらはれて來た。それは、英國的勢力をアメリカ地中海から排除しようといふにあつた。しかし、この企畫は、ヨーロッパ地中海におけるそれよりも困難であつた。何となれば、四つの通路(フロリダ、ウィンドワード、モナ及びアナガダの四海峽)が存在してゐるからである」と論じてゐるのであるが、この四主要海洋路線のうち三線すなはちフロリダ(フロリダ・キューバ間)ウィンドワード(キューバ・ハイチ間)及びモナ(ハイチ・ポルト・リコ間)はポルト・リコをスペインから獲得した時に、合衆國の制壓下におかれるにいたつた(註8)。しかるに、前述のや

うに、一九一七年ヴァーヂン島をデンマークから買収したので、残された主要海洋路線アナガダ海峽をも、合衆國の勢力圏内にとり入れることができた。かくて、島嶼空間においては、英領チ・マイカが孤立化するにいたつた。

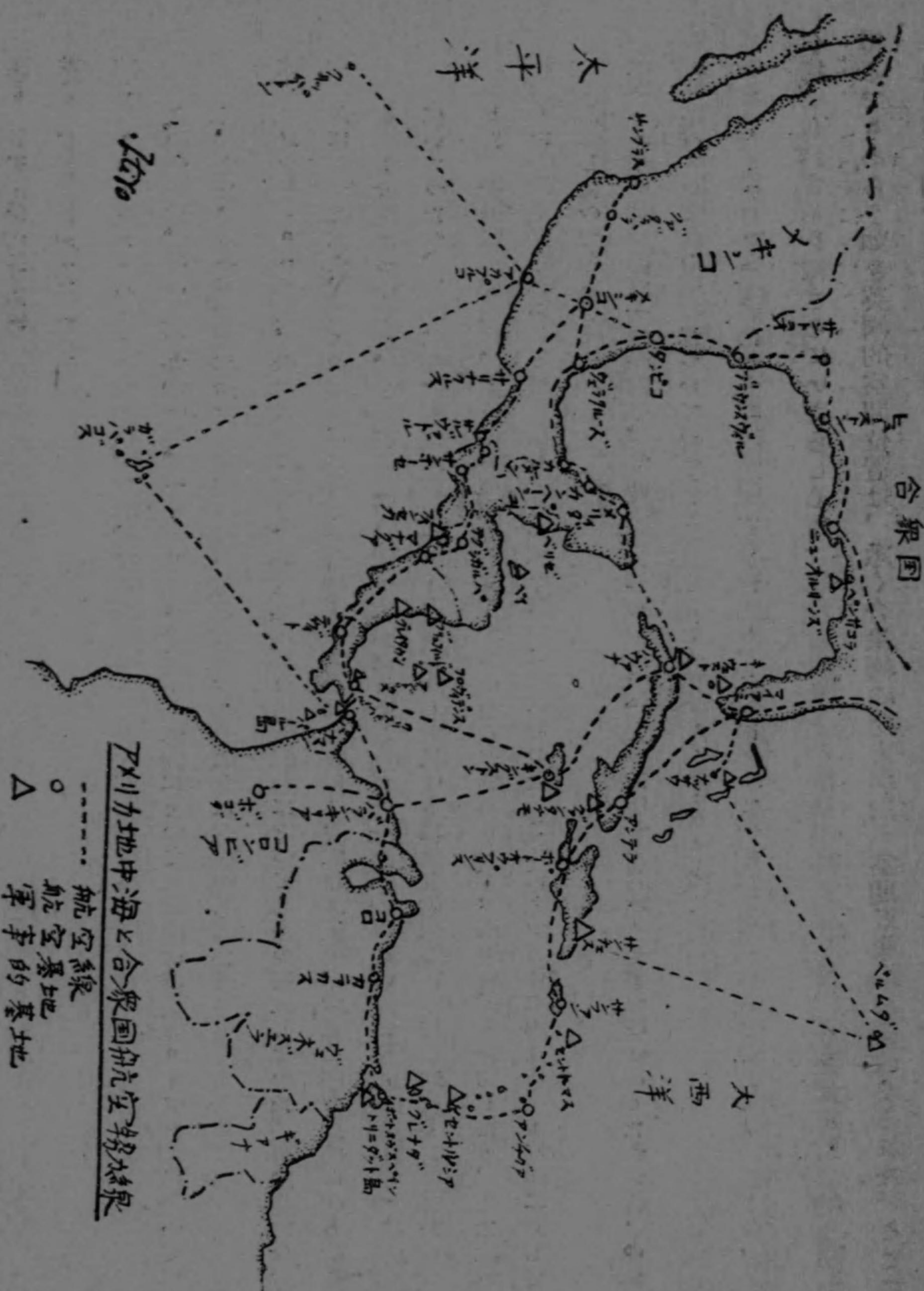
次に中米地峽においては、コロンビア及びニカラグアの兩國に對する干渉が行はれた。すなはち、パナマをコロンビアから獨立せしめ、パナマから運河地帯を譲渡せしめた。これがためには運河關係地帯から、英國的勢力を驅逐し、英領ホンデュラスを孤立せしめたのであつた。また、ニカラグアについては、中米南岸のフォンセカ灣に一九一四年、特殊權益を設定した(註9)。さらにサン・フアン河(San Juan)並びにニカラグア湖を横切る開鑿權を、ブライアン・チャモロ條約(一九一六年)によつてニカラグアから確保した(註10)。

ここにおいて、中米地峽においては、英領ホンデュラスが孤立化するにいたつた。それ故に、ラウテンザッハは「英領チ・マイカと英領ホンデュラスとのカリビアン海における孤立化は、この兩位置が、英國的成長尖端にあらずして萎縮尖端なることを示現するにいたつた」(註11)と斷じてゐる。かうした過程において一九一四年のパナマ運河開通は、カリビアン海における合衆國の地位を強化した。このことは、とりも直さずアメリカ地中海を合衆國の利益圏化することを意味するとシュモルクは指摘してゐる。彼の論ずるところは(イ)北米東海岸から南米四海岸への航海洋路線が本質的に短縮せられたこと、(ロ)全米の航海業や商業貿易が強い刺激を受けたこと、(ハ)兩米の沿岸航路として、専らパナマ運河が利用せられ、東亞の諸港への航路よりも、むしろアメリカ西海岸諸港のために利用せられ、この限りにおいて、パナマ運河は、スエズ運河のやうな一大陸から他大陸への世界的交通機能を開現せず、むしろ「アメリカのための運河」として機能を開現したに過ぎぬといつてゐる(註12)。

パナマ運河の有つ戦略的重要性（艦隊の兩洋移動）についての認識は、ニカラグアやテワンテペック地峽（註13）の開鑿が急速に實現せられない今日においては合衆國をして専らパナマの防備強化へ驀進せしめつつあることを想察するに難くない。パナマ運河は、交通的要求に應ずるよりもむしろ、戦略的な「捕鼠器」化してゐるのである。そしてヨーロッパ地中海における英國の防備方式を模倣して、パナマ運河口の前面に存在するパール島を前堡として防備を強化しアメリカ地中海への接觸と結合とを焦つてゐる。また、要塞化せられたホルト・リコや南キューバ島のグアンタナモ（Guantanamo）を經由してフロリダ半島キー・ウエスト（Key West）に至るまで艦隊基地や航空基地を連鎖的に設置した。さらにホンデュラスの北部海岸プエルト・カステリア（Puerto Castilla）にも基地を設定した。また既述のやうにフォンセカ灣にも基地を構築した。かうした空間諸位置は、運河地帯に必要な航空線の基地としても役立つのである。さらに、テキサスから運河にいたる汎アメリカ路線の建設は、軍事的輸送路として構築せられてゐる（註14）。

ただカリビアン海南方部分においては、英國の基地が残存してゐたのであり、さらにまた、カリビアン海の大西洋的外弧として英國の基地ベルムダ諸島、ニューファウンドランドが包圍線を構成してゐたのであつた。しかるに、ヨーロッパ戦争における英國の勢力の敗北が遂に一九四〇年九月、かうした英國の勢力基地を合衆國の勢力圏内に包攝せられざるを得ざるにいたらしめた。北米と南米との漸移空間において、合衆國に對立的な勢力作用を發現し得るでもあらう如き英國の空間位置は、悉く合衆國の勢力圏内へ空間政策的に編入せられた。ここにおいてアメリカ地中海に關する限り合衆國は、對英相對關係を解消し、絶對的空間價値を保有することとなつた。

第四十三圖 アメリカ地中海と航空勢力線



第四 ヨーロッパ的勢力線の排除（合衆國の閉鎖海）

註1 Schmolk : S. 583.

註2 Lautensach : S. 186.

註3 クレイトン・パウラー條約は、將來、英米兩國ともパナマに開鑿するべき運河支配の獨占をなさざる旨を約す。しかし、この條約は、その後一九〇一年、ヘイ・バウンスフォート條約によつて「英國は爾後カリビアン海においては無關心たるべく、また、パナマ運河に對する同國の抵當權も撤去する」ことに規定せられた。

註4 ポルト・リコ島は、米西戦争の結果、一八九八年の巴里條約によつて米國の領土となつた。島知事は合衆國大統領の任命によつて就任、島民の選舉によらぬ。合衆國の本國法は特別の規定なき限り、本島にその儘適用せられる。

キューベ島については、合衆國保護下に獨立國が組織せられた。一九〇一年の國民議會の決議によつて共和制を採用するにいたつたが、同時に合衆國大統領はキューベ國に對し廣汎なる權能を行使し得る旨を規定した法律が合衆國議會を通過した。合衆國大統領は、キューベの獨立を脅威するやうな條約をキューベ國が他國と締結したり、また歳入を超過するやうな外債募集を行ふことを禁止し得る權能を有つことになつた。これによつて合衆國はキューベ國に對して武力干渉權を確保したのである。

註5 ハイチ共和國は一八〇四年、佛國植民地から獨立。一九一五年十一月ハイチ議會の批准した合衆國との條約は、合衆國がハイチ政府の維持に對して關與する權を認めた。(米國人顧問制の採用)

註6 ドミニカン共和國は一九二四年新憲法を制定し、これによつて合衆國軍隊は同地を撤退した。

註7 Lautensach : S. 190.

註8 この點については、マハーン將軍が重要性を認め、ポルト・リコをスペインから獲得した際、ウインドワード海峡と英領チャマイカ島の位置に着眼し、キューベ島とチャマイカ島との相對的勢力如何を吟味し、合衆國的勢力の充實を力説した。
—Mitz : S. 481.

註9 Mitz : S. 481.

註9 フォンセカ灣 (Fonseca) についての特殊權益とは、同灣の沿岸地域に海軍根據地を建設するため、當該地域に對して、排他的並びに主權的權力を、九十九年の更新條項によつて、合衆國への讓渡を規定してゐる。のみならず、一切の排外的な「財産權」を合衆國に讓渡することを規定してゐる。

註10 Schmolk : S. 586.

ニカラガ運河開鑿計畫案は、合衆國の中米外交官として、一八三四年から一八三六年まで、視察旅行を試みたステイヴンス (John L. Stevens) によつて現地的調査が行はれた。爾來、屢々この計畫がとり上げられたのであつたけれども實施せられるにいたらなかつた。一九三九年五月、ニカラガ大統領アナスタシオ・ソモサ將軍 (Anastasio Somoza) は、華府に赴いて、運河開鑿問題に對して打合せたが、その際、二百五十萬ドルのクレヂットを要求した。この經費には、運河施設に利用すべく豫想されてゐたサン・ファン河の改修費も見込まれてゐたのである。

註11 Lautensach : S. 190.

註12 Schmolk : S. 583.

註13 メキシコ新聞紙は「合衆國共和黨所屬議員ティンカムが、一九三七年一月二十二日、テワンテベック地峽開鑿案を議會へ提案した」と報道して、注目をひいた。元來、この提案は秘密に附せられてゐたのであつたが、メキシコ政府の知るところとなり、新聞紙に報道せられた。この提案の内容は、運河開鑿に必要な地帯を買収するため、合衆國政府は四億九千萬弗を支出し、この事業を負擔するため北米運河株式會社を創立するといふにあつた。(前掲書同頁參照)

註14 Schmolk : S. 583.

第五 結 言

以上の如くにして、中米的陸橋と島嶼弧線とは陸、海、空における南北的結合を合衆國的勢力によつて完成した。フロリダ半島からヴェネヅエラにいたる島嶼弧線はアメリカ地中海の大西洋に對する内線的防備線を形成する。またニューファウンドランド・ベルムダ諸島——英領ギアナを結ぶ英國的勢力線は、これを合衆國的勢力圏へ包括し、大西洋に對しアメリカ地中海を防衛する外線を構成するにいたつた。この外線は、大東亞戰爭前における太平洋上の米國戰略四邊形に對應する大西洋上の進攻線の生起として解せられるであらう。また、中米陸橋は、アメリカ地中海を閉鎖するのみならず、太平洋に對する斜堤的役割を擔當し、パナマ運河は、單なる腫ではなく、出撃口としての機能を發現しつつある。それは、大洋洲のサモア諸島との結びつきを標準のうちにとり入れてあるからである。

前世界大戰において、合衆國の壓力は、南米のアンデス諸國に加へられた。今次のヨーロッパ戰爭を契機として、アメリカ地中海の島嶼空間並びに縁邊陸地空間に存立する諸國は、合衆國の勢力圏に包括せられ、島嶼空間においては、合衆國のバナナ・トラスト、陸地空間においては石油トラストの拘束を受け、アメリカ地中海は、合衆國の利益圈的閉鎖海となつた。それ故に、グラーフは『このやうな合衆國勢力のアメリカ地中海包圍は、合衆國の空間的重心なかんづく人口的經濟的重心を推動せしめるといふ現象を生起した。すなはち、合衆國の空間的重心が大西洋縁邊からミシシッピ河方域へ推動するにいたつたのである。このことはアメリカ地中海の牽引力が合衆國の南部諸州に特殊なる作用を及ぼしたからであり、同時に、これによつて合衆國の大陸横斷的東西的方向線がミシシッピ

——ミシシッピ線といふ南北的方向に轉換した』（前掲論文）と論じてゐる。それ故に、合衆國の「空間的重心の南方移動」と「カリビアン海の閉鎖海」化とは地表の垂直的肢節化に沿うての動態を示してゐるといへよう。かうした空間形象のうちに合衆國的利益圏主義が潜んでゐることを無視できぬ。モンロー主義の基礎的要求は、かくして充足せられた。しかれば、この地中海へ結集せられたる合衆國の勢力は、さらに如何なる方向を目指したか。愈々南下して、南米大陸へは「汎米主義」による壓力を加へ所謂アメリカ的自由を旗印として、さらに東西的方向へ進出し、アジア並びにヨーロッパ大陸の陸地空間並びに縁邊海洋に闖入し、これらの大陸の縁邊諸國家の勢力域において合衆國の成長尖端を設定した。これらの諸國家の防衛圏或はこれに近接して合衆國の成長尖端の設定することは勢力域の緊張——勢力線の衝突を生起する！ かくして、汎米主義は南米大陸の利益圏化を目指しアメリカ的自由は亞歐兩大陸の利益圏化の目論見となる。しかも、兩米大陸以外の他大陸諸國家の防衛圏内へアメリカの成長尖端を設定することは、とりも直さず、全世界をアメリカ的利益圏化せんとするために積極的に暴力行使を敢へてすることを暴露してゐるのである。このことは、善隣外交を無視する恣意的權力的利益圏主義に外ならぬ。かくてアメリカ地中海は、かうした專恣的アメリカ的世界主義に立脚する世界制覇への兵站中樞としての役割を強ひられ歪められた姿相を露呈するにいたつた。

地政動態論（終）

昭和十八年三月十七日印刷
昭和十八年三月二十日發行 (五〇〇〇部)

地政動態論

定價參圓八拾錢

著者

井口一郎

發行者

東京市神田區西神田一丁目三番地
守屋紀美雄
文協會員番號一一九五〇八番

印刷者

東京市京橋區銀座西二丁目三番地
高橋郁

發行所

東京市神田區西神田一丁目三番地
株式會社 帝國書院
電話九段(33)四一二六―九番
振替口座東京六七〇一四番

本書の製本に落丁亂丁のある場合は本社に於て新品と御取替致します

社會式株給配版出本日 九ノ二町路淡區田神市京東 元給配

11-48

-77

